

2018 年度 IR 推進委員会報告書

仙台白百合女子大学

2018年度のIR推進委員会では、①教学委員会担当ワーキンググループ、②入試広報委員会担当ワーキンググループ、③図書・地域貢献研究委員会担当ワーキンググループ、④事務部門担当ワーキンググループといった4つのワーキンググループ(WG)を構成し、IR推進委員会として取り組むべき課題をそれぞれのWGに振り分け、1年に渡り調査等に取り組んできた。その各WGからの報告書を取りまとめ、2018年度IR推進委員会報告書とする。なお、本報告書の構成は次の通りである。

第1部 教学委員会担当WG報告

「CAP・GPAの導入に伴う学習動向に関する調査」結果報告

第2部 教学委員会担当WG報告

「卒業時学生生活調査(4年生対象)」結果報告

第3部 入試広報委員会担当WG報告

志願者及び入学者データ(2014年度～2019年度の推移)

第4部 図書・地域貢献研究委員会担当WG報告

本学の地域貢献研究センターのこれまでの動向と今後の方向性について

第5部 事務部門担当WG報告

「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」に関するアンケート調査報告

第 1 部

「CAP・GPA の導入に伴う学習動向に関する調査」 結果報告

IR 推進委員会
教学委員会担当 WG

本調査は、2013 年度より始まった CAP 制および 2015 年度より始まった GPA によって、学生の自学自習がどのように変化したかを見るための、基礎資料の作成を目的として行われた。学生の自学自習の態度や習慣の変化を把握し、CAP 制・GPA の浸透度合いを確かめるため、毎年度の継続的な実施を行うことを計画している。同時に、学科、入試形態、GPA 等と自学自習の態度や習慣との関連を調べるための基礎資料として用いられることが期待される。

方法

調査対象者

本学 1～4 年生のうち、休学者や留学中の学生を除いた計 897 名に調査への回答をメールで依頼した。その内訳は、1 年生 247 名(人間発達学科:50 名、心理福祉学科:41 名、健康栄養学科:81 名、グローバル・スタディーズ学科:46 名)、2 年生 170 名(人間発達学科:38 名、心理福祉学科:35 名、健康栄養学科:62 名、グローバル・スタディーズ学科:35 名)、3 年生 222 名(人間発達学科:58 名、心理福祉学科:38 名、健康栄養学科:79 名、グローバル・スタディーズ学科:47 名)、4 年生 258 名(人間発達学科:86 名、心理福祉学科:43 名、健康栄養学科:82 名、グローバル・スタディーズ学科:47 名)であった。また、回答の依頼は学内掲示、ポータルサイト「ゆりっぽ」でも行った。調査対象者のうち、236 名より回答が得られ、回答率は 26.3%であった。その内訳は表 1 に示した。

調査項目

調査項目は、(1) 所属等について、(2) 日々の学習状況について、(3) 授業の予習復習について、(4) CAP 制について、(5) 学習計画について、(6) GPA と成績評価について、(7) 自由回答意見の、大きく 7 つから構成された。

(1)の「所属等について」では、所属学科、学年、入試時の形態、居住形態(自宅か独り暮らしか)を、選択肢から選択する方法によって尋ねるものであった。

(2)の日々の学習状況については、まず「授業以外の週当たりの勉強時間」(自習時間)を数字で回答してもらった。次に、授業時間以外の勉強内容について選択肢の中から複数回答可で回答してもらうものであった。選択肢は、「授業の予習」、「授業の復習」、「授業の宿題」、「授業に関連する調べもの」、「資格試験のための勉強」、「授業や資格と関係のない勉強」、「授業時間以外には勉強をしない」の 7 つであった。最後に、自分の授業以外の勉強時間が十分と思うかどうかについて、「十分だと思う」、「十分だと思わない」の 2 択で回答を求めた。

(3)の授業の予習・復習については、まず、履修している授業でどのくらい予習・復習をしているかを、「ほとんどの授業で予習や復習をしている」、「半分以上の授業で予習や復習をしている」、「予習や復習をしている授業は半分以下である」、「予習や復習をしている授業はほとんどない」の 4 択で回答を求めた。その後、「予習や復習をするのはなぜか」、「予習や復習をしないのはなぜか」、「予習や復習をするようになるにはどうすればよいと思うか」について、それぞれ複数選択可で回答を求めた。これら 3 つ

表 1. 学科・学年ごとの回答者数 (人)

	1 年	2 年	3 年	4 年
人間発達学科	13	8	8	9
心理福祉学科	13	13	9	10
健康栄養学科	25	30	30	14
グローバル・スタディーズ学科	22	13	9	10

の質問に対する選択肢は、表 2 にまとめた。

(4)の CAP 制については、まず、その制度が設けられた理由を知っているかを、「知っている」、「多分知っている」、「多分知らない」、「知らない」の 4 択で尋ねた。次に、CAP 制があることについての意見を、「CAP 制はあった方がよい」、「CAP 制はない方がよい」、「判断できない」の 3 択で尋ね、その理由について自由記述で回答を求めた。

(5)の学習計画については、まず、学習計画を提出して年 50 単位以上を履修登録したことがあるかを、「ある」、「ない」、「覚えていない」の 3 択で尋ねた。次に、「ある」と回答した回答者に対して、学習計画通りに自習をしたかどうかを、「ほとんど「学習計画」通りに自習を行った」、「半分くらいは「学習計画」通りに自習を行った」、「ほとんど「学習計画」通りに自習をしなかった」の 3 択で尋ね、その理由について自由記述で回答を求めた。

(6)の GPA と成績評価については、まず、成績評価で特に何を気にするかについて、「100 点満点の素点」、「S、A、B、C の評価」、「単位が取れたかどうかだけ」、「成績評価は気にしない」の 4 択で尋ねた。次に、本学の成績評価が全体的に厳格と思うかについて、「厳格だと思う」、「やや厳格だと思う」、「やや厳格さに欠けると思う」、「厳格だとは思わない」の 4 択で尋ね、その理由について自由記述で回

表 2. 授業の予習・復習についての質問に対する選択肢

Q あなたが授業の予習や復習をするのはなぜですか？

- ・ 授業だけでは理解が十分ではないから
- ・ 授業で予習や復習をすることを求められるから
- ・ 予習や復習でやるべきことが明確だから
- ・ 授業に興味があってもっと調べたいから
- ・ まわりのみんながやっているから
- ・ 時間が余っているから
- ・ 予習や復習は一切やらない
- ・ その他

Q あなたが授業の予習や復習をしないのはなぜですか？

- ・ 授業だけで十分と思うから
- ・ 授業で予習や復習をすることを求められないから
- ・ 予習や復習で何をやったらいいかわからないから
- ・ 授業に興味がないから
- ・ まわりのみんながやっていないから
- ・ 予習や復習をする時間がないから
- ・ めんどくさいから
- ・ 予習や復習は必ずする
- ・ その他

Q 授業でもっと予習や復習をするようになるには、どうすればいいと思いますか？

- ・ 授業で予習や復習の課題を提示する
 - ・ 予習や復習が必要な授業内容にする
 - ・ 授業をもっと興味がわくようなものにする
 - ・ 予習や復習のやり方を教える
 - ・ 予習や復習をすることが当たり前の雰囲気を作る
 - ・ 予習や復習ができる時間的余裕を設ける
 - ・ その他
-

答を求めた。同様に、本学の成績評価が全体的に妥当と思うかについて、「妥当だと思う」、「やや妥当だと思う」、「やや妥当さに欠けると思う」、「妥当だとは思わない」の4択で尋ね、その理由について自由記述で回答を求めた。

最後に(7)として、CAP 制、学習計画、授業以外の自習時間についての意見を自由記述で回答してもらった。

これらの質問は、Google Form のサービスを利用して、インターネット上で PC やスマートフォンを使って回答できるように設計された。回答に際しては、本学の gmail アカウントでのログインを要求し、本学メールアドレス(学籍番号が識別できる)が回答とともに記録されるようにした。これは、これらの回答を今後、GPA や履修登録状況などの他のデータと照合したり、1 年ごとに同様の調査を行って年度ごとの変化を追って分析できるようにするためであった。回答に先立って、これらの回答が個人の評価や指導には用いられないことを説明し、個人の識別が可能である点についての承諾を得てから、質問への回答に移るようにした。

結果

所属等について

回答者の所属学科と学年は表 1 にすでに示した通りであるが、それら以外の属性については以下の通りであった。まず、入試形態については、一般入試(センター試験を含まない):65 名、指定校推薦入試:57 名、姉妹校推薦入試:18 名、公募推薦入試:27 名、AO 入試:30 名、センター試験入試:35 名であり、一般入試とセンター試験の両方に合格して入学した者など、これらの分類に当てはまらない学生が 4 名であった。次に居住形態については、自宅と回答した者が 153 名、一人暮らしとの回答が 77 名であり、残りの 6 名が、兄弟や姉妹との同居などの「その他」の回答であった。

日々の学習状況について

1 週間当たりの自習時間 1 週間あたりの授業時間以外の学習時間について、回答者全体の度数分布を図 1 に示した。なお、1 名 160 時間との回答があったが、物理的にはほぼ不可能な時間と判断し、

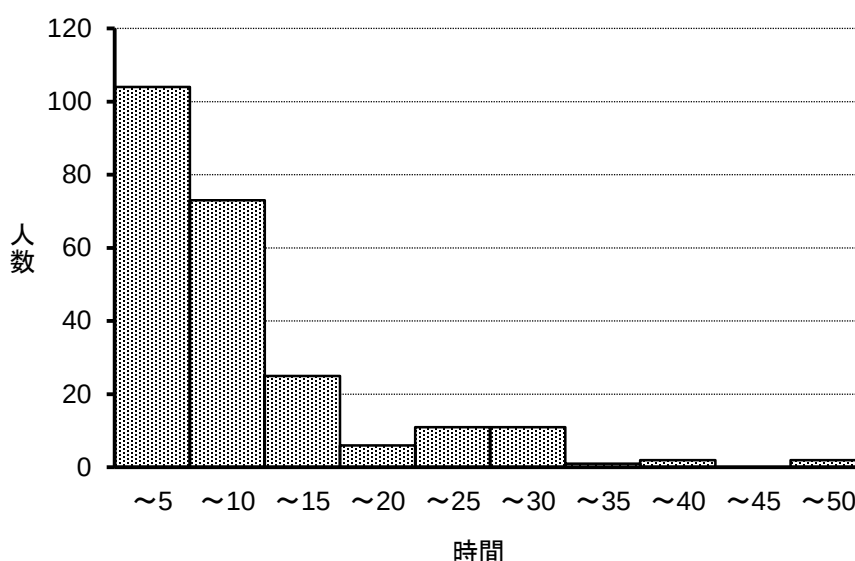


図1. 1週間あたりの授業時間以外の勉強時間

以下の分析から除外した。5 時間以下の自習時間の学生が最も多く、次いで 10 時間以下、15 時間以下の自習時間の学生が多かった。自習時間が 15 時間以下の学生で、全体の約 85%を占めた。平均の自習時間は 9 時間強(約 9 時間 13 分)であったが、中央値が 7 時間であり、自習時間は右に裾が長い分布となった。なお、最も多かった回答(最頻値)は 10 時間であった。

授業時間以外の勉強時間に行っている勉強 授業時間以外の勉強時間に行っていることについて、各選択肢の回答者数を図 2 にまとめた。回答者の 80%弱(78.4%)が授業の宿題を行っているとの回答であった。次いで、授業の復習、資格試験のための勉強、授業の予習と続いたが、いずれの回答者も 50%には満たなかった(それぞれ、47.9%、31.8%、30.1%)。

授業時間以外の勉強時間が十分かどうか 授業時間以外の勉強時間が十分かどうかを尋ねた結果について、回答者数と割合を図 3 にまとめた。十分だと思わない学生が 8 割弱となり、ほとんどの学生が、授業以外の自習時間が十分ではないと自覚していることがうかがえた。

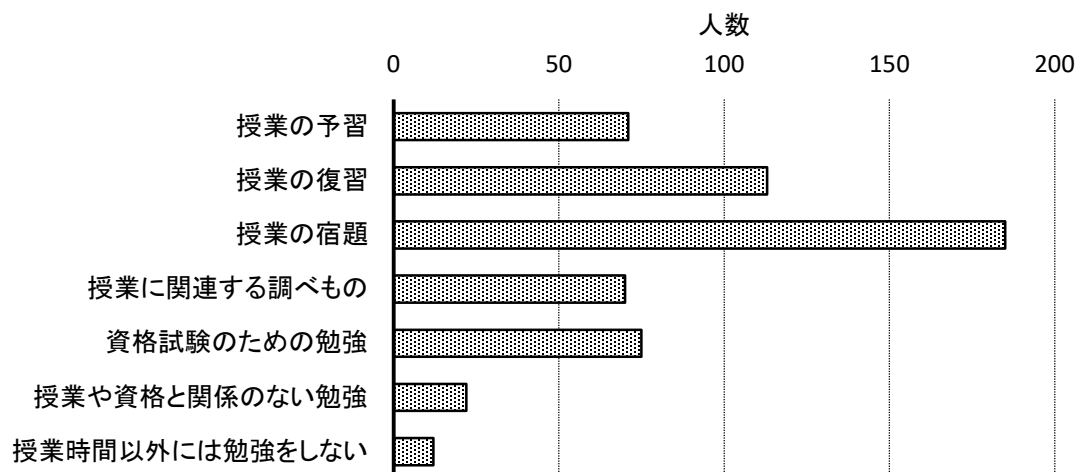


図2. 授業時間以外の勉強の内容(複数回答)

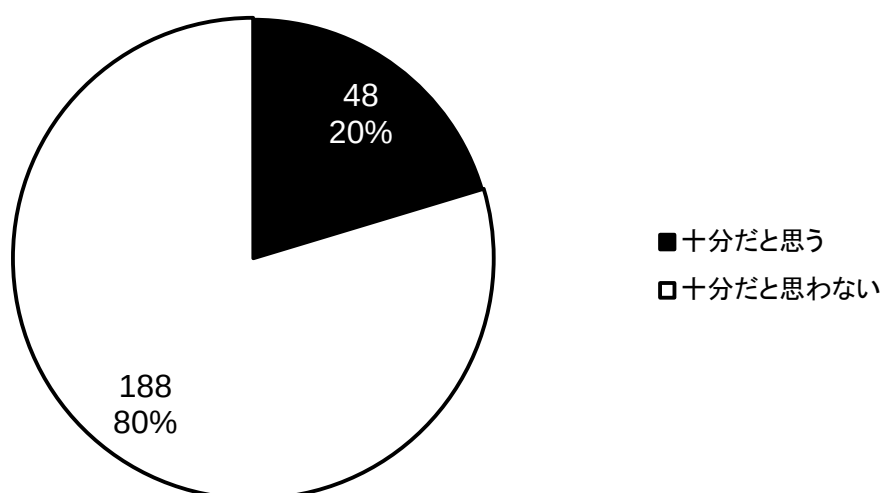


図3. 授業以外の勉強時間が十分か

授業の予習・復習について

予習・復習をしている授業 予習・復習をしている授業がどのくらいあるかについて、各選択肢の回答者数と割合を図 4 にまとめた。約 7 割の回答者が予習・復習をしている授業が半分以下または予習・復習をしている授業がほとんどないという回答だった。

予習・復習をする理由 予習や復習をする理由を複数回答で尋ねた選択肢ごとの回答者数を図 5 にまとめた。「授業で予習や復習をすることを求められるから」との回答が最も多く、43.2%の回答者がそのように回答した。次いで 39.4%の回答者が「授業だけでは理解が十分ではないから」との回答であった。一方、「予習や復習は一切やらない」と回答した者も 17.8%いた。

予習・復習をしない理由 一方、予習・復習をしない理由を複数回答で尋ねた選択肢ごとの回答者数を図 6 にまとめた。28.4%の回答者が「予習や復習をする時間がないから」との回答であった。次いで、26.3%の「面倒くさいから」、25.8%の「授業だけで十分と思うから」との回答が続いた。一方、「予習や復習は必ずする」との回答も 11.4%あった。

もっと予習・復習をするようになるには 授業でもっと予習や復習をするようになるには、どうすればいいかについて尋ねた選択肢ごとの回答者数を図 7 にまとめた。最も多かった回答は「授業をもっと興味がわくようなものにする」と「予習や復習ができる時間的余裕を設ける」の 2 つで、ともに 41.1%の解答

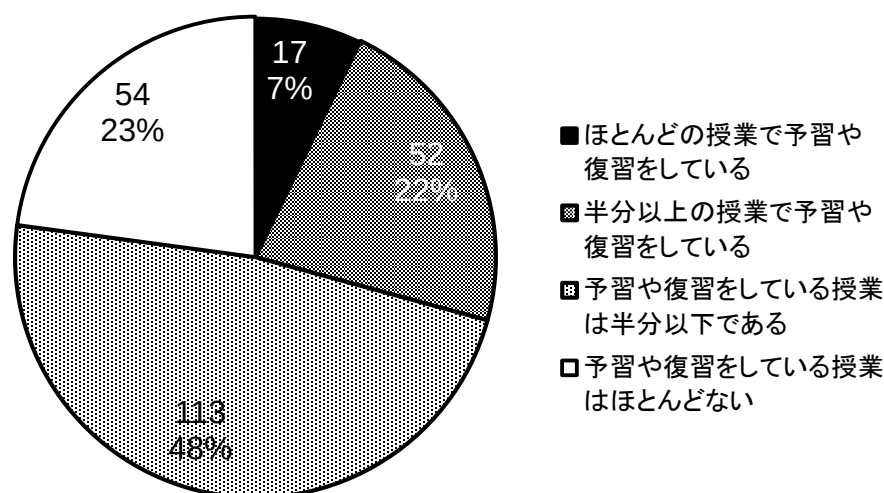


図4. 予習・復習をしている授業がどれくらいあるか

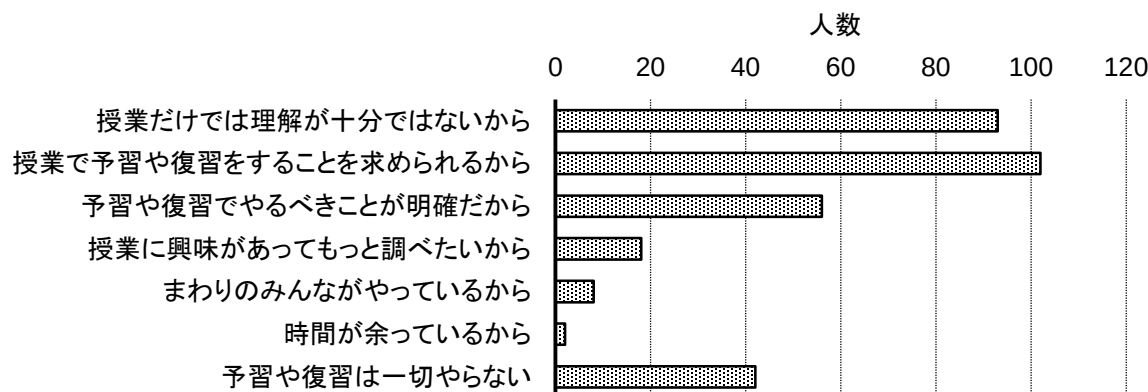


図5. 授業の予習や復習をする理由

であった。次いで、「授業で予習や復習の課題を提示する」の 33.4%が続いた。「予習や復習をすることが当たり前の雰囲気を作る」も 22.9%が回答、「予習や復習が必要な授業内容にする」、「予習や復習のやり方を教える」も、それぞれ 17.8%、17.4%の解答があり、極端に少ない回答は見られなかった。

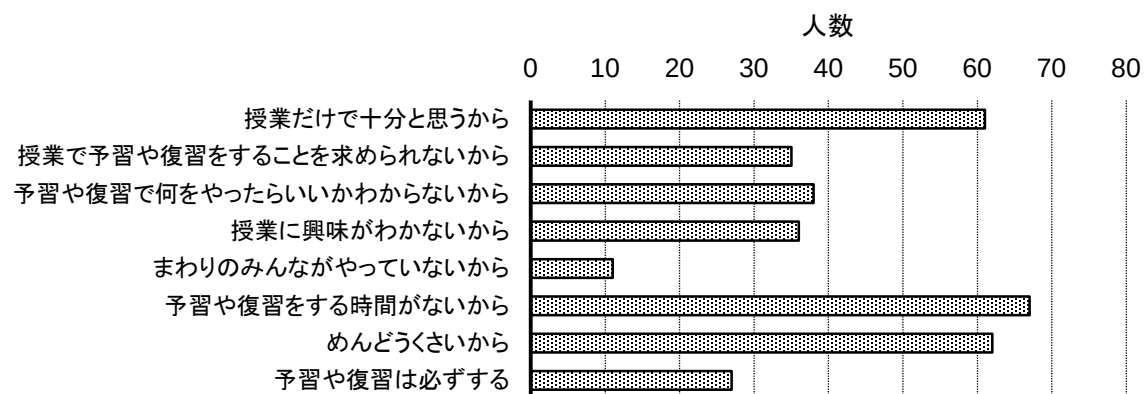


図6. 授業の予習や復習をしない理由

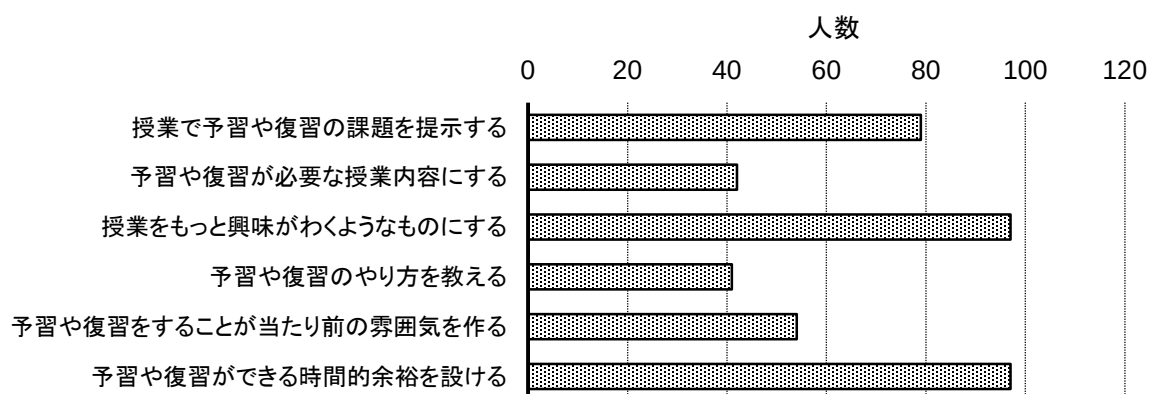


図7. 予習や復習をするようになるには

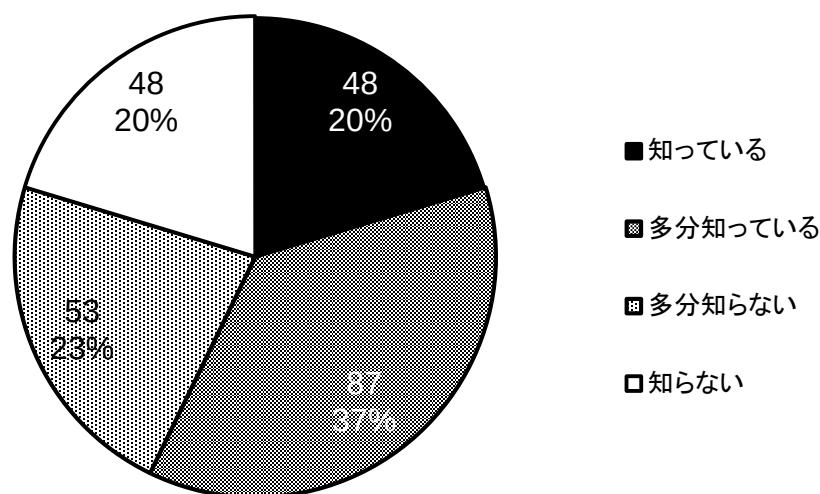


図8. CAP制が設けられた理由を知っているか

CAP 制について

CAP 制が設けられた理由 CAP 制が設けられた理由に対する理解を聞いた質問に対する回答について図 8 にまとめた。約 6 割弱の回答者が「知っている」、「多分知っている」との回答であったが、4 割強の回答者が「多分知らない」、「知らない」との解答であった。

CAP 制はあった方がよいか 続いて、CAP 制に対する意見として、CAP 制はあった方がよいかない方がよいかに対する回答について図 9 にまとめた。半数以上の 64.8%が「判断できない」との回答であったが、残りの解答の約 4 分の 3 は「あった方がよい」との解答であった。それぞれの回答者に対して、その理由を自由記述で尋ねたところ、「判断できない」との回答の理由として多かったものは、CAP 制について理解していない、わからないというものであった。また「あってもなくても変わらない」、「メリット・デメリットの両面がある」との回答も複数あった。「CAP 制はあった方がよい」との回答の理由として多かったものは、「授業の取りすぎを防げる」、「無理・無計画な履修登録を避けられる」といった理由を挙げたものであった。続いて、「しっかりと勉強に取り組める」、「授業に対する関心を向上させる」などの勉学意欲や意識に関わる理由も見られた。また、「基準や目標になる」や「授業を取る目安になる」などの時間割を作る上での便益を挙げたものもあった。逆に「CAP 制はない方がよい」との回答の理由としては、「資格で必要な単位が多い」、「取りたい科目が取れない」、「もっと科目を取りたい」といったもの、「単位を取れるときにとって後で楽をしたい」といったもの、また、CAP 制の意義そのものに疑問を唱えるものも多かった。「学習計画が面倒である」との理由もあった。なお、これらの自由記述による回答は、個人名や個別の授業を名指ししている場合はその部分を伏せた上で、付録として最後にリストにまとめた。

学習計画について

学習計画を提出したことがあるか 学習計画を提出し、上限単位数を超えて履修登録をしたことがあるかという質問に対する回答について図 10 にまとめた。6 割近く(58.1%)の回答者が「ある」との回答であった。

学習計画通りに自習をしたか 続いて、「ある」との回答者を対象に、学習計画通りに自習を行ったかを尋ねた結果を図 11 にまとめた。「ほとんど学習計画通りに自習を行った」と回答した学生は 1%に満たず(0.7%)、4 割強(42.3%)の学生が「半分くらいは学習計画通りに自習を行った」、6 割近く(56.9%)の回答者が、「ほとんど学習計画通りに自習を行わなかった」と回答した。それぞれの回答者に対して、その理由を自由記述で尋ねたところ、「半分くらいは学習計画通りに自習を行った」との回答の理由とし

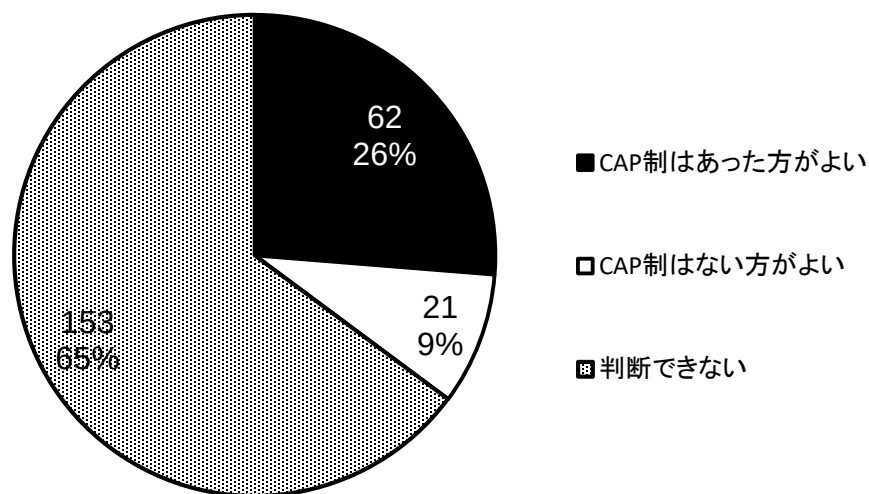


図9. CAP制はあった方がよいか

ては、時間がないというものが多く、続いて予定の変更という回答が続いた。「ほとんど学習計画通りに予習をしなかった」との回答の理由としても時間がないという回答が多く、予定の変更という回答がそれに続いたが、計画に無理があったという理由が最も多かった。なお、これらの自由記述による回答は、個人名や個別の授業を名指ししている場合はその部分を伏せた上で、付録として最後にリストにまとめた。

GPA と成績評価について

成績評価で何を特に気にするか 成績評価について、特に何を気にするかという質問に対する回答について図 12 にまとめた。6 割強(61.9%)の回答者が「S、A、B、C の評価を気にする」との回答であった。続いて、「単位が取れたかどうか」(20.3%)、「100 点満点の素点による点数」(16.9%)との回答であった。「成績評価は気にしない」との回答は 1%未満(0.8%)であった。それぞれの回答者に対して、その理由を自由記述で尋ねたところ、「100 点満点の素点による点数を気にする」との回答者では、細かく見

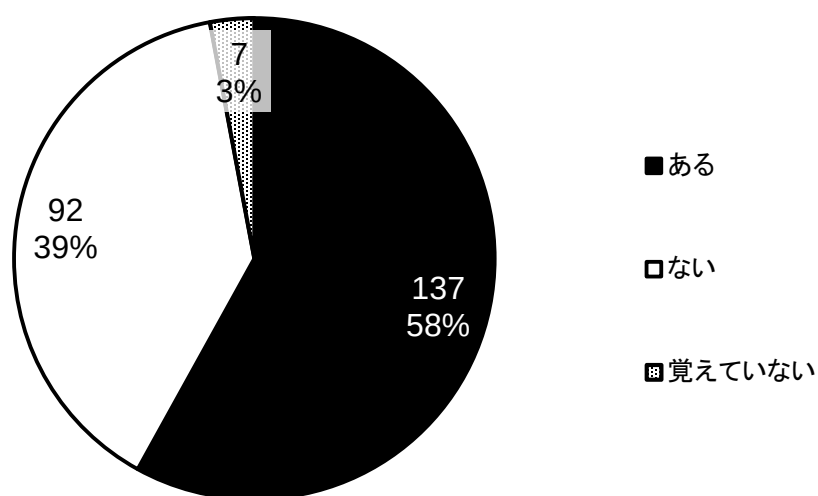


図10. 学習計画を提出したことがあるか

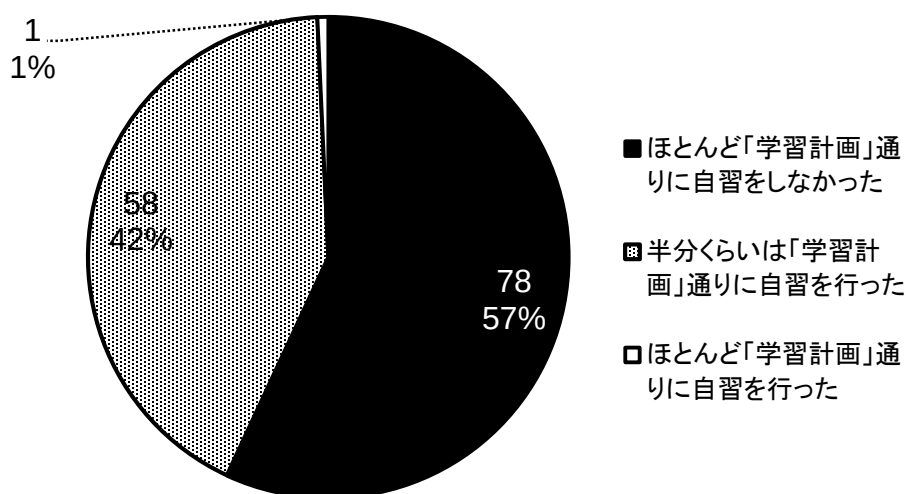


図11. 学習計画通りに自習をしたか

れる、大学以前からの成績表記だったから、などの回答が見られた。「S、A、B、C の評価を気にする」との回答者では、GPA に関わるからとの回答が多く見られた。「単位が取れたかどうかだけを気にする」との回答者では、単位を取れないと卒業できない、資格が取れないといった回答が主であった。なお、これらの自由記述による回答は、個人名や個別の授業を名指している場合はその部分を伏せた上で、付録として最後にリストにまとめた。

成績評価は厳格だと思うか 本学の成績評価が厳格と思うかについて問うた質問に対する回答について図 13 にまとめた。「厳格だと思う」、「やや厳格だと思う」で合わせて 6 割程度(それぞれ、10.6%、49.2%)回答であったが、「やや厳格さに欠けると思う」、「厳格だとは思わない」との回答も、合わせて 4 割程度(それぞれ、25.4%、14.8%)あった。続いて、その理由を尋ねたところ、「やや厳格だと思う」との回答者の中にも、教員間の評価のばらつきを指摘するものはいくつか見られた。「やや厳格さに欠けると思う」、「厳格だとは思わない」との回答者では、前述の教員間の評価のばらつきに対する指摘に加え、

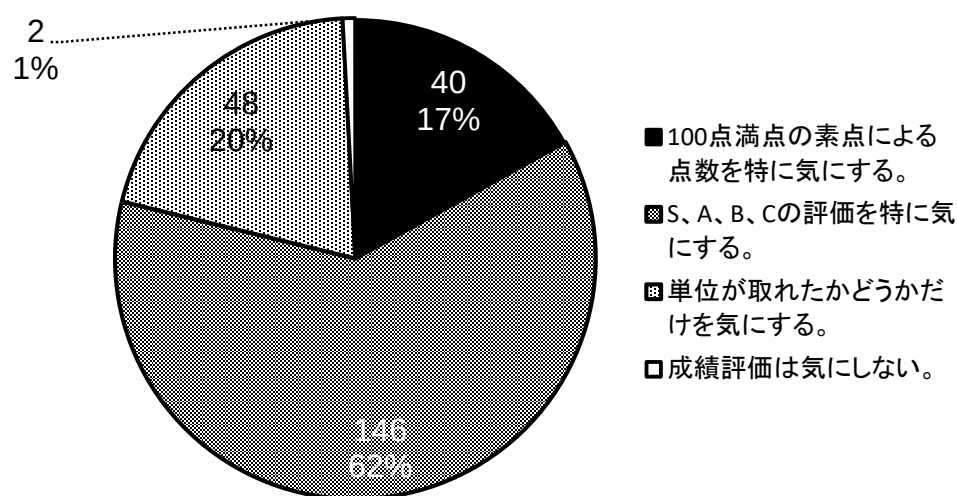


図12. 成績評価で何を特に気にするか

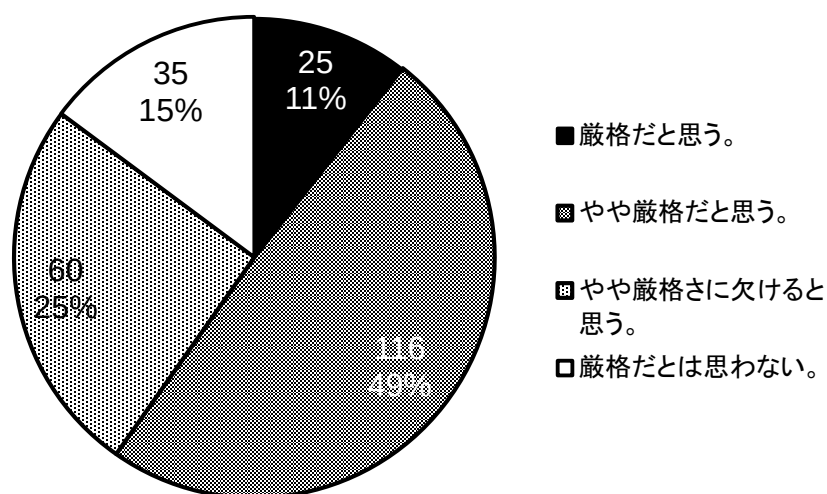


図13. 成績評価は厳格だと思うか

欠席状況や授業態度の良くない学生に対する甘さ、点数の根拠のあいまいさ、単位取得の楽さに関する回答も見られた。なお、これらの自由記述による回答は、個人名や個別の授業を名指ししている場合はその部分を伏せた上で、付録として最後にリストにまとめた。

成績評価は妥当だと思うか 本学の成績評価が妥当と思うかについて問うた質問に対する回答について図 14 にまとめた。「妥当だと思う」、「やや妥当だと思う」で合わせて 8 割を超えた(それぞれ、25.0%、56.4%)。「やや妥当さに欠けるところ」との回答は 2 割弱(17.4%)、「妥当だとは思わない」との回答は 1%程度(1.3%)にとどまった。続いて、その理由を尋ねたところ、「妥当だと思う」、「やや妥当だと思う」との回答者では、きちんと評価してくれる、頑張りが反映されている、納得できる、との理由であった。ただ、「やや妥当だと思う」との回答者の中には、教員間の評価の差や評価基準の不明確さを指摘するものもあった。「やや妥当さに欠けるところ」、「妥当だとは思わない」との回答者では、前述の教員間の評価の差、評価基準のあいまいさに対する指摘に加え、評価の甘さ(試験の成績が悪いのに評価が高

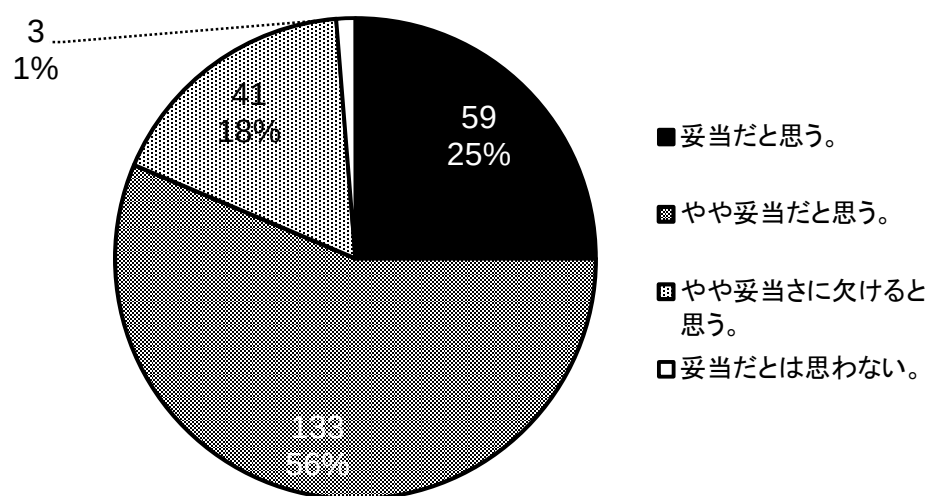


図14. 成績評価は妥当だと思うか

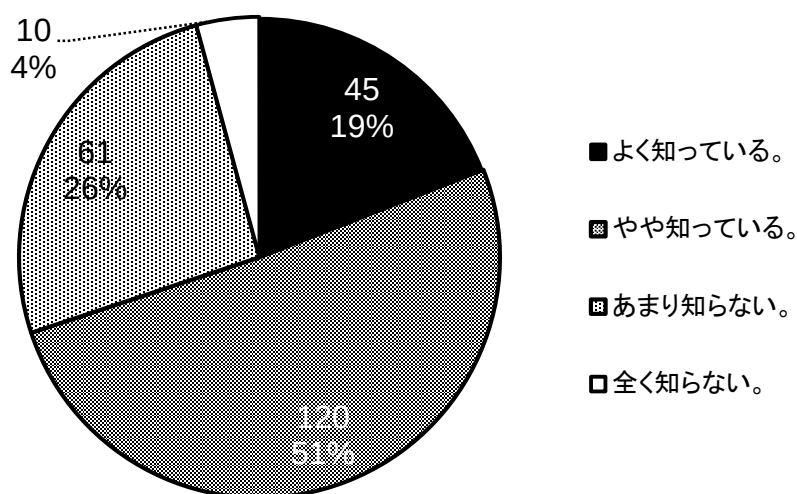


図15. GPAについて知っているか

いなど)、フィードバックがないことに関する回答も見られた。なお、これらの自由記述による回答は、個人名や個別の授業を名指ししている場合はその部分を伏せた上で、付録として最後にリストにまとめた。

GPAについて知っているか GPAについて知っているかを問うた質問に対する回答について図 15 にまとめた。「よく知っている」、「やや知っている」で合わせて 7 割程度であった(それぞれ、19.1%、50.8%)。「あまり知らない」、「全く知らない」との回答も 3 割程度(それぞれ、25.8%、4.2%)あり、GPA による成績評価がまだ完全には浸透していない様子がうかがえた。

GPAによる評価についてどう思うか GPAによる評価についてどう思うかを問うた質問に対する回答について図 16 にまとめた。「判断できない」との回答が 5 割を超えた(57.2%)。それ以外の回答では、「あった方がよい」との回答が 3 割以上(35.6%)、「ない方がよい」との回答は 1 割を下回り(7.2%)、「あった方がよい」との回答が 5 倍近く多かった。続いて、それらの理由を尋ねたところ、「あった方がよい」との回答者では、成績のレベルの表示としてわかりやすい、との理由が多かった。また、モチベーションや、就活と関連付けた理由も見られた。「ない方がよい」との回答者の理由は少なかったが、評価自体の必要性を問うような回答も見られた。「判断できない」との回答者の大半は、わからないとの理由であった。そのほか、必要性がわからない、利点も欠点もあるとの回答もあった。なお、これらの自由記述による回答は、個人名や個別の授業を名指ししている場合はその部分を伏せた上で、付録として最後にリストにまとめた。

自由記述

最後に、CAP 制、学習計画、成績評価と GPA、授業時間以外の自習時間について意見や疑問を自由記述で回答を求めたところ、少ないながらも様々な回答が得られた。個々の回答については、固有名詞や個々の授業名については伏せた上で、最後に付録としてまとめたが、ここでは分類だけ記す。

最も多かった回答は、CAP 制や学習計画などの制度に関するものであった。特に学習計画や予習・復習の時間に無理があるとの回答が多く見られ、関連して自習時間を取りやすい時間割編成に関する要望もあった。また、テストの返却の要望や自習のアドバイスを求めるなど、自分の勉強方法の改善につなげたいとの前向きな意見もいくつか見られた。また、評価に関する要望もいくつか見られ、その中には複数担当の場合の評価のブレや、評価の公平性に関する疑義もあった。そのほか、図書館やコンピュータ演習室、自習室などの設備に関する意見や、授業アンケートの結果の反映についての要望、授業の仕方や教員に関する意見も見られた。

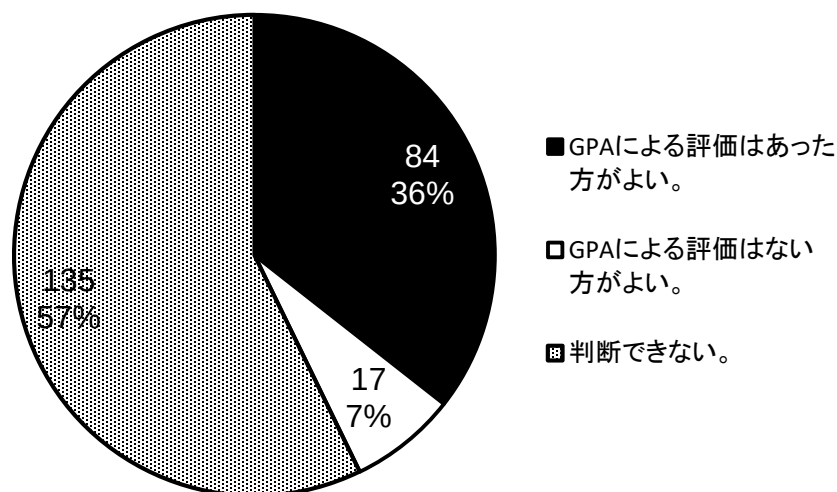


図16. GPAによる評価についてどう思うか

考察

今回の調査によって、学生の授業以外の自習時間についてわかったことをいくつかまとめたい。まず、学生の自習時間は平均して週あたり 9.22 時間であり、2015 年度の調査における 8.92 時間をわずかに上回る結果となった。ただ、この差はせいぜい週あたり 18 分程度であり、1 日にならせば 2～3 分程度の差である。ほとんど自習時間は増えていないといってよいであろう。また、全国的な調査との比較で見ると、全国大学生生活協同組合連合会が行った第 54 回学生生活実態調査では、2018 年度のデータで、大学生の授業以外の 1 日の平均勉強時間（「予習復習などの大学の勉強」と「大学以外の勉強」を加えたもの）は 78.9 分であった（全国大学生生活協同組合連合会『第 54 回学生生活実態調査の概要報告』より）。これは週あたりに換算すると 9.21 時間となり、本学学生の授業以外の学習時間とほぼ等しい結果が得られた。これもここ数年ほとんど変わっておらず、CAP 制など、予習復習の必要性がさかんに述べられている割には、学生の行動には変化がない傾向が、本学においても全国的にも見て取れる。本学においては、8 割の学生が自分の学習時間を十分だと思わないと回答していることから、学習時間の不足を自覚しているものの、それが行動に反映されていない状況がわかる。

さて、それでは学生の自習時間を増やすためにはどのような方策が必要であろうか。学生の回答からそのヒントを探してみたい。まず、予習や復習をする理由を訪ねた結果では、「求められるから」との回答が 4 割を超えた。このことから、ある程度予習復習を要求する必要性があることがうかがわれる。また、「理解が十分ではないから」との理由も 4 割近くあった。ここから、学生が自ら学ぼうとする意欲がないわけではないこともうかがえる。しない理由として「時間がない」、「めんどくさい」に続いて、「授業だけで十分と思う」ということがあることから、授業内容も授業だけで完結するのではなく、予習復習を必要とするよう、少し負荷をかける必要があるのかもしれない。予習や復習をするようになるにはどうしたらよいかを尋ねた質問の回答では、「興味がわくようなものにする」との回答に次いで、「時間的余裕を設ける」、「予習や復習の課題を提示する」とあることから、予習復習の時間をうまく設けつつ、授業に加えて予習と復習の課題を具体的に提示することがよいであろう。授業改善によって、予習復習を促すことのできる可能性が示唆されていると言える。

次に CAP 制についてであるが、導入して 5 年以上が経ったにも関わらず、いまだに 4 割以上の回答者が「知らない」、「多分知らない」との回答であった。教学部では毎年 4 月のオリエンテーション期間に「教務の時間」を設け、全学年に CAP 制の説明をしている。また、履修指導においても、各学科で CAP 制については説明しているはずである。CAP 制の名称を知らないだけか（実際には 48 単位までの制限があるという制度の内容は知っている）、CAP 制を知らなくても実害がないか（48 単位以上履修することがない）、知らない理由が不明であるが、今後も説明を続けていく必要はあろう。CAP 制があった方がよいかどうかについては、半数以上がわからないとの回答であったものの、残りの 4 分の 3 はあった方がよいとの回答であったことから、ある程度必要性は理解されているものと思われる。一方、人数としては少なかったが、取りたい科目が取れない、学習計画が面倒だ、などの理由で、CAP 制に批判的な声があったことも無視はできない。

学習計画については、6 割近くの学生が学習計画を提出した経験があったが、そのうちの半数以上がほとんど学習計画通りに自習をしなかったとの回答であった。学習計画が有名無実化している現状がうかがえる。時間がない、計画に無理があるとの理由が多く、CAP を超えての学習を遂行することが極めて困難であることがわかる。理想的には、自分の余った時間を考慮しながら、無理のない範囲で科目を履修し、無理のない計画が立てられる場合に学習計画を立てて、CAP 上限を超える科目を履修しなければならない。ところが実際は、多くの科目を履修する必要に迫られ、自分の余力などお構いなしに学習計画を立てることを強いられてしまうケースが多いと考えられる。また、実際には学習計画通りに学習

をしなくても、授業も理解できるし単位も取れてしまうという実態がある。この意味では、授業がCAP 制に追い付いていないというのが現状ではないだろうか。

成績評価については、厳格さ、妥当さともに6割程度の学生が「そう思う」、「ややそう思う」との回答をしていることから、ある程度は厳格で妥当な評価がされているとの学生の認識があると言える。ただ、「そう思わない」との回答の理由の中には、共通して評価のばらつき、評価基準のあいまいさ、評価の甘さを指摘するものがあり、教員としては肝に銘じておかなければならない。また、評価方法としてのGPAについては、わかりやすさを評価するものが多かった。また、就活との関連付けで、その必要性を理解する学生もいた。

全体を通して今回の調査から見えてきたものは、制度としてのCAP やGPA に対して、授業やカリキュラム、成績評価が追い付いていない実態である。学生の意見の多くはその点を反映しているのではないであろうか。例えば、授業が予習復習を求めている、予習復習をしなくてもよい評価が得られるというのであれば、誰も予習復習などしないであろう。その中でCAP 制などあっても、科目履修の自由を縛る理不尽な制度としか認識されまい。カリキュラムも、予習復習の時間お構いなしに48単位を超える履修を求めるのであれば、学習計画も履修登録のためだけの形だけの提出書類になりかねず、その割に細かいため、学習計画の作成が意味のない苦行になってしまう。成績評価についても教員間のばらつきが大きい、評価が甘い、評価基準が不明という状況では、GPA が示す評価も信頼できない。むしろ、そのようなGPA によって進級指導や学生奨励賞が決まってしまうのでは、不満の矛先にもなってしまう。こういった不満の声は、自由記述からするとごくわずかに見られるだけであるが、今回のデータからはそれ以上に潜在的な問題として深刻であることが読み取れないだろうか。

今回はIR 活動の一環として、CAP 制・GPA 導入の影響を調査した。今回の報告では、結果を単独の調査としてまとめたが、むしろこれらのデータは、他の調査やデータと合わせて活用することで、今後の本学の教学の改善につながる様々な資料を提供できると思われる。例えば、今回の回答とGPA などの成績を結び付けて検討することや、入試結果、卒業後の進路と関連付けることも可能である。そのために学生の回答は、学籍番号込みで収集している。IR の次の段階として、データの収集・整理だけでなく、それらのデータを問題解決のために組み合わせて活用していくことが求められる。

- ・しっかりと理解出来ていないため
- ・そもそもそれが何なのか分からない
- ・入学して何もわからない時に説明されて、cap 制度についてどのようなものか覚えていないから。
- ・覚えてない
- ・ちゃんと知っていないから
- ・どういうものなのかをよく理解していない
- ・まだ CAP 制のことがよく分からないから
- ・完全に理解できていると思わないから答えられない
- ・仕組みをよく分かっているから
- ・詳しく分からず判断できないから。
- ・設けられている理由を知らないから
- ・ちゃんとした理由を知らないから
- ・知らないから
- ・知らなければ判断することはできないから。
- ・分からない
- ・メリットもデメリットもよく分かっているから
- ・私はあってもなくてもいいかなと思ったから
- ・制度が学生にとって良いのか悪いのか分からないから。
- ・あってもなくてもやらない人はやらないから。
- ・私は CAP 制に該当しないから
- ・まだ 1 年生で CAP 制を経験したことがないから
- ・自分には縁のない話なのでシステムを知っていても実際どうなのかイメージが湧かない
- ・必要な人と必要じゃない人がいると思うから。
- ・取得単位数が多い人や一人暮らしの人が他の人と比べられることについて意味がわからないから。しかし、制度があることでしっかり単位を取れているかの判断基準であったり、学習意識が高まるように感じた。
- ・1 年間に履修できる単位数が決まっていることで良いと感じること、また、悪いと感じることの両方があるため。
- ・CAP 制度により予習復習に取り組む学生がいる一方で同じくらいの学生が予習復習に取り組んでいないのではと思ったから。
- ・単位をとりすぎないようにすることで、時間的余裕もできるし、無理しすぎない程度にできるから。しかし、その制度があることによって、なにか得するかというとも言えないから。
- ・単位の選択数が加味されていないため成績の良し悪しがわかるか分からない
- ・あまり重要視していない
- ・特に興味がないから
- ・特にない

付録 2:「あなたは「学習計画」通りに自習をしましたか？」の問いに対する理由

◎「ほとんど「学習計画」通りに自習を行った」との回答の理由

- ・それが普通だと思っていたから。

◎「半分くらいは「学習計画」通りに自習を行った」との回答の理由

- ・ 1 つの科目に時間を多く要したり、課題の量によって時間も変動していたため
- ・ 1 日の授業で精一杯だった。
- ・ あまり器用に物事をこなせるタイプではないから
- ・ あまり時間がなかったから
- ・ アルバイトや学生会の活動を始めて学習塾計画を提出した時よりもやるが増えたから。
- ・ アルバイトを始め、帰宅時間が不規則になってしまった
- ・ スマホ等を使用しているから
- ・ バイトで忙しい
- ・ 家に帰ってくると勉強するやる気がなくなってしまうため、勉強する時間がズレてしまう
- ・ 学習計画で立てた時間通りに毎回転くことはできないため。
- ・ 学習計画を提出したときよりもバイトなど活動の幅が広がったから
- ・ 学問とアルバイトの生活でできない日もあった
- ・ 計画を立てた当初と環境等が変化したため。
- ・ 計画通りでは時間的余裕がなく寝る時間さえなくなるから。
- ・ 計画通りにうまくいかないことがある。急に別の予定が入り自習が出来ないことがある。
- ・ 今年は学習計画表を出さずに 50 単位以上取ったため計画をあまり立てず時間があったら学習するようにしているからまちまちである。
- ・ 時間が足りない。課題やその他の勉強でいっぱい
- ・ 時間が無い
- ・ 時間が無かった
- ・ 時間に余裕が持てなかったから
- ・ 自分のペースや気分でしたいときがあるから
- ・ 実際生活してみると、勉強の余裕がないときが多いから。
- ・ 授業疲れなどがあり、平日はあまり勉強できなかった
- ・ 前期はしっかりと自習できたが、後期になり自習を必要とする授業が少なく感じたため、試験のための勉強や興味のある分野のみ行っている。
- ・ 友人との時間やアルバイトなど、欠かせない用事ができたから

◎「ほとんど「学習計画」通りに自習をしなかった」との回答の理由

- ・ 1,2 年の授業がほぼフルコマで家に帰っても予習復習する時間がないくらい忙しかったから
- ・ 1 日を計画して過ごさないから。
- ・ 1 年生の時は一人暮らしの生活に慣れていなかったから。
- ・ 64 単位登録したので深夜まで起きたりしていないと、予習復習出来ない計画になり、出来ない。
- ・ アルバイトとの両立ができない 時間がない
- ・ アルバイトなど予定通りにいかないものがあつたから。
- ・ アルバイトや様々な予定がある中で授業外に何十時間も学習を設ける時間がないから。
- ・ そんなに時間をかけて予習復習はできなかったから
- ・ バイトもあつてそこまでの時間をとれない
- ・ やらなければいけないことが多すぎて、ある教科に偏っていたか、
- ・ 下校の時間が定まっていなかったから。
- ・ 学習計画の予定が厳しかったから
- ・ 学習計画はしっかり立てることは出来たが、時間がなかったり、ほかの課題を優先しなければならなかったから。
- ・ 空き時間をほぼ全て勉強に使うなど無理のある計画だったから。
- ・ 計画は、計画だから。
- ・ 計画をしても、それを実行するかしないかは自分自身で、嫌々計画する人は特に、それを守らないと思う。手書きで細々と記載するのはかなり手間で、それに組み込む暇があるのなら学習に回した方が良くと思う学生も多いと思うから。
- ・ 計画以上にやっていたら辛い毎日になる。
- ・ 計画通りにやっていたら辛い毎日になる。
- ・ 現実的に非常に困難だと思うからです。
- ・ 現実的に不可能であるから。
- ・ 現実的に無理な学習計画だったため
- ・ 時間がない
- ・ 時間がなかった
- ・ 時間がなかったから
- ・ 時間がなさすぎる。
- ・ 時間の使い方が悪かった
- ・ 時間割的に余裕がない。睡眠時間を確保するため。
- ・ 時間的に無理だとおもう
- ・ 時間的余裕がない
- ・ 時間的余裕がなさすぎるため
- ・ 自習時間の設定が厳しすぎる
- ・ 自分にとって難しい科目を優先していたから。
- ・ 自分自身に甘かったため。
- ・ 集中できない
- ・ 生活的に実現不可能な計画だった
- ・ 大学の授業や実習、課題で疲れてしまい、自習まで手が回らなかった。
- ・ 単位数が多く、絶対に学習できない時間数だったから。
- ・ 不可能だから。
- ・ 別の予定を入れることが多かったから。

- ・勉強する時間をつくれな
- ・勉強の時間はそんなに取れない。勉強より必要なことがある。
- ・忙しい
- ・無謀だったから

付録3:「成績評価について、何を特に気にしていますか？」の問いに対する理由

◎「100 点満点の素点による点数を特に気にする。」との回答の理由

- ・ ABCS といった評価は大幅であり、点数は細かく見ることが出来るから
- ・ S,A,B,C と表記されても小学校から素点だったので具体的に知りたいから。
- ・ S、A、B、C 評価の場合、例えば、80 点でも A であるし、89 点でも A であるように、大まかなものであるが、素点は明確な成績だと思うから。
- ・ あと何点足りなければ評価が上がっていた、または下がっていたかよく分かるから
- ・ ちゃんと学習が身に付いているか気になるから
- ・ どのくらいの点数かが気になるから
- ・ どのような基準で細かい点数が付けられているのか気になるから
- ・ はっきりとでるから。
- ・ ベストを尽した時、結果もいい結果が出るように期待するからである。
- ・ わかりやすいため
- ・ 苦手科目が分かる
- ・ 自分がどこまで理解してるかを知りたいから
- ・ 自分がどのくらいの点数でいるのかを知りたいから。
- ・ 自分がどのくらい出来たのかを客観的にしれるから
- ・ 点数の方がどれくらい自分が授業を理解していたのか分かりやすいため
- ・ 目に見えて結果が出るから
- ・ 高校からそうだったから
- ・ 資格取得に必要なため
- ・ 就職のときに必要になってくるから
- ・ 数字だとわかりやすいから。
- ・ 全教科 80 点以上取ることを目標に授業を受けていたから

◎「S、A、B、C の評価を特に気にする。」との回答の理由

- ・ 100 点も 90 点も S なので、素点はあまり気にならない。
- ・ CAP 制に関わってくるから
- ・ F の評価だと、再履修になるから。
- ・ GPA がでるから
- ・ GPA が気になるから
- ・ GPA が高くありたい
- ・ GPA にひびくから。
- ・ GPA に関わるから。
- ・ GPA に反映されるし奨学金を申請しているから GPA を下げられないから
- ・ GPA の値に大きく影響するから。
- ・ GPA の点数に関わってくるため。
- ・ GPA は高い方がいいと思うから
- ・ GPA を気にしているから。
- ・ GPA 数値を気にするから
- ・ その評価によって GPA に影響が出るから
- ・ クラス分けのある授業に関しては先生によって評価が違いうため。また、評価によって GPA の数値が変わるから。
- ・ S か A を取りたいから
- ・ S や A をとりたいたから
- ・ S を目指しているから
- ・ できれば S をとりたいたから
- ・ 出来るだけ S を取りたいから
- ・ どれくらいとれているか、わかるから。
- ・ なるべく s.a を取りたいたため
- ・ なるべく S を多く取りたいから
- ・ 全ての教科で A 以上を取りたいから。
- ・ 評定が気になるから
- ・ 理解度が高い方がいいから
- ・ いいほうがいい
- ・ いくらでもいい評価が欲しいから
- ・ 点数よりも良い評価を取りたいから。
- ・ 評価に繋がるため
- ・ 先生からの評価もわかるし、自分がどの程度できているのかわかるから。
- ・ 何点取ればその評価を取れていたのか気になるから。
- ・ 各授業でどの評価がつけられたのかが一番重要
- ・ 勉強をした分、良い評価が欲しいから。
- ・ 自分がその科目でどれくらい取れたのか気になるから
- ・ 評価の方が大切だと思うから
- ・ 例えば 100 点をとっても 90 点をとっても同じように扱われるので、点数は重要視しない。
- ・ 自分が苦手な分野が分かるからです。
- ・ 評価によってどのくらい不足しているかが分かるから
- ・ 自分が取れているだろうと思う評価との相違を確認したいから。
- ・ 評価の理由を知ること改善できるように勉強出来るため。
- ・ それが、評価の指標だから。
- ・ 自分の成績がどうなのか明確だから。
- ・ 自分の成績は 4 段階でどのくらいなのか知りたいから。
- ・ 自分はどこまで出来ているのか、授業態度はどう見られているのか知りたいから
- ・ 自分自身の点数よりも全体的な位置づけの方が気になるから
- ・ もし、将来に必要な科目で C の評価で単位が取れたとしたら、不安になるから。
- ・ 一点の差でランクが下がることがあるから
- ・ ギリギリは嫌だなど
- ・ 授業全体での評価だから。
- ・ わかりやすいから
- ・ 素点で評価されるよりも幅があるから
- ・ 素点を見ても 4 段階の評価が変わらないから
- ・ 就職に響くと思っていたから
- ・ 就職のためには、悪いと困ると思うから。
- ・ 就職の時に役に立つと思っているから
- ・ 奨学金などに関わってくるため
- ・ 将来のため

- ・総合的な評価で将来に繋がるから。
- ・卒業に必要なだから
- ・大事だから
- ・次回までの目標が立てられるから。
- ・単位も気にするが、評価も気にすることで気持ち的にも向上すると思ったから
- ・評価がよかったらがんばったかいがあったと感じるから
- ・来年度履修できる単位数が決まるから
- ・平均 3.0 を取ると来年学習計画表を出さなくて済むから。
- ・成績が振るわなければ、来年度取得できる単位を制限されてしまうから。
- ・なんとなく
- ・なんとなく

◎「単位が取れたかどうかだけを気にする。」との回答の理由

- ・結局大切なのは単位が取れたかどうかだから。
- ・単位とれればいいから
- ・単位は大切
- ・単位大事だから
- ・自分で理解できていて、単位がとれるならいい
- ・成績はそんなに気にしないから
- ・卒業する上で単位は必要だから
- ・卒業出来る単位に達成したい
- ・単位さえ取れば、卒業できるから。
- ・単位を取れていないと卒業出来ないから
- ・単位を落とせば卒業出来ない科目があるから
- ・単位を落とすと臨時実習に行けなくなるから
- ・単位が取れないと、資格が取れないから
- ・私は全然単位を取れていないから。
- ・単位だけで精一杯だから
- ・授業がありすぎて単位をとるのでやっとな。
- ・単位を落とすと次の年も受けないといけないから。
- ・再履修を受けるのは体力的に厳しいため、できるだけ 1 回で合格したいから。
- ・来年度以降の時間割に関わるから
- ・単位が取れているのか大丈夫なのかの確認と S.A.B.C の評価も確認
- ・気になるから

付録 4:「あなたは本学の成績評価について、全体的に厳格だと思いますか？」の問いに対する理由

◎「厳格だと思う。」との回答の理由

- ・評価方法が明確になっているから。
- ・ちゃんとした人に対して評価してくれるから
- ・個人にあった評価になっているから
- ・59点とかで単位を落としてる人がいると思うから。
- ・今のままでいいと思うから
- ・人によって判断基準が違うから
- ・同じ教科でも先生が2人いるとぜんぜん評価の甘さが

違い、先生によって、甘すぎたり、厳しすぎたりが激しいので、自分の好きな教科よりも、成績の取りやすい方を選ぶしかない選択の仕方が大変だと感じる人が多いので。

- ・そう思ったから
- ・なんとなく

◎「やや厳格だと思う。」との回答の理由

- ・成績評価についてどういった基準なのか明確に説明してる先生が多いため
- ・シラバス通りに評価されているから
- ・成績のつけ方が正確だと思うから
- ・ある程度は良い成績が取れるから。
- ・適当な評価だと思っている
- ・平等だと思うから
- ・「XXXXXX」などの成績評価が厳格だったから。
- ・出世数のほか、提出物やリアクションペーパーに記載している内容を重視する傾向があるから。
- ・学科ごとに評価の差がある。
- ・Sが取りやすい科目と単位すら取るのが難しい科目での差があると思うから。
- ・その教科によって、成績のつけ方が易しかったり厳しかったりするから。
- ・厳しい先生は厳しいが、学科によってはかなり緩いと聞いたから
- ・厳格なものもあればそうでないものもあるので、やや厳格を選択した。
- ・授業によってテストなどの評価方法の厳しさに差があるから
- ・先生によって成績評価の厳しさは変わっているから。

- ・評価の付け方が先生によって厳しかったり優しかったりする
- ・先生方によって違うから
- ・授業によって違うから
- ・授業によりけりだと思うから。
- ・ごくたまに、なぜこの評価なのか疑問に思う時もあるから
- ・ほかの学科の採点方法がよくわからないから。
- ・一部、学生になにを求めているか分からない先生がいる。
- ・実際のテストの回答が帰ってこないのではどの基準でつけているのかいまいちよくわからないから。
- ・勉強時間がテストの結果に反映されない科目があるから
- ・良いと思ったものが、実際あまり良くない結果であったことがあるから
- ・単位を落としてる人もいるから
- ・遅刻など厳しいから。
- ・1点足らなくて単位を落としたから
- ・一回しか休んでいないのに落とされた授業があるから
- ・あまり判断できない。
- ・よく分からない
- ・6回欠席してしまう

◎「やや厳格さに欠けると思う。」との回答の理由

- ・基準が曖昧だから
- ・評価基準が明確ではないから
- ・シラバスと評価の仕方が違う先生がいるから
- ・遅刻や欠席、カンニング等が合った際にシラバスに書かれているような対応がされていないように思うから。
- ・出席率が評価の対象になる科目が多いので、評価基準は優しいと思う
- ・休みまくっている人や授業でうるさくしている人が単位が取れるのはちゃんとやっている人が報われない
- ・欠席を沢山し課題もやっていない友達も単位が取れているから
- ・出席重視だから
- ・試験の結果が悪くても出席さえしていれば単位が取れる教科があるから
- ・授業態度、出席点などで補ってくれているところがあると思う
- ・授業態度の評価が甘く感じる。授業中スマホをいじって

いる、無駄話、バックで手元を隠す、居眠り等しておる学生にはもう少し厳しくしてもいいのではないだろうか。

- ・5回以上の欠席している生徒でもレポート提出などの簡単な救済措置でCが取得できるから
- ・X先生の授業で、最後のテストを受けていなかった子が成績で90点のS判定を取っていたのは納得いかなかったから
- ・病気でもないのに、たくさん学校休み出席が足りないひとに、単位を与えているのはありえないと思う。
- ・真面目に授業とかを受けてなくてもいい点数をもらえる人がいるから
- ・本気で頑張っていた子が私より成績が悪かったから
- ・真面目が損をしているから。
- ・再試験で単位を所得できるから
- ・ゆるい授業もあれば、厳格な授業もあると感じたため
- ・教員による差が激しい
- ・先生によって偏りがありすぎる。例:全員S、Sが1人も

おらず点数もあやふやで評価される…等

- ・先生方によって全然評価の仕方が異なっている
- ・担当の教員によって評価基準がバラバラであるため。
- ・一生懸命やっても、そうじゃない人と差がない時があるから。

- ・授業間隔差がすごいから
- ・同じ科目でも先生によって成績付け方が異なるから
- ・生徒の顔も名前も覚えていない状態で授業を行う先生たちは、各生徒の授業態度を成績に反映できないため。
- ・それほど厳格だとは思ったことがないから。

◎「厳格だとは思わない。」との回答の理由

- ・きちんと出席していれば それなりの評価をもらえる授業が多いと思うから。
- ・きちんと勉強していれば試験は合格できるものだから
- ・それぞれの先生方が一人一人をしっかり見てくれていると考えたから
- ・ちゃんとやったぶんの評価がされていると思ったため
- ・教員の裁量に任されて、点数の根拠がわからない授業がある。
- ・評価方法の内容が理解できない先生が居たから
- ・欠席上限を超えている学生にも単位を与えている教師がいるから。
- ・高校に比べて大学自体が楽であるため。
- ・単位を取れなさそうでもプラスで課題を出してくれて単位を取れるようにしてくださる先生がいるから。
- ・出席すれば単位取れるから。また、XX でクラス分けさ

- れてるが、自分より成績の低いクラスの人が自分より成績が高いのが納得できないから。
- ・5回以上休んでいる人でもテストを受けさせてもらっている人がいたから
- ・出席数の三分の一を休むと単位がとれないはずなのに、取れている人もいるし、先生方によって評価が違うから、統一性がない。
- ・先生でバラツキがあるので一概には言えない
- ・先生の好みで決めてるところがあると思うから。
- ・特に厳格だとは思わない
- ・普通だと思うからです。
- ・普通に評価していると思う
- ・あまり分からないから
- ・Fランだから
- ・なんとなく

付録5:「あなたは本学の成績評価について、全体的に妥当だと思いますか？」の問いに対する理由

◎「妥当だと思う。」との回答の理由

- ・きちんと評価してくれるから
- ・正しく成績評価されているから。
- ・それぞれの先生方が一人一人をしっかり見てくれていると考えたから
- ・テストで点数が取れただけ成績も正確につけられていると思う
- ・私の思っている単位取得と同じだから。
- ・手応え通りだから
- ・テストの出来と比例しているから
- ・頑張った教科はそれなりの点数を貰えたから。
- ・個人にあった評価になっているから
- ・丁度いい
- ・平等だから
- ・特に気になることがないからです。
- ・特に今まで問題がなかったから
- ・そう思ったから
- ・なんとなく

◎「やや妥当だと思う。」との回答の理由

- ・きちんと単位とれているから
- ・だいたい妥当な評価だと思う
- ・評価内容をちゃんと説明して、やったぶんの評価がされていると思ったため
- ・基準はわからないが、納得いかないほどの評価ではないと思うから
- ・易しすぎず厳しすぎず良いと思うから。
- ・厳しすぎず、優しすぎることもない
- ・厳しすぎてもやる気を無くす
- ・頑張っていない人は容赦なく落とされるため。
- ・自分がやった分だけの成績だから。
- ・自分の成績に見合った評価がされていると思うため
- ・成績でのテストの点数の配分がいいと思うから。
- ・入学してくる学生のレベルにあっているとと思うから
- ・平等だと思うから
- ・いいと思う
- ・単位落とす人はそれなりの勉強量だと思うから。
- ・妥当だと思うが、その成績に至った内訳のようなものがあるとともっと良いと思う。
- ・少し甘い所もあると思うから。
- ・クラス分けの授業に関してだけ引っかかるところがある。後は、信用次第であるところである。
- ・自分の足りなかった所をもう一度見直す切っ掛けになるから
- ・高校の時のようだと感じているから
- ・授業によって、テストかレポートだけだったり、どちらもあったりと負担が違うから。
- ・授業によってテストなどの評価方法の厳しさに差があるから
- ・(4)と同じで、テストの回答が返ってこないでどの基準でつけているかわからないから。
- ・いまいち基準がわからないものもあるから。
- ・6割の基準がわからない
- ・ごくたまに、なぜこの評価なのか疑問に思う時もあるから
- ・思ってたよりも低いときがあるから
- ・学科ごとに評価の差がある。
- ・実習が休みカウントされ、その分の出席点なくなるのが違和感。実習が休み扱いになり、必要なときに休めなくなるのが困る。
- ・出席カードを紙にするのではなく、学生カードを機械に通したりする方法で良いのではないかと思う。この方法においても同様ではあるが、身代わりができてしまう(代筆)のは、きちんと毎回出席している人が損をしているような気分になるから。
- ・学外の講師の先生は、GPA を理解しているのか謎だと思うから
- ・妥当だと思うものもあれば妥当じゃないと思うものもあるためハッキリわからない。
- ・よく分からない
- ・あまり判断できない。
- ・なんとなく
- ・なんとなく
- ・なんとなく

◎「やや妥当さに欠けると思う。」との回答の理由

- ・基準が曖昧
- ・成績評価の評価方法などをもっと明確化してほしい。
- ・厳格さと同様に、統一されていないものは妥当ではないと考えるため。
- ・テストの結果に反映されない科目があるから
- ・ペーパーテストの解答を返却してくれない為どのように点数を出しているかわからないから。
- ・教科の中には、試験の出来具合のみを判断基準にするものがあるから。
- ・欠席を沢山し課題もやっていない友達も単位が取れているから
- ・試験の結果が悪いのに評価が高かったりすることがあるから
- ・学生を気にかけてくれるのは嬉しいが、きちんとしている学生と単位を確実に落としている学生にも単位をあげているから
- ・ゆるすぎ
- ・教員によって成績のつけ方にむらがあると思う。
- ・教員による差が激しい
- ・出席していない人も単位を取れていることがあるから

- ・出席と試験で評価を決める授業が多いが、試験内容に授業間格差がある。
- ・先生によって評価の仕方にバラツキがあるから。

- ・先生による評価の基準が違いすぎるから
- ・試験の点数のみで成績を評価しているから
- ・時間割が忙しく十分に勉強できないため。

◎「妥当だとは思わない。」との回答の理由

- ・前期の学科の XXXX の評価の仕方が変だった
- ・同じ学科・学年でも教授が違う事で成績に差が出るから。
(XX 等)講義のクラスが成績分けによる上位クラスである

のに、授業が難しく他のクラスよりも点数が取りにくいことが納得できない。

付録 6:「あなたは GPA による評価についてどう思いますか？」の問いに対する理由

◎「あった方がよい」との回答の理由

- ・ 数字だと成績が見やすいから
- ・ 成績が分かりやすいから
- ・ 成績の目安がわかるから
- ・ パッと見てわかりやすいから
- ・ 一目見てわかるから
- ・ 最終的な成績の結果が表れるから。
- ・ 自分がどのくらいか判断できるから
- ・ 自分のレベルがわかりやすい
- ・ 自分のレベルを把握できるから。
- ・ 評価判断しやすいと思うから
- ・ 大まかな成績が分かるから。
- ・ 単位が取れただけではなく、どれくらいの評価が与えられたかわかることが必要だから。
- ・ 自分の成績を一目見て判断でき、次の目標も定めやすいから。
- ・ 自分がどのくらいの数値なのか把握出来ると共に、一人一人の学びの促進に繋がると考えたから
- ・ GPA で評価されることによって、次回までに頑張って成績を良くしようという気持ちを抱くから
- ・ 次年度勉強するときの目標になるから。
- ・ 努力するきっかけになる
- ・ 評価がある方が向上心は上がる
- ・ テストへのモチベーションが上がるから
- ・ モチベーションに繋がるから
- ・ やる気につながる。
- ・ わかりやすいし、来年度も頑張ろうと思えるため。
- ・ 頑張る気になる
- ・ 授業の取り組む姿勢の向上につながると思うから
- ・ 近年、就活において成績通知書の提出を提示する企業が増えているから。1年生の頃から数字を意識できた事は良かった。
- ・ 最近では就活でも使われていると聞いているから。
- ・ 就活のとき企業側がわかりやすいから
- ・ 就職で必要になるから
- ・ 奨学金などに関わってくるため
- ・ 他の大学でも導入されてるため
- ・ 多くの大学で取り入れられているから。
- ・ 妥当かと思ったからです。
- ・ この質問前のページにもありましたよね……？

◎「ない方がよい」との回答の理由

- ・ 科目ごとに評価の甘さなどが異なる。評価が履修している科目・担当教員によるため、妥当にならないと思う。
- ・ ゆるすぎて評価になってない
- ・ 大して頭の良い大学ではないから。
- ・ 必要とされる状況になったことがない
- ・ Gpa が出されたからどうか思わない
- ・ 知らないから

◎「判断できない」との回答の理由

- ・ 入学してすぐの説明でどのような制度か覚えていないから
- ・ gap についてあまり知らない
- ・ GPA についてよく知らないから。
- ・ GPA についてよく分からないから
- ・ GPA についてよく分からないから
- ・ あまり知らないから
- ・ あまり良くわからない
- ・ あまり良く分からないから。
- ・ あんまり知らないから判断できない
- ・ ちゃんとした制度を知らないから
- ・ どちらともいえないから。
- ・ なくても変わらないから
- ・ なんとも言えない
- ・ よくわからない。
- ・ よくわからないから
- ・ よくわからないから。
- ・ よく知らないから
- ・ よく分からない
- ・ よく分からない
- ・ よく分からないから
- ・ よく分からないから。
- ・ わからない
- ・ わからない
- ・ わからないから
- ・ わかりません
- ・ 分かりません
- ・ 理解していない
- ・ 難しい
- ・ 自分自身よくわかっていないところがあるから
- ・ 詳しく分らず判断できないから。
- ・ 成績の良いものとするところが基準はあるが、何故他と比べなければいけないのかがわからない。成績の重要性がわからないため。
- ・ 私は GPA による評価があることによって予習復習を出来るだけ取り組んだが、他の学生はどうかかわからないから。
- ・ 差が付けられている様に感じるが、優秀な成績を収めた人に何か与えられるべきとも思うから
- ・ 授業間格差がある。簡単な授業、試験で勉強しなくても高い評価を得られる一方、難しい授業内容、試験で勉強しても評価がそこそこになったりする。簡単な授業だけを受ければ全体の成績は上がる。
- ・ 大学・学部・学科によっても評価方法が違うと思うから。

しかし、この評価方法がある事で学生のやる気が起こるかもしれないから。と様々なことが考えられるため判断できない。

- ・特に必要性を感じられていないから。
- ・利点も欠点もあるため

- ・ 必要かもしれないが、なくても成績はわかるから。
- ・ GPA が高くても他の学校より価値は劣ると思うため正直あってもなくても感じる。
- ・ あまり影響が目に見えないため

付録 7:「CAP 制、学習計画、授業以外の自習時間について、あなたの意見、要望、疑問などがあれば、自由にお書きください。」の問いに対する回答

- CAP 制は廃止しても良いのではと思う。
- Cpa とはなんですか？
- 1 年で取れる単位を先輩達のように 50 単位にして欲しい
- その学科によっては一年間で50単位以上取得しなければ4年間で卒業できないものもあるので、その科に関しては学習計画表を免除してもいいと思う。
- 学習計画はなくてよいと思う。
- 学習計画通りに行っている人はほほいないと思う
- 予習復習時間は無理がある、あのとおりに出来ないと。一人暮らしで。自分の稼いだ金で生きてる人にとっては、あれは出来ない。
- 予習や復習をしたいがする時間があまり設けられない。
- もう少し学生のレベルに合わせて、評価項目等を考えた方がいいと思う。学習計画どおりに実行している生徒がいるなら手本にしたいのでその人の 1 日のスケジュールを是非紹介してほしい。
- XXXX 基礎演習などの「複数の先生」によって構成される授業は評価に偏りがでたりして、正しく点数化できないと思うので評価するなら「完全出席点」などわかりやすい評価方法にしてほしいです。また、「複数の先生」で評価するならちゃんと評価方法を統一し、評価の方法を共有し、成績の計算方法・過程・結果を共有して、学生から「異議申し立て」された時に先生方、誰に申し立てをしても全員が同じ回答を出来るようにしてほしいです。
- 何より、学生がちゃんと納得いくような評価をちゃんとして欲しいです。
- 成績評価の仕方がおかしい先生がいる
- 先生方によって評価のつけかたが違うのは理解できるけど、出席数などのきまりがあるのに、出席数が明らかに足りない人や提出物が出されていない人、テストを受けていない人に単位をあげるのは違うと思う。頑張っている人と頑張っていない人が同じ評価をされて、頑張っている人に失礼だと思う。頑張れない人に優しくしすぎている部分があると思う。これだと頑張って勉強しようと思っている人が成長できない。評価の基準をしっかりとしてほしい。
- 評定の内訳(授業態度は〇%、テストは〇%)があるなら見たいです。内訳があれば、自分はどの部分が良かったか、悪かったかわかり、次の授業に活かせるから。
- テストは返却してほしい。
- ペーパーテストの解答を返却してもらおうと、復習に役立つので返してほしい。どのくらい点数をとったのか分からないため異議申し立てができない。
- 予習・復習のポイントを伝えて貰うと良いのかなと思います。
- 自主学習についてのアドバイスをしてほしいです
- 学期末の授業アンケートを匿名にし、学生の目にもわかるように反映してもらえるようにしてほしい。
- まず、学生があまり勉強していないような気がします。図書館の位置が通りにくいかもしれません。授業が終わったら早く帰るし、勉強ができる雰囲気をもとに作れば良いかということを考えべきだ。
- 調べ物などをするのに1号館にパソコンを増やしてほしい。
- 学内に充実した自習室が欲しい。
- 今年度から導入されたパソコン室の利用制限(50 枚のみ印刷可の制度)ですが、4 年生の卒論に非常に大きく影響しています。また、生徒に直接口頭で「今年度から利用制限の仕様になる」との話をすべきだと思いました。家にパソコンがなく、学校でやっていく生徒も多くいる中、生徒に直接の説明もなく仕様を変更されるのはどうかと思いました。
- 自習時間を取りやすいような時間割編成をして欲しい。フルコマの時もあれば 1 科目しかない時など差があるため平均的に時間割編成をして頂けたら学習時間を確保しやすくなると思う。
- 先生との距離が近いのが魅力だけど、外部からの先生は 1 度も授業中目が合わない人がいてとても寂しい気がする。英語などの語学系の授業はワークなどの宿題があるとやることが明確で勉強しやすいと思う。
- 面白い授業もあるが面白くない授業が半分以上を占めていてなぜこんなにお金を払っているのかわからなくなる。半年で 50 万はどうなのかと。授業において先生が遅刻してきているのに遅刻した生徒に対して厳しい。人のこと言えない。冷暖房代が高い。大学生協が大して安くない。坂の下ウェルシアで買った方が安い。

第 2 部

「卒業時学生生活調査(4年生対象)」 結果報告

IR 推進委員会
教学委員会担当 WG

本調査は、昨年度に引き続き4年生を対象に、学位記授与式前日の3月14日に実施したものである。4年間の学生生活を、当然ながら批判的な意見や思いもふくめて振り返ってもらい、今後の大学の教育に活かしたいとして行ったものである。以下はその単純集計の結果である。

I 大学生活における諸活動

「大学生活に関連する(1)～(9)について、あなたはどのように思っていますか」について必要だったかどうかを4択(必要・やや必要・あまり必要ではない・必要ではない)で回答してもらった。

昨年度の結果と同様、「大学の授業」や「人・同級生・教員との出会い・交流」への必要の割合が高かった。他方、あまり必要でないとする割合が「クラブ・サークル活動」で比較的高いのは、本学のクラブ・サークル活動が活発ではないことに起因しているのだろうか。

II 大学で身についたこと

「(1)～(9)のことがらや能力について、大学で学んで身についたと思いますか」について4択(身についた・やや身についた・あまり身につけてない・身につけてない)で回答してもらった。

「自分の就きたい仕事に直接関係する知識・技術」については、90%近くの学生が「身についた」、「やや身についた」と回答している。これは本学の学科構成とそこで提供される専門科目が、専門職の資格に直結していたり、職場での実用的価値に重きを置いている点を反映していると思われる。総じて、どれも半数以上が「身についた」、「やや身についた」との回答で、表現力や思考力のような基礎的な学士力についても、多くの学生が身についたことを実感している。大学教育を受ける意義や価値につながるものである。

他方、「外国語を理解し会話する能力」についてだけは、半数以上が「あまり身につけていない」、「身につけていない」との結果で、グローバルな教育を目指す本学としては、不本意な結果となった。

Ⅲ～Ⅴのグラフは、＜入学前に期待していたこと＞、＜本学で学んで良かったこと＞、＜本学で学んで期待外れだったこと＞について、下記の(1)～(10)の中から3つを選択するとした質問の結果を表している。

- (1) 教育内容(資格取得に関係する内容)
- (2) 教育内容(資格取得に直接は関係しない内容)
- (3) 教員の指導

- (4) 留学
- (5) 実習
- (6) 就職
- (7) 友人関係
- (8) クラブ・サークル活動
- (9) ボランティア活動
- (10) 設備・施設
- (11) その他（具体的な内容を書いて下さい）

Ⅲ 入学前に期待していたこと

「教育内容（資格取得に関係する内容）」が7割程度と最も高い期待を持っていたことであり、次に「就職」が続く。他方、「ボランティア活動」や「設備・施設」については期待していたという回答が少なかった。

Ⅳ 本学で学んで良かったこと

入学前の期待の傾向と重なるように「教育内容（資格取得に関係する内容）」が7割弱と本学で学んでよかったとしている割合が最も高い。次に、「実習」が続き、本学の資格教育・専門職教育への一定の評価と言えあるかもしれない。また、「友人関係」もそれに次いで多かった。

Ⅴ 本学で学んで期待外れだったこと

「クラブ・サークル活動」については半数近くの学生が期待外れだったとしている。「設備・施設」がそれに続くが、2割程度であるのでそれほど高い値ではない。もともと期待が高くなかったことを反映しているともいえる。

Ⅵ 大学でもっと学びたいと思うこと

「大学でもっと学びたいと思うことはどんなことですか」という質問は、選択肢としてレベルの異なる次元にならざるをえなく、下記の4つとした。

- (1) 就職や仕事上、役に立つこと
- (2) 私生活を豊かにするために役立つこと
- (3) 人生を通じてすべての面で役立つこと
- (4) その他

円グラフで分かるように、「就職や仕事上、役に立つこと」と「人生を通じてすべての面で役立つこと」で回答が2分された。

VII 大学の授業への満足度

「大学の授業に満足していますか」について、4択（満足している・やや満足している・あまり満足していない・満足していない）で回答してもらった。

「満足している」との回答が約25%、「やや満足している」も併せると80%以上の回答で、多くの卒業生が授業に満足していることが分かった。20%弱の満足できなかった卒業生もいるが、それが多いとみるか少ないとみるかは判断し難い。ただ、満足して卒業する卒業生が100%に近づけるよう努力の継続が望まれるのは言うまでもない。

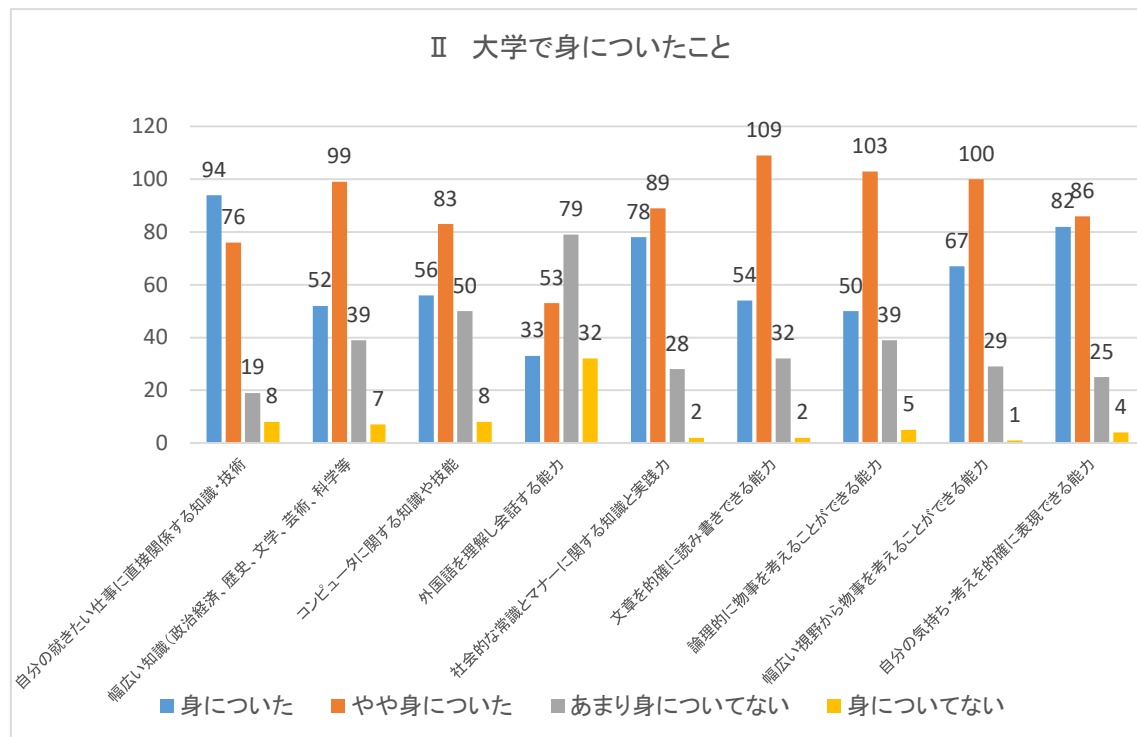
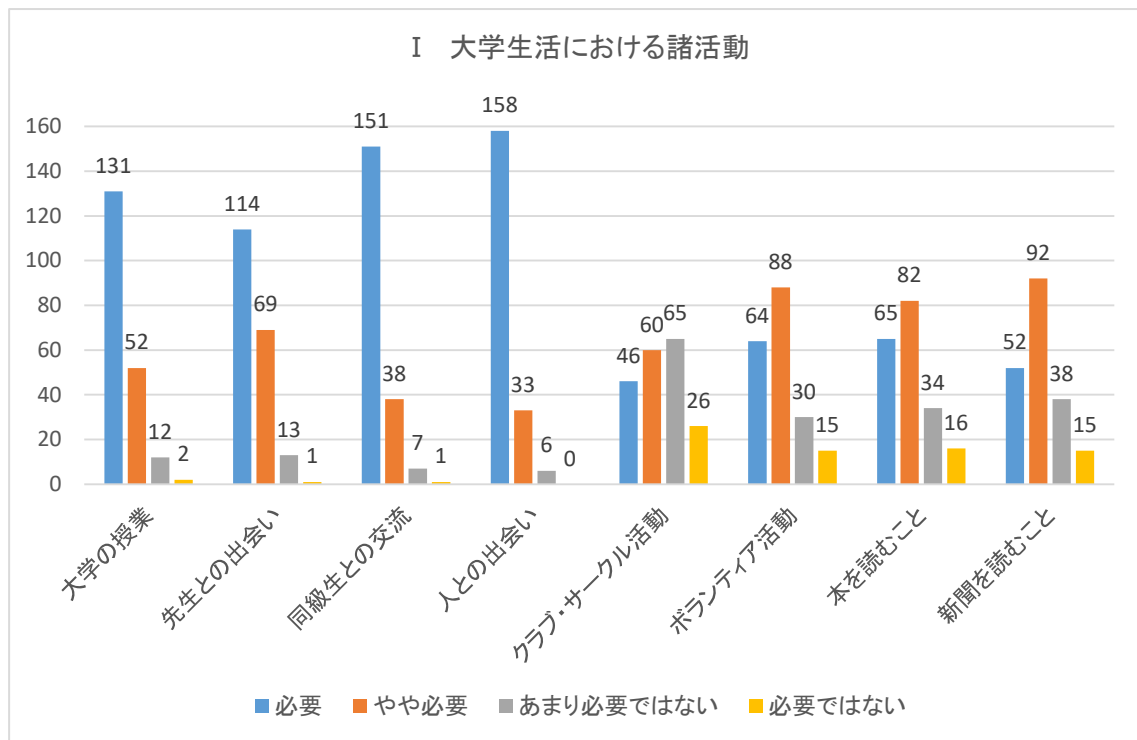
VIII 大学生活への満足度

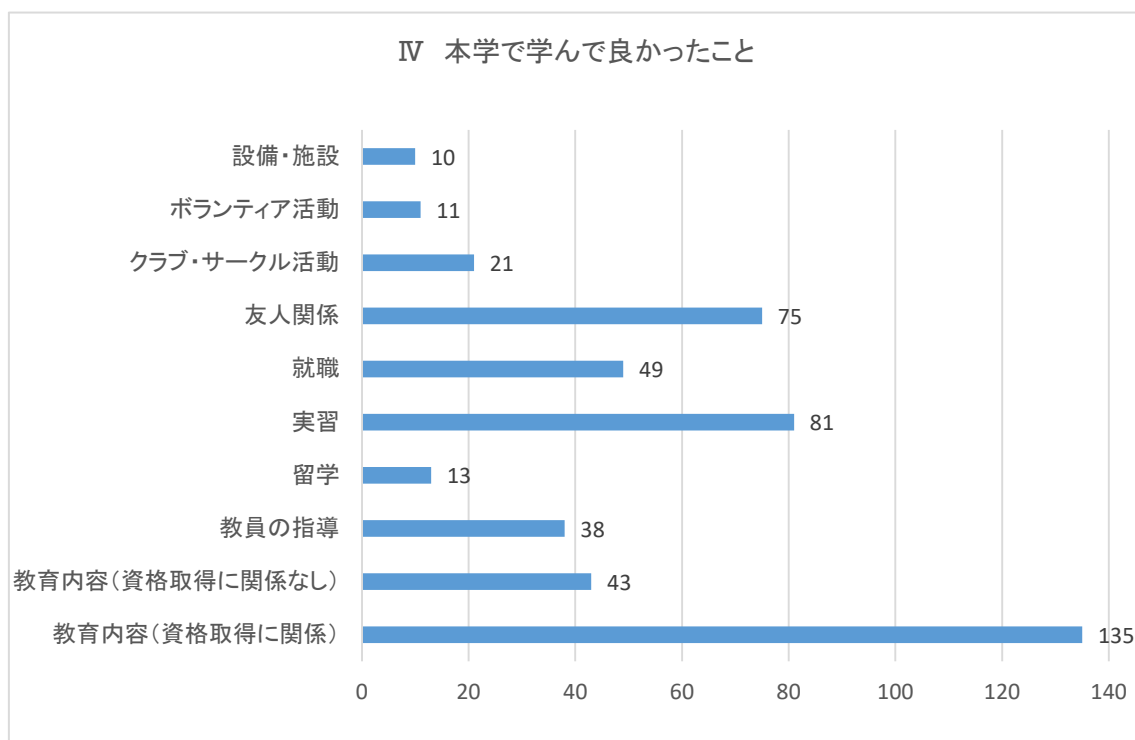
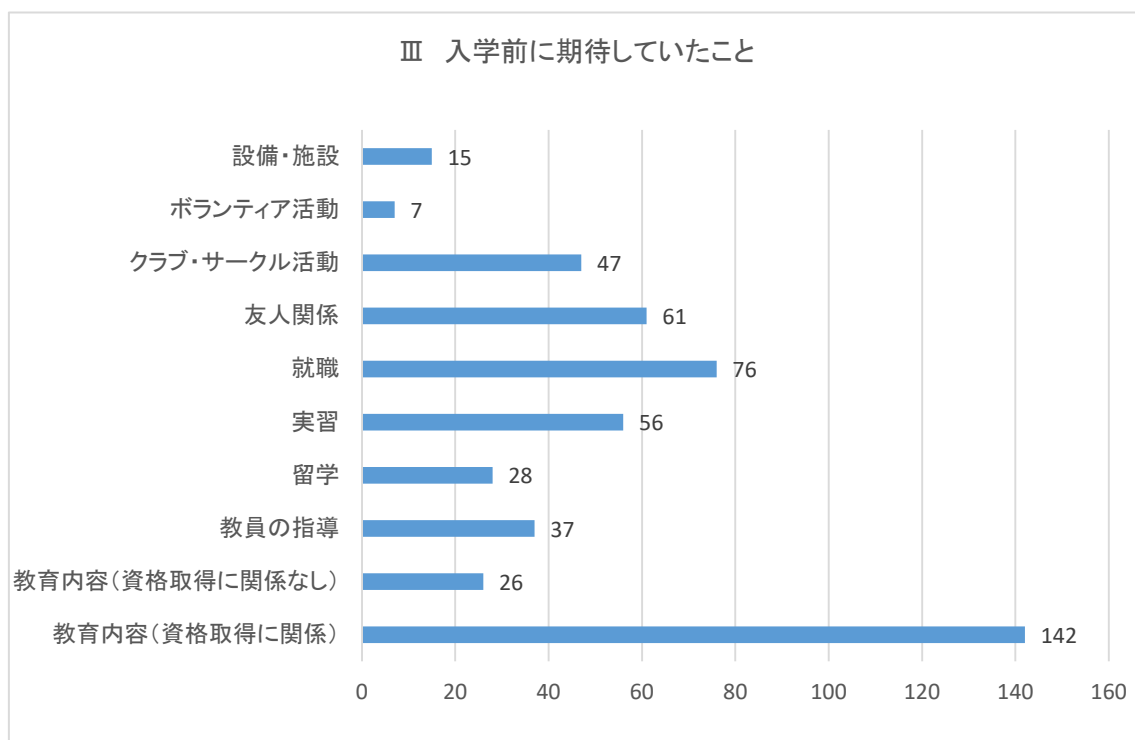
「大学生活を総合的に見て、満足していますか」について、4択（満足している・やや満足している・あまり満足していない・満足していない）で回答してもらった。

円グラフのように、9割を超える学生が、満足と答えていることが分かった。十分に高い結果であり、悪い結果ではないが、VIIと同様、満足度を少しでも100%に近づける努力が望まれる。

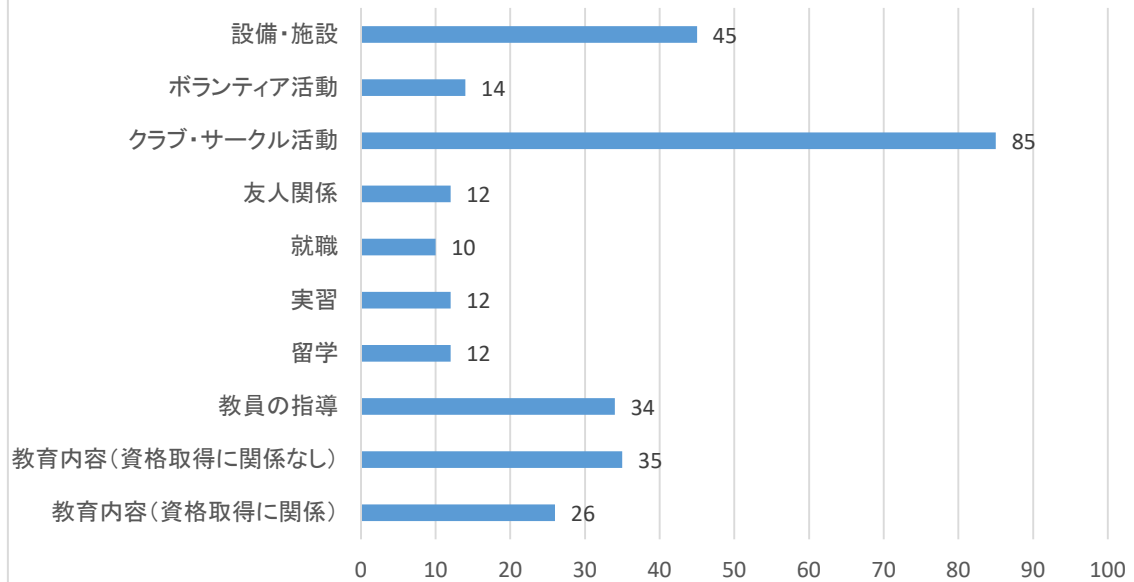
IX 大学生活に関する自由記述

最後に、自由記述の回答を一覧にまとめた。今後の参考として検討を望みたい。

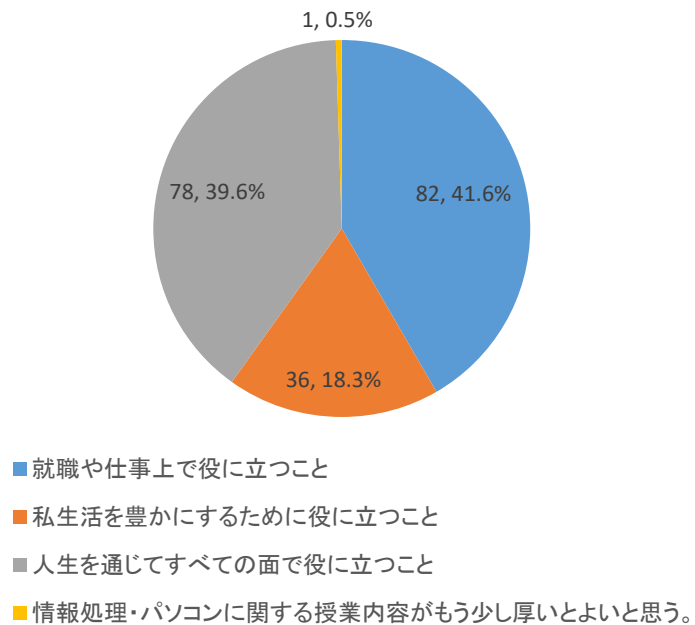




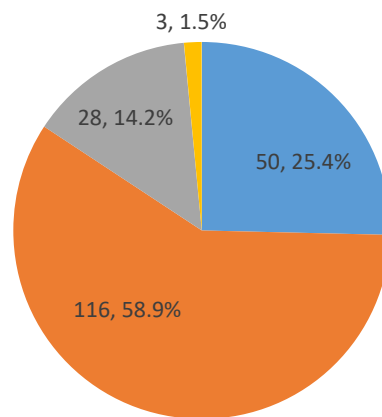
V 本学で学んで期待はずれだったこと



VI 大学でもっと学びたいと思うことはどんなことですか？

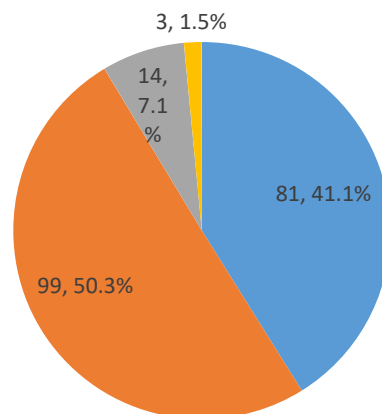


Ⅶ 大学の授業に満足していますか？



- 満足している
- やや満足している
- あまり満足していない
- 満足していない

Ⅷ 大学生活を総合的にみて、満足していますか？



- 満足している
- やや満足している
- あまり満足していない
- 満足していない

IX 最後に、大学や大学生活に関して、ご意見やご感想があればご自由にお書き下さい（任意回答）

1、2年生で授業が詰まっていた大変でした

4年間ご指導ありがとうございました。

GDP は必要ないと思った。

エジンバラ大学と提携を結んでくれて良かったです。良い経験になりました。

バイブルサービスにももう少し参加しやすくして欲しい。大変有意義な内容なのでもっとたくさんの人に参加して欲しい。（昼休憩時間だと授業や委員会・サークルなどで参加を断念せざるを得ないことが多くある。）

もっとイベントがあるといいなと思います。

もっとサークル活動しやすくしてほしい

もっと女子大らしい授業などがあっても良いのではないかと思います。

楽しい学校生活を送ることができました！

授業の有無など、全体的な連絡が遅い

充実していました。

先生方、職員の方々、友人のおかげで、充実した大学生活を送ることができました。ありがとうございました。

履修できない科目でも興味のあるものは受けたかった。社会福祉原論のような先生がもっと増えるべき

留学をするのであればとてもいい大学だと思う。ただ授業の種類が少なく、4年になっても英語を勉強したかったのに英語の授業を3年の時点で全てとってしまい受けられなかった。英語の授業の種類を特に増やして欲しい

第 3 部

志願者及び入学者データ
(2014 年度～2019 年度の推移)

IR 推進委員会
入試広報委員会担当 WG

志願者及び入学者データ（2014 年度～2019 年度の推移）

はじめに

このデータは、入試広報課がこれまでに実施してきた入試データを基にして、集計したものである。それぞれの年度で特徴的な取り組みや戦略があるだろうが、ここでは志願者データと入学者データの推移を単純に比較し、2014 年度から 2019 年度に実施した入試結果データだけを取り上げ、入試状況がどのように推移しているかについてまとめている。

昨年同様にそれぞれのデータを県別の状況として取り上げ、まとめることで県別の入試状況の変化を把握し、2019 年度の結果を分析してみる。

1. 志願者データ

志願者全体の状況を見てみると、2014 年度から 2016 年度まで宮城県内の志願者割合が 66% と高いことがわかる。2017 年度と 2018 年度においては、62% と低く推移していることがわかり、全体志願者数の低下は、2016 年度から顕著になっている。県別でみると宮城県・秋田県・福島県で大きく数を減らしていることがわかる。

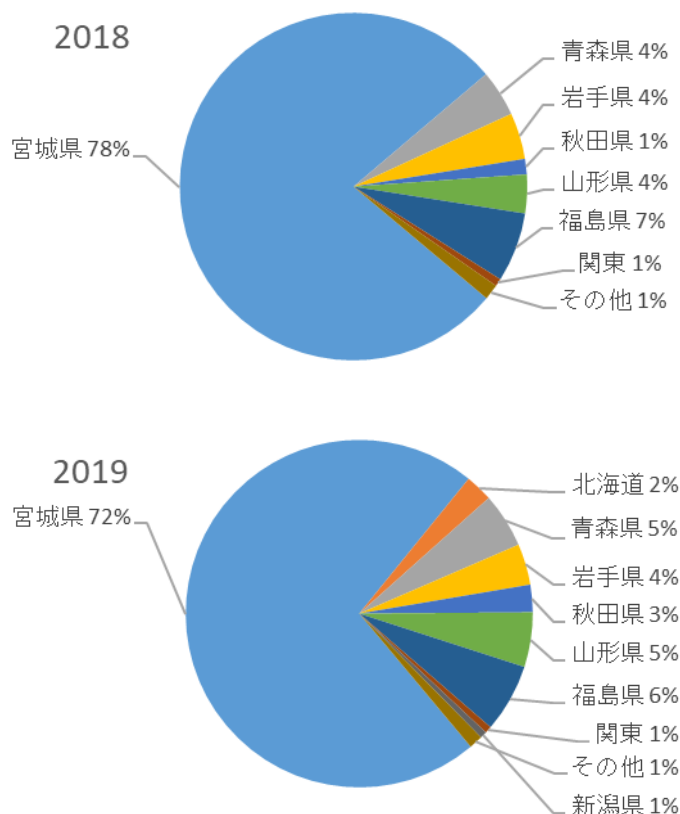
この志願者数の低下を見る限り、何らかの要因があったと言えるが、ここでは細かな取組変更などは考えずに、結果の実数を基にして見ていくこととする。ただし、2018 年度、2019 年度については、実施してきた活動が明らかなため、実数に表れている取組内容を提示していくこととする。

2018 年度の 5 月以降に実施してきた取組として、①高校訪問の強化、特に宮城県内の訪問回数は 5 回となった。なお、その際に入試広報課員が高校ごとに担当者を固定し、担当者制を実施した。県外においてもなるべく同じ担当者が訪問するようにしている。②指定校推薦を積極的に活用するように進めている。③SNS 広報の導入を行い、LINE@をはじめ、Google、Twitter のバナー広告を導入した。LINE@は登録した生徒等へ本学の入試情報とイベント情報を発信するために実施し、Google をベースとして Twitter、Facebook、Instagram を使い、広く本学を知ってもらうために実施した。東北六県プラス新潟で進めてきたが、途中から北関東の茨城、栃木に地域を広げ、さらに現在は北海道の南側にもバナー広告を打っている。その他にも細かな取組は行っているが、大きな点だけに注目し、記述している。その結果、2019 年度においては、全体志願者数が 91 名増となり、内容は岩手県以外の全地域で志願者を増やすことができた。

	志願者数						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6 年間
宮城県	525	490	345	261	294	341	2256
北海道	4	7	4	2	1	8	26
青森県	25	23	21	20	16	23	128
岩手県	36	35	35	30	45	35	216
秋田県	51	41	16	18	14	34	174
山形県	78	54	53	42	56	56	339
福島県	52	52	30	22	36	45	237
関東	15	20	3	15	5	6	64
新潟県	11	5	6	7	4	14	47
その他	9	13	11	1	6	6	46
合計	806	740	524	418	477	568	3533

1-1. 志願者データ（AO入試+推薦入試）

AO 入試と推薦入試については、前半の入試であり、本学を第一希望として入学してくる生徒であることから、重要な入試だと言える。そのため、昨年度から第一希望者を増やすために生徒に直接広報するように、進学ガイダンスや進学相談会の参加件数を増やし、さらに本学教員が直接生徒とコンタクトを取れる機会を増やすために、積極的に教員に参加してもらっている。AO 入試については、一般入試の括りであるため、選抜ではあるが、今の本学の現状から言うと選抜しにくい状況である。また、公募推薦も専願ではあるが、志願者が多い時には選抜を行い、少ない時には緩くなる入試であると言える。そのため、志願者の推移から読み取れるのは、2017 年度から 2018 年度の宮城県内の志願者数を見ると 7%改善していることは、実数からも明らかである。2019 年度においては、志願者が 18 名増加しており、全地域で増えたために、割合にすると宮城県は 6%減少している。

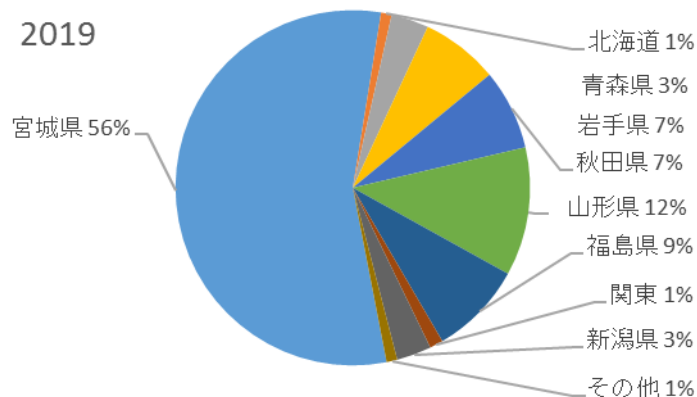
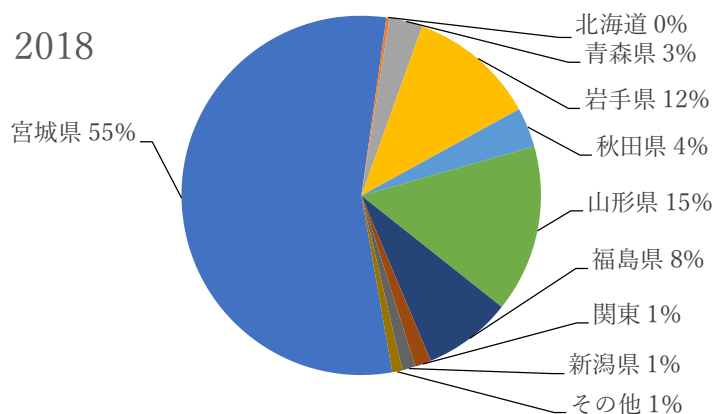


1-2. 志願者データ（一般入試+センター入試）

一般入試とセンター入試については、実数でみると宮城県内が昨年よりも大幅に増加しているおり、さらに秋田・福島も増加していることがわかる。この要因は、高校訪問以外の要素が大きいと言える。何故なら、前半の入試は高校の進路指導部が強く関わり、生徒を指導するのに対して、後半の入試である一般入試やセンター入試においては、多くの大学に出願し、希望の高い志望校に入学する傾向が強いため、知名度や広報力が重要になると言える。志願校の決定や最終的な入学を決定するのには、進路指導部や担任の先生が強く影響する可能性があるため、高校訪問が最終的には有効になる。志願校に選ばれるかどうかは広報力や知名度と考えると SNS での広報活動が戦略として効果があったと考えられる理由である。

この一般入試とセンター入試で、昨年度よりも 72 名の志願者増となっていることは、次年度につながる良い結果であると考えている。SNS でのバナー広告は、本学ホームページに誘導しているため、ホームページの充実が喫緊の課題であると言えるが、現在は大学広報室のニュース&

トピックスも頻繁に更新されている。本学が活動的に動いているように見えることが良い影響を生んでいることは間違いない。



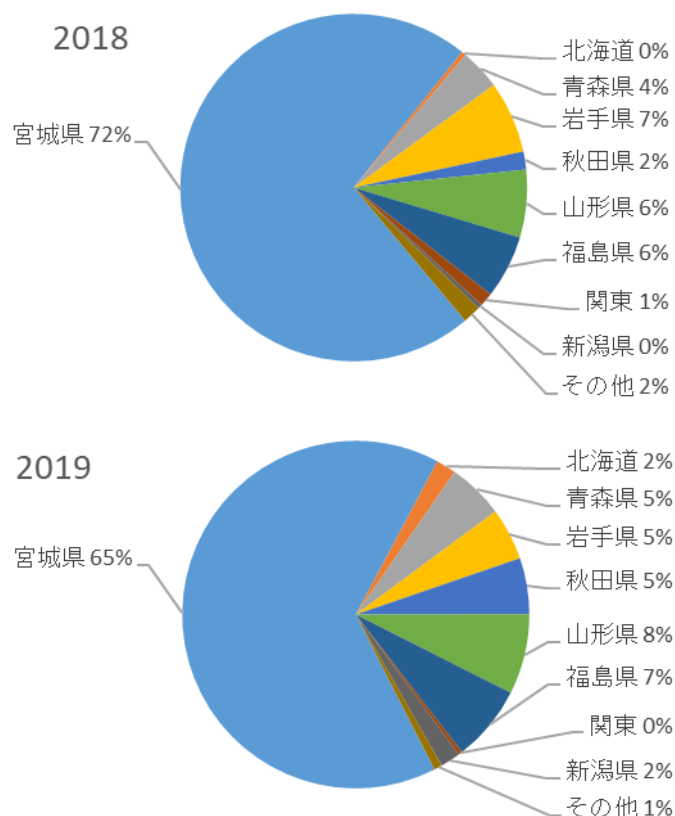
	志願者数：一般＋センター利用						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	392	322	232	171	186	228	1531
北海道	3	5	2	1	1	4	16
青森県	16	12	14	12	10	14	78
岩手県	30	27	30	21	39	29	176
秋田県	47	34	12	15	12	30	150
山形県	67	40	45	36	51	48	287
福島県	42	46	21	16	27	35	187
関東	11	17	3	11	5	5	52
新潟県	9	4	6	7	4	13	43
その他	9	11	7	1	3	4	35
合計	626	518	372	291	338	410	2555

2. 入学者データ

入学者データを見ていると、この数年で入学者が落ちていることがわかる。2015年度から2017年度までに定員（300名）の65%まで減っていることから深刻な状況が見て取れる。2018年度においては、高校訪問等の活動の結果、宮城県内の入学者の増加が見て取れる。率で言っても2017年度から見ると5%増加と大きな成果となっていることがわかる。また、2018年度の入学

者全体は、42名の増加となっている。さらに2019年度については、入学者全体で30名の増加となっている。

志願者データのところでも述べたように、入試広報課の広報活動や各種取組が成果として実を結んでいるが、単年度で大幅な成果を上げることは難しいため、2年計画で目標値を設定して、進めてきた。その結果、今年度の入学者が268名となり、定員（285名）の9割4分を達成し、V字回復を実現できた。



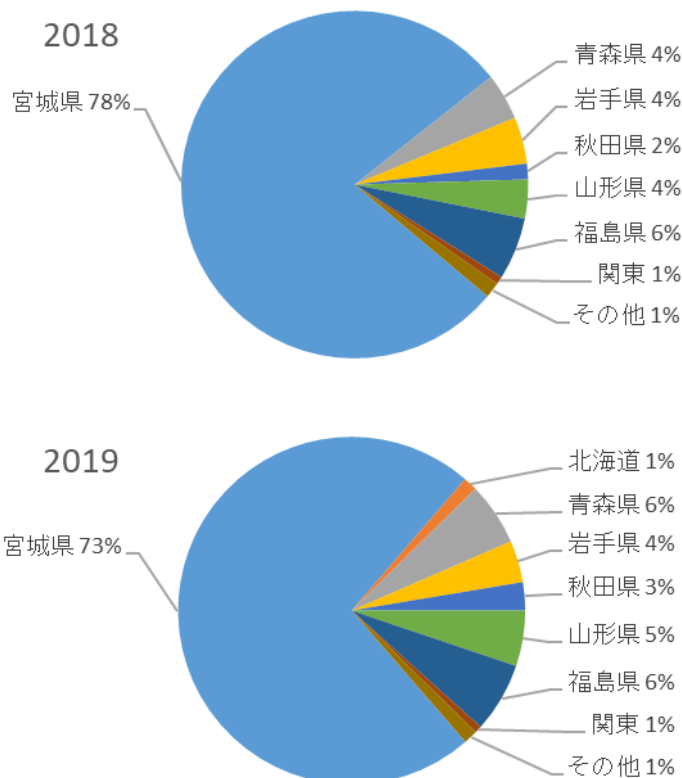
	入学者数						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	201	185	159	131	171	175	1022
北海道	1	2	2	1	1	5	12
青森県	15	10	11	10	9	14	69
岩手県	11	12	9	15	16	13	76
秋田県	11	13	7	6	4	14	55
山形県	22	18	20	16	15	20	111
福島県	15	15	16	8	14	19	87
関東	5	4	0	7	3	1	20
新潟県	4	2	1	2	1	5	15
その他	2	5	4	0	4	2	17
合計	287	266	229	196	238	268	1484

2-1. 入学者データ（AO入試+推薦入試）

入学者データのAO入試と推薦入試の状況を見るとわかることは、宮城県内の入学者の増加が良い結果につながっていることがわかる。2017年から2019年の2年間で、入学者全体の30名が増加している。高校訪問が好影響を及ぼしていると思っているが、実際にはかなり頑張ったは

ずなのに実数が 154 名であることは、思ったほどではなかったのも事実である。

この結果を受けて、一般入試に向けて更なる手を打つことに決めた。一般入試に対しては、多くの生徒に向けて、出願書類を送ることが必要である。昨年に引き続き今年も業者から依頼される資料請求データ（生徒情報）を基に約 1,000 名に対してダイレクトメールを発送することとした。また、業者を活用したダイレクトメールも並行して実施した。

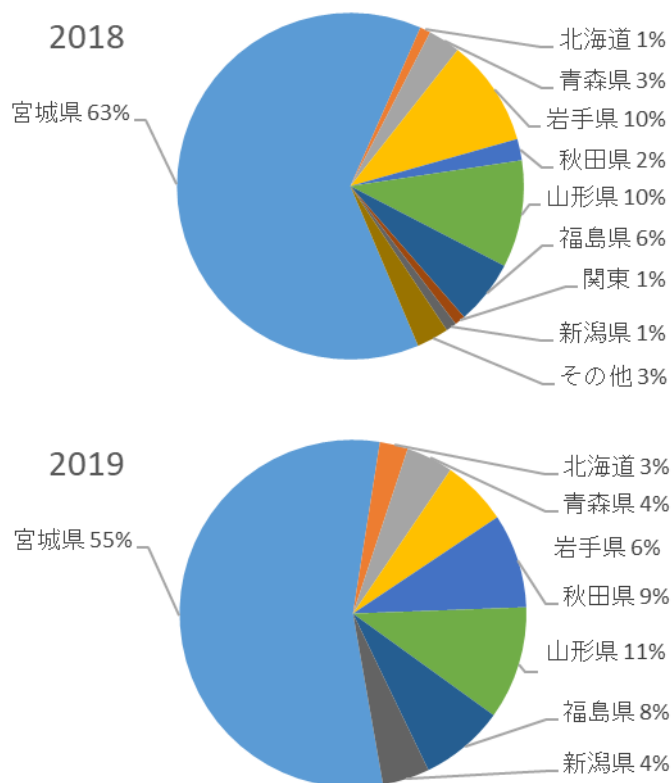


	入学者数:AO+推薦						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	126	141	111	88	108	112	686
北海道	1	2	2	1	0	2	8
青森県	9	8	7	8	6	9	47
岩手県	5	6	2	8	6	6	33
秋田県	4	5	4	3	2	4	22
山形県	9	13	7	6	5	8	48
福島県	9	6	9	6	8	10	48
関東	4	2	0	4	1	1	12
新潟県	1	1	0	0	0	0	2
その他	0	2	4	0	2	2	10
合計	168	186	146	124	138	154	916

2-2. 入学者データ（一般入試+センター入試）

入学者データの中で、一番愕く結果となったのが、この一般入試とセンター入試の結果である。2018年度の入学者が100名となっており、2015年から2017年までは約80名となっているため、前半は思ったほどではなかったが、後半が予想に反して好転したと言える。また、2019年は全地域で増加しており、実数では14名増加している。

この結果からわかることは、驚異の歩留りが起きているのだが、この1年間に取組んできた基礎固めである高校訪問等の活動と、その他の取組のすべてが良い方向に振れたことによって、このような結果につながったと思っている。



	入学者：一般＋センター利用						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	75	44	48	43	63	63	336
北海道	0	0	0	0	1	3	4
青森県	6	2	4	2	3	5	22
岩手県	6	6	7	7	10	7	43
秋田県	7	8	3	3	2	10	33
山形県	13	5	13	10	10	12	63
福島県	6	9	7	2	6	9	39
関東	1	2	0	3	1	0	7
新潟県	3	1	1	2	1	5	13
その他	2	3	0	0	3	0	8
合計	119	80	83	72	100	114	568

3. 考察

志願者データ、入学者データ、それぞれに特徴的な結果が率的にも実数的にも現れているのであるが、その結果からわかることは、いろいろな広報活動が成果につながることが実証されている。今回の結果は、入学定員（285名）の94%に到達したことで、今後さらに入学者を増やしていける可能性を示せたと思っている。

なお、次年度の取組として、今年以上に良くするために、Web出願の導入、Webによる過去問

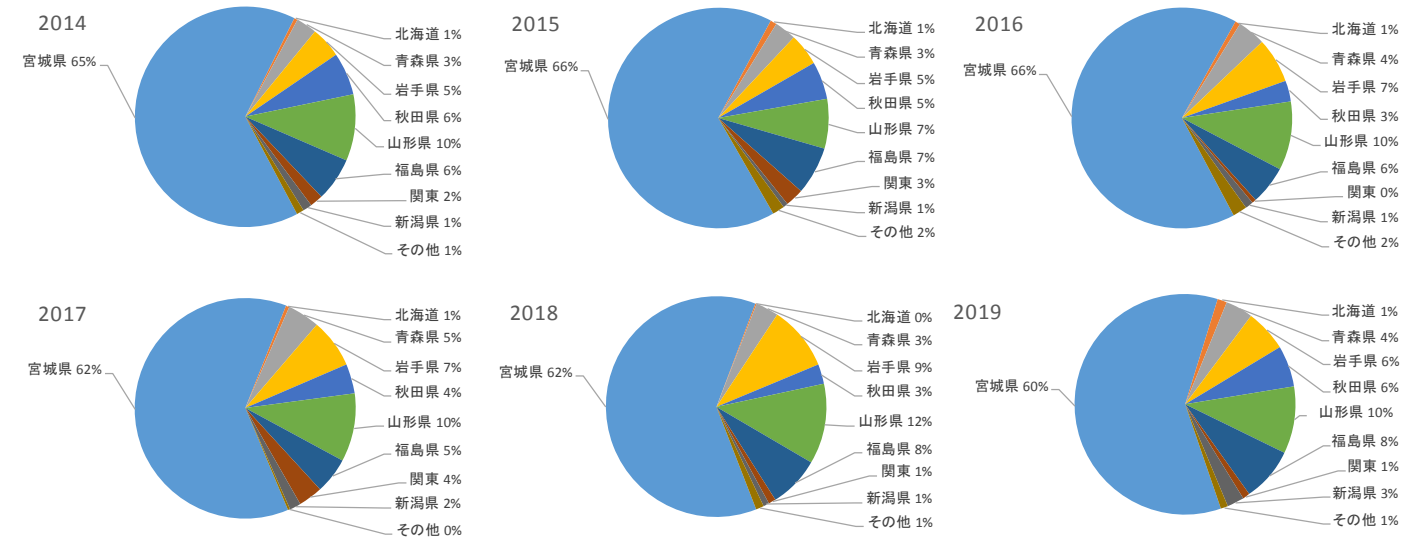
題の掲載サービスの採用、2020 大学案内の大幅リニューアル（2 年掛かりで作成）完了、資料請求データの一本化や進学相談会の参加数の増加など、多数検討している。これをやればよくなるとは言えないが、費用対効果を意識し、この 2 年間も実施してきたため、効果のありそうなことはやっていく方向で進める。

最後に

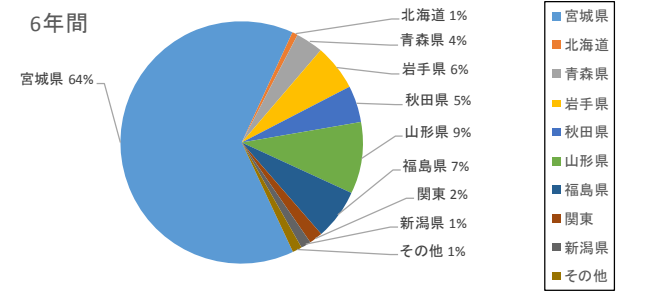
2019 年度の結果からも明らかであるが、2 年間で V 字回復している。この好結果をさらに伸ばすためには、立ち止まるのではなく、前に進むしかないと思う。また、高校別累積データの結果については仙台白百合学園が一番多く、その他の高校については、年度ごとにばらつきがあるため、ちょっとわかりづらいかもしれない。一応拾い出すとこのような結果となっている。志願者累積では、①仙台白百合学園、②富谷、③古川黎明、④聖ウルスラ学院英智、⑤仙台育英学園、⑥東北学院榴ヶ岡、⑦古川、⑧石巻好文館、⑨塩釜、⑩仙台、⑪泉松陵などになっている。ちなみに入学者累積では、①仙台白百合学園、②富谷、③仙台育英学園、④泉松陵、⑤聖ウルスラ学院英智、⑥塩釜、⑦宮城広瀬、⑧聖ドミニコ学院、⑨東北学院榴ヶ岡、⑩盛岡白百合学園、⑪常盤木学園、⑫仙台などになる。このデータは、多い順から並べて記載しているが、同人数の高校も多くあるため、切りの良いところまで記載していることを申し添える。

志願者データと入学者データの状況からわかることは、大学の取組がきちんと高校側に伝われば、または生徒に伝われば、本学に興味を持ち、出願につながるのだと思う。また、大学が何もしなければ、何も伝わらないということは明らかであり、行動を起こし活動を見える化することが最善策であろう

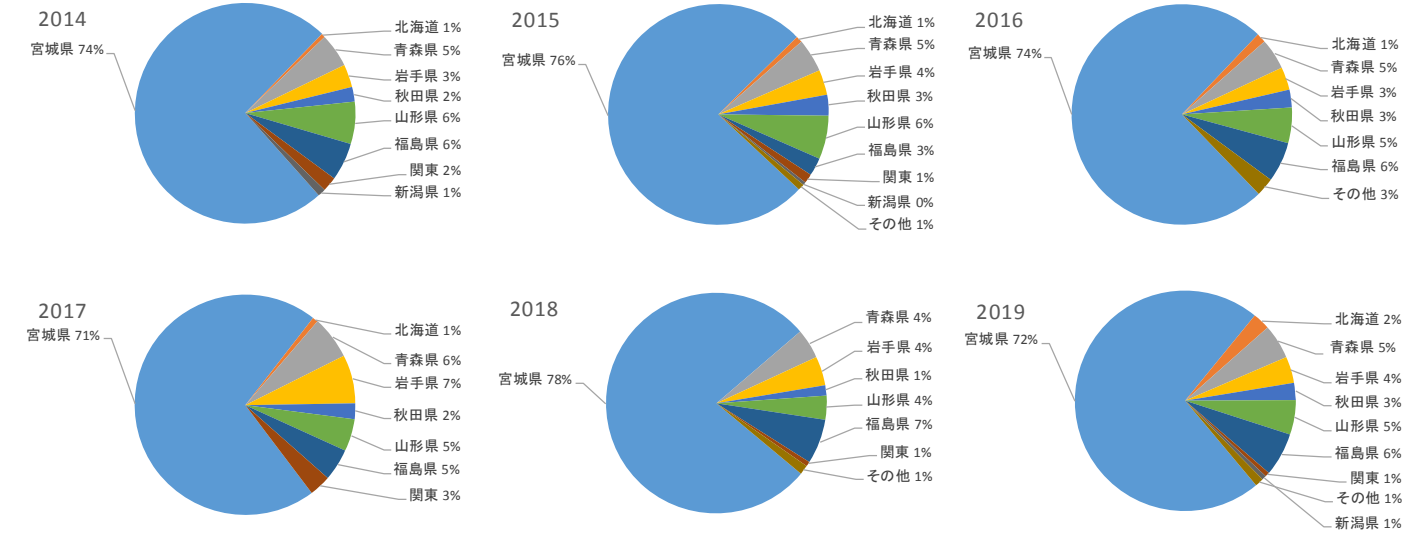
2014～2019年度 県別『志願者』内訳の状況



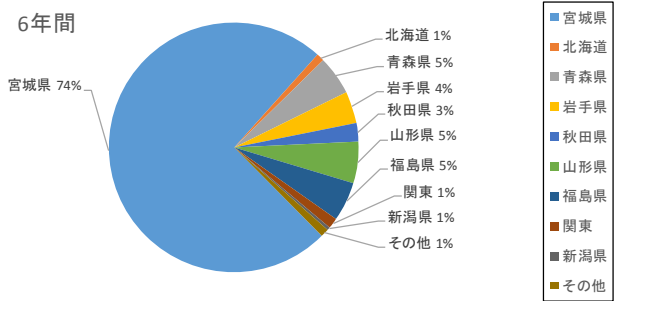
	志願者数						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	525	490	345	261	294	341	2256
北海道	4	7	4	2	1	8	26
青森県	25	23	21	20	16	23	128
岩手県	36	35	35	30	45	35	216
秋田県	51	41	16	18	14	34	174
山形県	78	54	53	42	56	56	339
福島県	52	52	30	22	36	45	237
関東	15	20	3	15	5	6	64
新潟県	11	5	6	7	4	14	47
その他	9	13	11	1	6	6	46
合計	806	740	524	418	477	568	3533



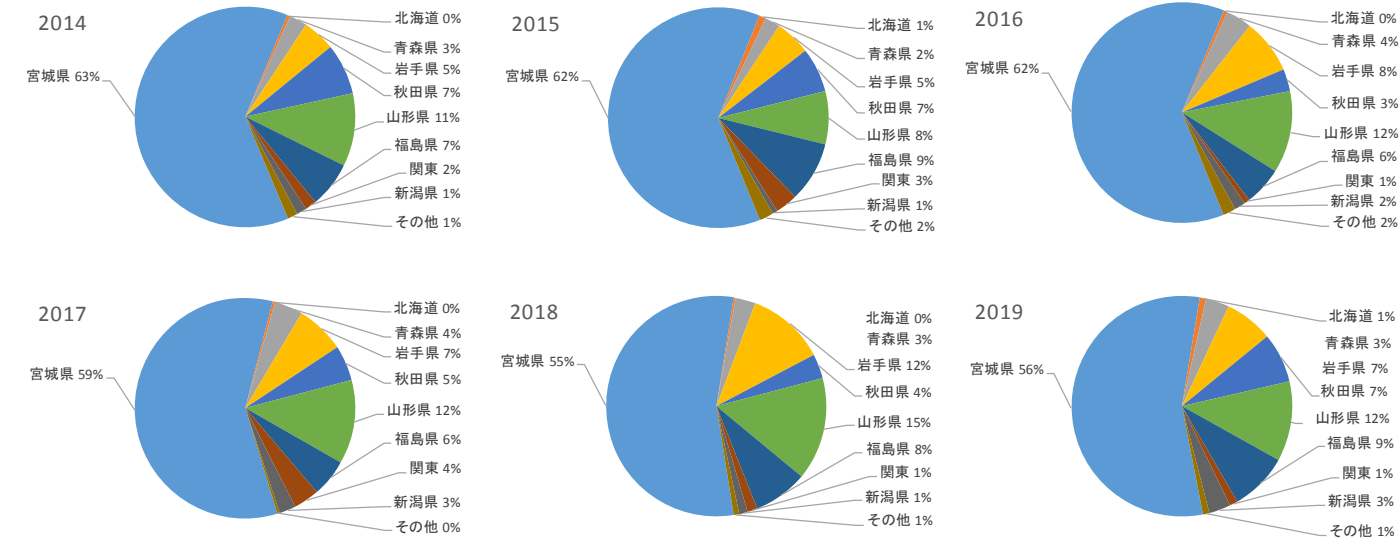
2014～2019年度 県別『志願者』内訳の状況：AO+推薦



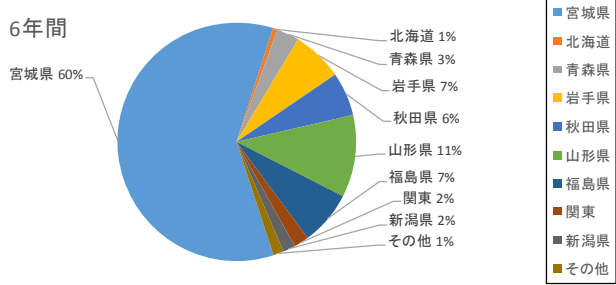
	志願者数：AO+推薦						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	133	168	113	90	108	113	725
北海道	1	2	2	1	0	4	10
青森県	9	11	7	8	6	8	49
岩手県	6	8	5	9	6	6	40
秋田県	4	7	4	3	2	4	24
山形県	11	14	8	6	5	8	52
福島県	10	6	9	6	9	10	50
関東	4	3	0	4	1	1	13
新潟県	2	1	0	0	0	1	4
その他	0	2	4	0	2	2	10
合計	180	222	152	127	139	157	977



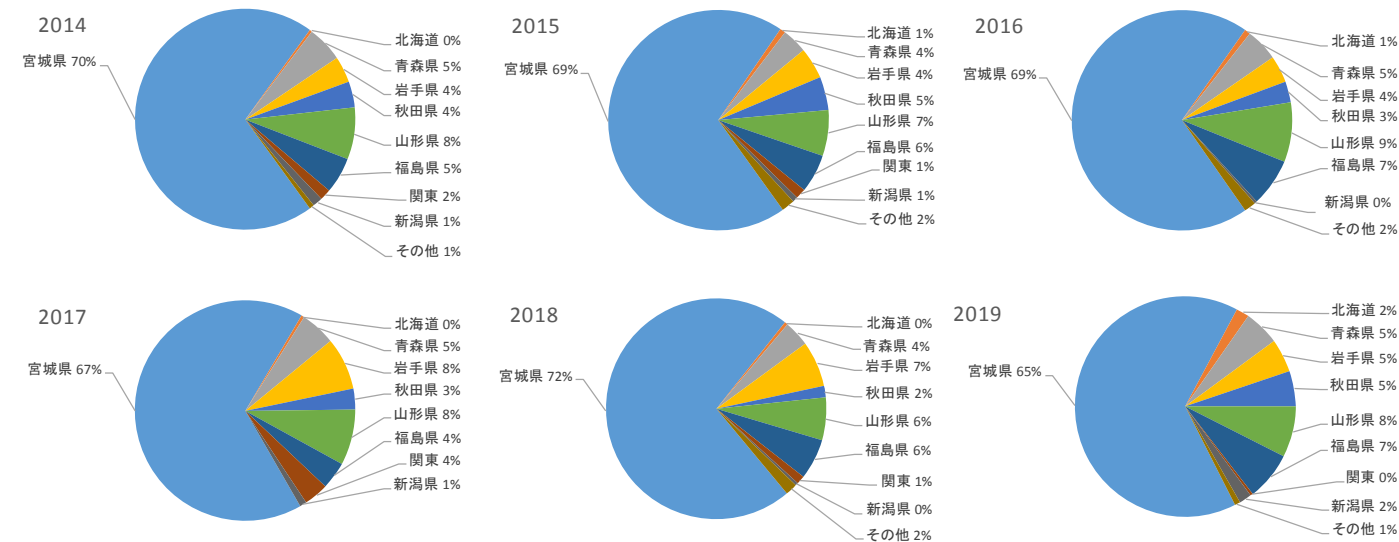
2014～2019年度 県別『志願者』内訳の状況：一般+センター利用



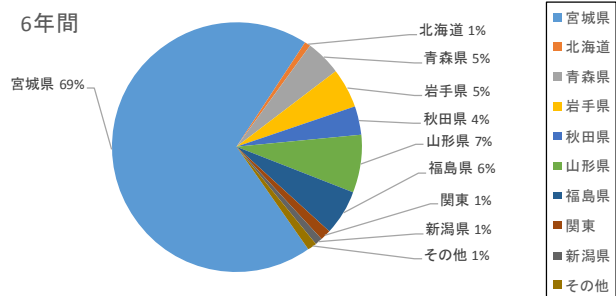
	志願者数：一般+センター利用						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	392	322	232	171	186	228	1531
北海道	3	5	2	1	1	4	16
青森県	16	12	14	12	10	14	78
岩手県	30	27	30	21	39	29	176
秋田県	47	34	12	15	12	30	150
山形県	67	40	45	36	51	48	287
福島県	42	46	21	16	27	35	187
関東	11	17	3	11	5	5	52
新潟県	9	4	6	7	4	13	43
その他	9	11	7	1	3	4	35
合計	626	518	372	291	338	410	2555



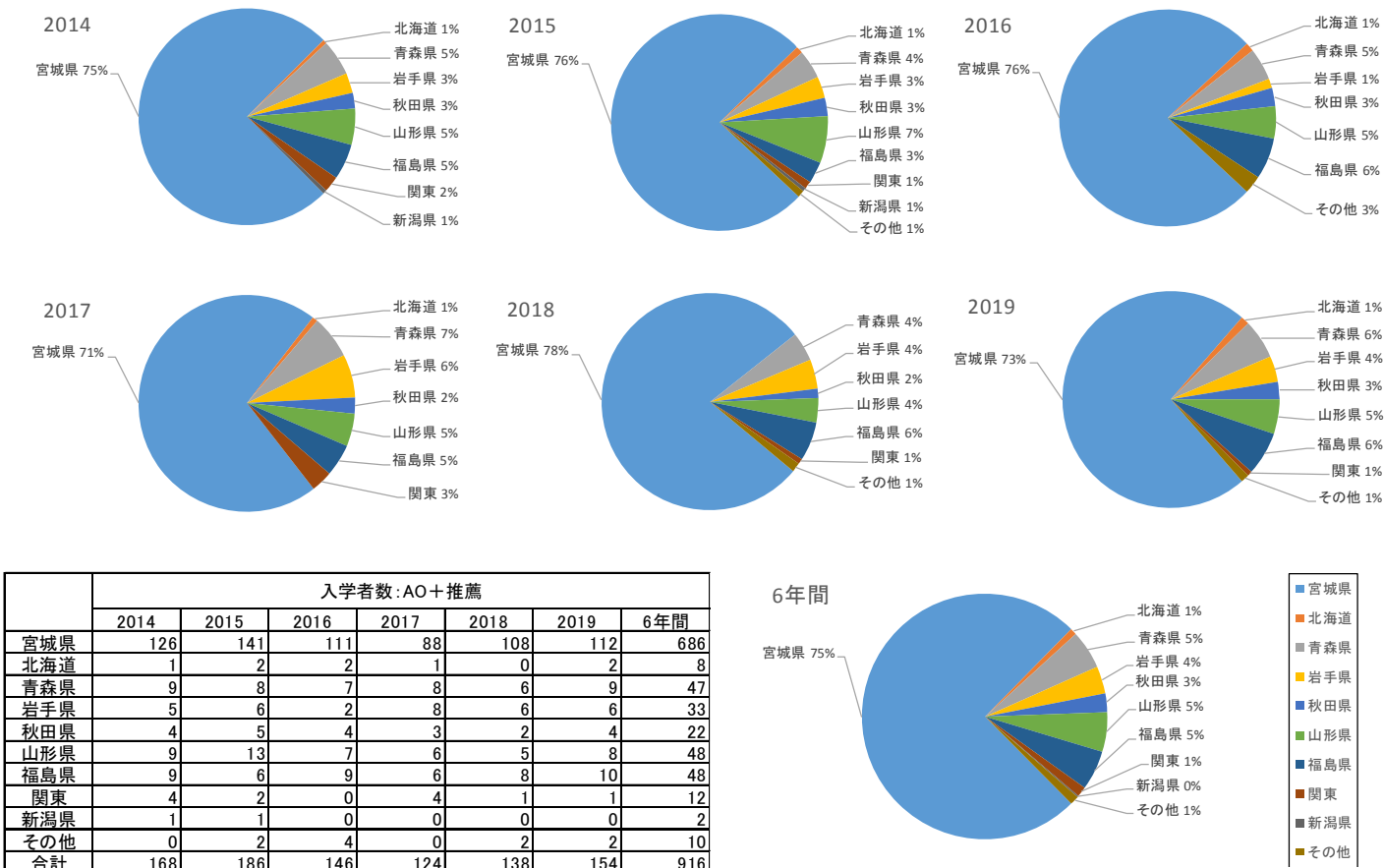
2014～2019年度 県別『入学者』内訳の状況



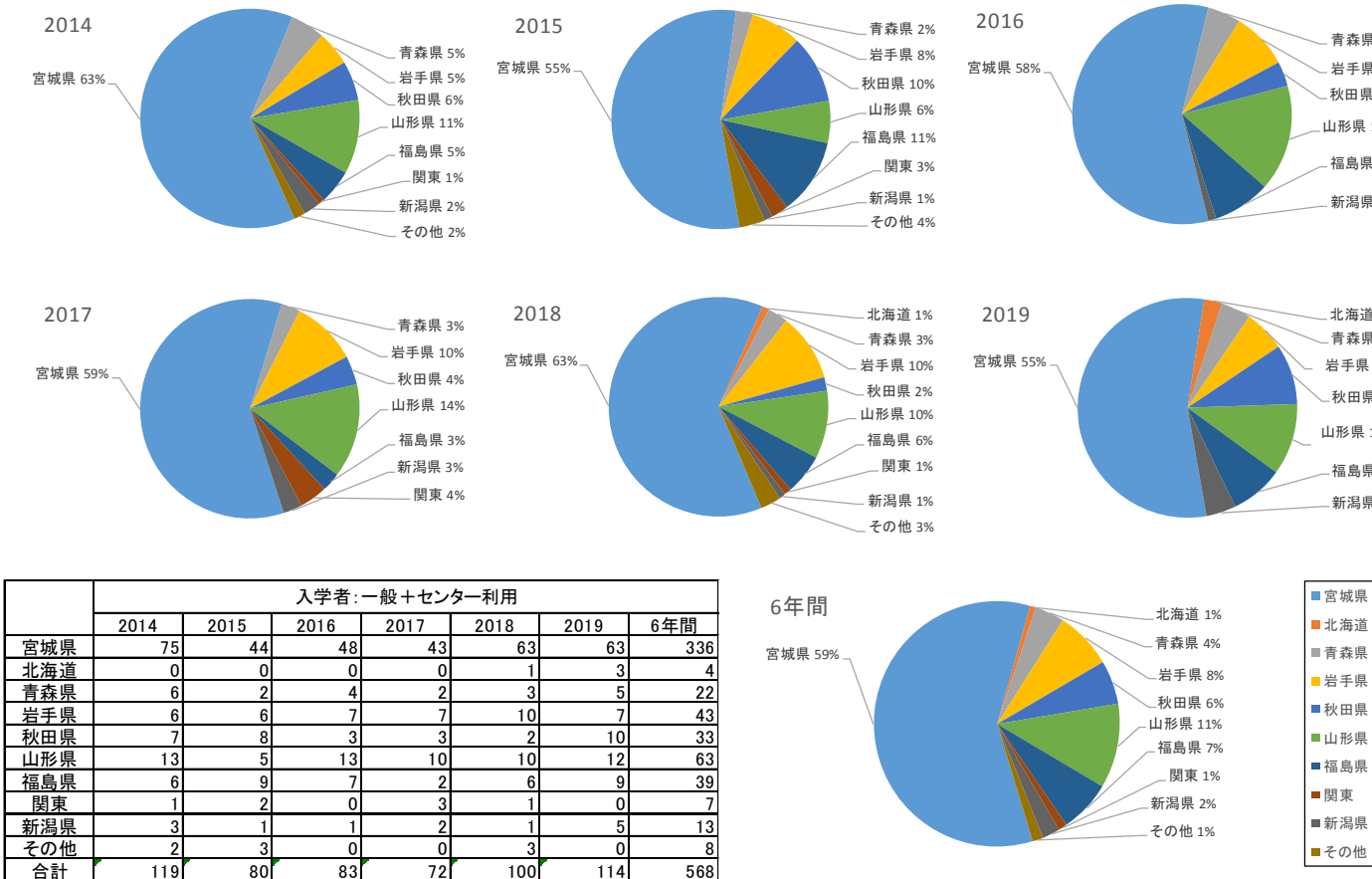
	入学者数						
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	6年間
宮城県	201	185	159	131	171	175	1022
北海道	1	2	2	1	1	5	12
青森県	15	10	11	10	9	14	69
岩手県	11	12	9	15	16	13	76
秋田県	11	13	7	6	4	14	55
山形県	22	18	20	16	15	20	111
福島県	15	15	16	8	14	19	87
関東	5	4	0	7	3	1	20
新潟県	4	2	1	2	1	5	15
その他	2	5	4	0	4	2	17
合計	287	266	229	196	238	268	1484



2014～2019年度 県別『入学者』内訳の状況：AO+推薦



2014～2019年度 県別『入学者』内訳の状況：一般+センター利用



第 4 部

本学の地域貢献研究センターのこれまでの動向と
今後の方向性について

IR 推進委員会

図書・地域貢献研究委員会担当 WG

本学の地域貢献研究センターのこれまでの動向と今後の方向性について

第 1 章 本学の地域貢献研究センターの設置の経緯とこれまでの活動状況

1. 地域貢献研究センター設立の経緯

本学の地域貢献研究センターの設立は 2016(平成 28)年である。その当時、すでに近隣の大学は「地域貢献」や「社会貢献」を行うためのセンターを設置しており、かなり積極的に地域との連携を打ち出している状況であった。それに対して、本学は「地域貢献」や「社会貢献」の面で大変遅れをとっているように思われがちではあったが、決して全く何もしていない大学というわけではなかった。それでも地域連携・社会貢献のための総括的なセンターがなかったがために、本学の「地域貢献」や「社会貢献」があまり見えていなかったし、またそれらを PR する機会を失っていたと言わざるを得なかった。そのような状況の中、2016 年に地域貢献研究センターを急いで設置するに至った理由の一つは、外部資金(補助金)の獲得があったからである(図 1)。本学では地域連携・社会貢献のための総括的なセンターを「地域貢献研究センター」という名称に決定し、組織上は図書館の下部組織として設置することになったが、これは「急いで設置する」ために理事会審議事項ではなく、教授会審議事項で承認を得て進められるほうを選んだわけである。地域貢献研究センターが図書館の下部組織となったため、センター長は図書館長が兼務する形となった。

2. 地域貢献研究センター運用規程

2016 年 6 月 1 日に施行された本学の地域貢献研究センター運用規程については、別添資料 1 を参照していただきたい。

3. 地域貢献研究センターの活動状況

本学の地域貢献研究センターの正式な設立は 2016 年であるが、前年の 2015 年からセンター設立に向け、地域連携・産学連携の事業に取組み始めていたので、ここでは 2015 年度から 2018 年度までの主な活動内容を記しておきたい。

(1) 2015(平成 27)年度

①産学連携・地域貢献：NEXCO 東日本高速道路株式会社東北支社とネクセリア東日本株式会社東北支店の高速道路限定スイーツ開発の企画に、食品開発に興味のある健康栄養学科の学生 19 名が協力し、地元の食材を利用した「Sendai Shirayuri Presents ロールケーキ ヨーグルトクリームテイスト」と「Sendai Shirayuri Presents ブラウニー セサミウォールナッツテイスト」を開発し、サービスエリア等での販売に至った。開発のコンセプトは、「男性から女性にプレゼント」、「女性から男性にプレゼント」といった互いにプレゼントしたくなるような全く違ったスイーツ 2 種とした。

○販売開始日：2015(平成 27)年 7 月 8 日

○販売箇所：東北自動車道 紫波 SA(下り線)[岩手県紫波郡]、前沢 SA(上下線)[岩手県奥州市]、

長者原 SA(上下線)[宮城県大崎市]、鶴巣 PA(上下線)[宮城県黒川郡]、菅生 PA(上下線)[宮城県柴田郡]

○関連記事：『Highway Walker』8 月号(2015 年), p.50. 『河北新報』2015(平成 27)年 8 月 8 日朝刊。

タイプ2「特色を発揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくり」									
設問項目			H28年度		H27年度	H26年度	H25年度		
			予定	点数	点数	点数	点数		
基本的事項に係る評価	(1)	実施体制	1	大学等所在地の都道府県又は市区町村等との包括連携協定の締結	3点	3/3	10/10	10/10	10/10
			2	全学的な地域連携のためのセンターの設置	7点	7/7	7/7	10/10	10/10
			3	地域の課題解決に向けた継続的な協議	5点	5/5	5/5	5/5	
			4	自治体からの経済的支援の状況	5点	5/5	5/5	5/5	0/5
				小計	20点	20/20	27/27	30/30	20/25
	(2)	貢献内容	10	公開講座の実施状況	3点	3/5	3/5	3/5	3/5
			5	地域を対象とした学生主体の授業の必修化	3点	3/5	0/3	0/3	0/3
			6	教育課程編成の際の自治体・地元産業界等からの意見聴取	5点	5/5	3/3	0/3	0/3
			7	地域課題解決を目的とした研究の実施	3点	3/3	2/2	0/3	0/3
			8	地方企業等への就職状況【新規】	2点	2/2			
			9	地域における教育支援又は子育て支援の実施	3点	3/3	2/2	2/2	2/2
				社会人に対する入学選抜制度の実施				2/2	2/2
			11	社会人が就労しながら学修できる多様な履修形態の整備	0点	0/2	0/2	0/2	0/2
			12	履修証明プログラムの開講及び社会人受講生への証明書の交付	0点	0/2	0/2	0/2	0/3
			13	(⑫を実施している場合)プログラム策定の際の自治体・地元産業界等からの意見聴取	0点	0/2	0/2	0/2	0/2
			14	科目等履修生制度に基づく社会人学生の受入	3点	3/3	2/2	2/2	2/2
			15	雇用保険法に基づく教育訓練給付制度の対象講座の開設	0点	0/2	0/2	0/2	0/2
			16	社会人学生に対する育児支援の実施	2点	2/2	2/2	0/2	0/2
				大学等施設の計画的開放				0/2	2/2
			17	高齢者の学び直し	2点	2/2	2/2	0/2	0/2
				小計	26点	26/38	16/29	9/35	11/35
合計			46点	46/58	43/56	39/65	31/60		

図1 補助金タイプ2における「全学的な地域連携のためのセンターの設置」

(2) 2016(平成28)年度

①産学連携・地域貢献：NEXCO 東日本高速道路株式会社東北支社とネクセリア東日本株式会社東北支店の高速道路限定オリジナルメニュー開発の企画に、メニュー開発に興味のある健康栄養学科の学生7名が協力し、地元の食材を利用したオリジナルメニューを数多く提案し、その中で選ばれた5つのメニューがサービスエリア等での販売に至った（プレスリリース2016.7.13）。

○販売開始日：2016(平成28)年7月19日

○販売箇所及びメニュー：

- 東北自動車道 長者原 SA(上り線) レストラン「伊達」[宮城県大崎市]
「蔵王チーズとデリシャストマトソースのパスタ」、「三陸産わかめサラダ」
- 東北自動車道 長者原 SA(下り線) 牛たん専門店「冠舌屋」[宮城県大崎市]
「牛タン野菜炒め～チンジャオロース風～」
- 東北自動車道 菅生 PA(上り線) フードコート[宮城県柴田郡]
「豆乳ごまだれ温麺」

東北自動車道 菅生 PA(下り線) フードコート「丹誠庵」【宮城県柴田郡】

「名物 三角揚げと十割そば (冷)」

○関連記事：『交通毎日新聞』2016(平成28)年7月21日。

『河北ウィークリー』2016(平成28)年8月11日。

『Highway Walker』10月号(2016年), p.18。

②官学連携(協定締結)：宮城県農林水産部と仙台白百合女子大学との「みやぎの水産物普及活動に関する協定」、調印式：2017(平成29)年2月9日(宮城県庁)。

(3) 2017(平成29)年度

①産学連携：(株)農直 HONOKA と仙台白百合女子大学の協働事業 女子大生考案「旬の食材を取り入れたお花見弁当」第3弾(泉中央セルバ地下1階「穂野か」)

・2017年4月20(木)～5月4日(木) 春のお花見弁当2種を期間限定で販売(20食)

②産学連携(協定締結)：ベガルタ仙台との「栄養マネジメント支援」に関する協定締結、2017年6月9日(金)。

③各種講座：学都仙台コンソーシアム サテライトキャンパス講座(仙台市市民活動サポートセンター)

・2017年6月3日(土) 10:30～12:00 「知って欲しい! 睡眠のこと」

・2017年9月9日(土) 10:30～12:00 「消化管—いのちを支える栄養の入口—」

④各種講座：みやぎ県民大学講座(仙台白百合女子大学)

「骨を元気にする—骨はからだの母親—」全4回

・2017年7月1日(土)

10:00～12:30 第1回「モデル弁当に、骨を元気にする栄養素はどのくらい含まれていますか？」

13:00～15:00 第2回「骨と関節のはたらきを知ろう」

・2017年7月8日(日)

10:00～12:30 第3回「実践編 1：骨を元気にする献立を作ってみよう」

13:00～15:30 第4回「実践編 2：骨を丈夫にする運動をしてみよう」

⑤各種講座：仙台白百合女子大学 第30回公開講座(仙台白百合女子大学)

・2017年7月15日(土) 13:00～14:30

「シャルトル大聖堂のラビリンス：世界に貢献するカトリックの象徴」

リチャード・ガードナー氏(上智大学名誉教授)

講座終了後ラビリンス・ウォーク体験(先着20名) 14:45～16:30

⑥地域貢献：泉マルシェ 2017 協賛参加(泉中央ペデストリアンデッキ)

・2017年9月16日(土) 10:00～17:00

⑦地域貢献：第1回泉区オープンテニストーナメントダブルス(仙台白百合女子大学)

・2017年10月1日(日) 9:00～15:00

⑧地域貢献：ゆりっこ広場(仙台白百合女子大学)

・年間10回開催：6/21、7/19、8/9、9/29、10/13、11/10、12/8、1/12、2/9、3/9

⑨地域貢献：白百合カフェ(仙台白百合女子大学、仙台白百合会特別養護老人ホーム梅が丘)

・年間11回開催：4/19、5/27、6/21、7/15、8/23、9/22、10/18、11/25、12/20、2/21、3/10

⑩地域貢献：マイナビベガルタ仙台レディースへのまごころ弁当のお届け

・年間5回：4/27、5/18、6/8、7/10、9/12

⑪地域貢献：マイナビベガルタ仙台レディースジュニアユース対象スポーツ栄養セミナー(仙台白百合

女子大学)

・年間3回：4/22、7/15、11/18

⑫地域貢献：泉6大学まちづくりフェスティバル（泉区中央市民センター）

・2018年2月12日(月) 9:00～14:30

(4) 2018(平成28)年度

①産学連携：(株)農直 HONOKA と仙台白百合女子大学の協働事業 女子大生考案「旬の食材を取り入れたお花見弁当」第4弾（泉中央セルバ地下1階「穂野か」）

・2018年4月14日(土)～4月23日(木) 春のお花見弁当2種を期間限定で販売(20食)

②各種講座：学都仙台コンソーシアム サテライトキャンパス講座（仙台市市民活動サポートセンター）

・2018年6月16日(土) 10:30～12:00 「新しい脂質栄養学～本当に脂質は悪者ですか？～」

・2018年6月23日(土) 13:00～14:30 「作家と食べもの」

・2018年7月21日(土) 10:30～12:00 「『夜と霧』に学ぶ “生きる意味”」

・2019年1月26日(土) 10:30～12:00 「仙台学2019「戦中戦後の学校給食 仙台編」

③各種講座：みやぎ県民大学講座

「食と健康—ロコモに負けないからだづくり—」全4回

・2018年6月30日(土)（泉区中央市民センター）

10:00～12:30 「筋肉量アップのための献立実習」

13:00～15:00 「ロコモへの道：筋肉の一生」

・2018年7月7日(土)（仙台白百合女子大学）

10:00～12:30 「ロコモって？—筋肉量を増やすための栄養素とは—」

13:00～15:30 「筋力をアップしてみよう」

④各種講座：仙台白百合女子大学 第31回公開講座（仙台白百合女子大学）

・2018年7月14日(土) 13:30～15:30 「教育を支える霊性—アウグスティヌスの『心の眼』—」

田中智志（東京大学大学院教育学研究科教授）

⑤各種講座：秋野暢子さんトークショー（仙台白百合女子大学）

・2018年7月14日(土) 9:30～10:30 「ボランティアにおける心構え（東北への震災復興支援活動）」

秋野暢子（女優）

⑥各種講座：カトリック研究所特別講演会（仙台白百合女子大学）

・2018年9月29日(土) 13:30～15:00 「将棋と信仰」

加藤一二三氏（仙台白百合女子大学客員教授）

⑦各種講座：出張出前講座

・2018年10月2日(火) 10:00～11:30 「健康づくりの食生活と運動について1」（松陵市民センター）

・2018年12月4日(火) 10:00～12:00 「健康づくりの食生活と運動について2」（仙台白百合女子大学）

・2019年2月12日(火) 10:00～11:30 「健康づくりの食生活と運動について3」（松陵市民センター）

⑧各種講座：泉区中央市民センター「泉シニア塾」

・2019年2月13日(水) 10:00～11:15 「作家と食べ物」

⑨地域貢献：泉マルシェ2018（泉中央ペデストリアンデッキ）

・2018年9月22日(土) 10:00～17:00

⑩地域貢献：第2回泉区オープンテニストーナメントダブルス（仙台白百合女子大学）

・2018年9月30日(日) 9:00～15:00

⑪**地域貢献**：いずみ絆プロジェクト支援事業（泉区中央市民センター）

・2018年12月16日(日) 15:00～17:00

「健康な食事をとおした絆づくり・みんなで楽しむおせち料理」

「地域生き活きプロジェクト」

⑫**地域貢献**：ゆりっこ広場会場（仙台白百合女子大学）

・年間12回開催：4/25、5/23、6/13、7/11、8/8、9/12、10/10、11/14、12/12、1/9、2/13、3/13

⑬**地域貢献**：白百合カフェ（仙台白百合女子大学、仙台白百合会特別養護老人ホーム梅が丘）

・年間9回開催：5/19、6/20、7/14、9/15、10/17、11/10、12/18、2/20、3/9

⑭**地域貢献**：マイナビベガルタ仙台レディースへのまごころ弁当のお届け

・年間4回：4/27、5/18、9/18、11/20

⑮**地域貢献**：マイナビベガルタ仙台レディースジュニアユース対象スポーツ栄養セミナー（仙台白百合女子大学）

・年間3回：4/21、7/14、10/13

⑯**その他**：泉区町内会研修会参加（イズミティ 21）

・2018年11月19日(月) 16:00～19:00

⑰**その他**：七北田中学校職場体験活動受入れ（女子生徒3名）

・2018年11月13日(火)～16日(金) 9:00～16:00

⑱**その他**：泉6大学まちづくりフェスティバル参加（仙台市障害者総合支援センター）

・2019年2月11日(月) 9:00～14:00

第2章 本学教員による地域貢献活動の具体例

1. 2018(平成30)年度の地域貢献活動調査

2018年度は、地域貢献研究センター長より、全教員対象に過去3～5年間を中心に自己の地域貢献活動に相当すると思われるものの事例を提出するよう依頼がなされた。その依頼に対して提出があった教員の自己申告による地域貢献活動事例をまとめたものを表1～4に示す。

各学科の提出率を見てみると、健康栄養学科 58.8%、人間発達学科 53.8%、心理福祉学科 46.2%、グローバル・スタディーズ学科 16.7%であった。第1章の3の地域貢献研究センターの活動状況に挙げられた事例に関わっている教員は全員調査に回答していることから、未提出の教員は単に未提出であったという以外に、地域貢献活動を行っていない可能性も示唆された。

表1 健康栄養学科教員による地域貢献活動事例

健康栄養学科	分類	対象	内容
A	講座講演	保育従事者	予定:食育について
	催し物	一般・学生・保護者	学修支援センター企画:ワールドクッキング(2015.10.25, 2016.10.23)
	調査研究	高校生・学生	食育に関する研究(孤食、健康観など)
B	催し物	仙台市民	白百合テニス 2017年度18回 2018年度18回
	講座講演	仙台市民	健康づくり講演会講師(2017.9.3)「食から始めるいきいき脳～認知症予防と栄養～」
	講座講演	大和町民	平成27年度みやぎ県民大学(2015.9.25)「かまぼこで健康増進ーかまぼこでスマートに」
	講座講演	宮城県民	平成26年度みやぎ県民大学(2014.7.12)「脳の働きを良くする食べ物」
	産学連携	マイクロアルジェ	2017年10月より微細藻類の認知症要望機能研究
	産学連携	蒟蒻屋本舗	「ナノコン」を用いた食品の機能性研究及びレシピ開発
C	講座講演	宮城県民	2017年度みやぎ県民大学「骨を元気にするー骨はからだの母親」
	講座講演	宮城県民	2018年度みやぎ県民大学「食と健康ーロコモに負けないからだづくり」
	調査研究	宮城県農林水産部	2016年より、みやぎの水産物普及活動に関する実践研究
	調査研究	ベガルタ仙台	2017年より、栄養マネジメント支援に関する実践研究
	講座講演	仙台市内小中生	2013年より、楽学プロジェクト「栄養士の仕事」
D	催し物	学生	2017年よりJA山形・地域担い手センター・サクランボ収穫支援ボランティア
	催し物	南郷住民	2015年より気仙沼市南郷地区災害公営住宅での栄養アセスメント(夏・冬)
E	講座講演	若林区食育関係者	平成30年度若林区食育情報交換会「子どもの心とからだの育ちと食」(2018.11.20)
	講座講演	仙台市民	2018年度みやぎ県民大学「食と健康ーロコモに負けないからだづくり(第1回筋肉量アップのための献立実習)」(2018.6.30)
	講座講演	仙台市民	2013年よりみやぎ県民大学(2014,2015,2016,2017各1回)
	講座講演	名取市民	2014年より名取市民対象の各種講演(2014・2017各1回, 2015は3回, 2016は2回)
	講座講演	近隣市民	白百合カフェ講師「今日の食の問題を探るー認知症にならないためにー」(2017.7.15)
	講座講演	仙台市民	市民企画講座「健康は、毎日食べる野菜から」(2015.2.21, 2.28)
	調査研究	宮城県民	平成26年度「次世代に伝え継ぐ日本の家庭料理」聞き取り調査(日本調理科学会)
	産学連携	藤崎・株ゼライス	宮城県産フルーツオリジナルゼリー商品開発・販売(2018年6月)
F	講座講演	宮城県民	2016年より、みやぎ県民大学(健康づくりと食生活、運動習慣などをテーマ)
G	講座講演	宮城県民	平成30年度みやぎ県民大学「食と健康ーロコモに負けないからだづくりー」
	講座講演	宮城県民	平成29年度みやぎ県民大学「骨を元気にするー骨はからだの母親ー」
H	未提出		
I	未提出		
J	未提出		
K	未提出		
L	未提出		

表2 人間発達学科教員による地域貢献活動事例

人間発達学科	分類	対象	内容
A	講座講演	高校教諭	2012年4月より、宮城県高校校長会講師、宮城県高校生徒指導主事研修講師、東北地区私学初任者研修講師
	講座講演	幼稚園教諭	2012年4月より、宮城県幼稚園教諭免許状更新講習講師
	その他	宮城県	2017年5月より、宮城県いじめ調査結果検証等委員会委員
	調査研究	登米市	2008年4月より、地域社会の心の健康相談に関する専門カウンセラー業務に従事
B	講座講演	札幌市民	北海道武蔵女子短期大学創立50周年記念講座 英国宗教劇・中世道德劇
C	催し物	近隣親子	ゆりっこ広場2017年度 6/21,7/19,8/9,9/29,10/13,11/10,12/8,1/12,2/9,3/9
	催し物	近隣親子	ゆりっこ広場2018年度 4/25,5/23,6/13,7/11,8/8,9/12
D	講座講演	一般市民	学都仙台サテライトキャンパス講座「やさしく学ぶ本格的英語発音講座」(2012.6/2・9・16)
	講座講演	一般市民	学都仙台サテライトキャンパス講座「やさしく学ぶ本格的英語発音講座(初～中級)」(2013.6/15・22・29)
	講座講演	ゆりの会	ゆりの会講演「世界の食卓から見えたもの」(2014.5.25)
	講座講演	ゆりの会	ゆりの会講演「世界の食卓から見えたものPartⅡ」(2018.6.2)
E	講座講演	仙台市民	講演「日本児童文学の歴史」
	講座講演	仙台市民	講演「子どもと文学」
F	催し物	県民・市民	『日韓国交正常化50周年記念』2015日韓美術交流展in仙台(2015.10.21～27)企画運営実行
	催し物	韓国民	『日韓国交正常化50周年記念』2016日韓美術交流展in全州(2016.9.9～15)企画訪問実行
G	講座講演	保育者	山形県山形市 こまぐさ学園「ナイトセミナー」講師(2015)
	講座講演	保護者・児童	東京都世田谷区桜ヶ丘小学校「保護者会講演」(2017)
	講座講演	保護者・幼児	宮城県仙台市泉区 森のぷーさん保育園「保護者会講演」(2017)
	調査研究	乳幼児親子	宮城県仙台市 0～5歳親子の食に関する栄養調査
	調査研究	仙台市保育所	宮城県仙台市 保育事業所における食育活動の実態調査
	調査研究	仙台市内	宮城県仙台市 屋外遊戯場の環境調査
	講座講演	保育者	オンキャンパス社会人講座「保育現場で今すぐできる遊び講座」(2016)
H	未提出		
I	未提出		
J	未提出		
K	未提出		
L	未提出		
M	未提出		

表3 心理福祉学科教員による地域貢献活動事例

心理福祉学科	分類	対象	内容
A	講座講演	近隣市民	「白百合カフェ」講演「頭の賢い使い方」(2017.5.27, 2018.7.14)
	講座講演	県民・市民	みやぎ県民大学「おいしく感じる心の秘密」(2016.7.19)
	その他	市内IT企業	2017年～「伊達なICT-WORKせんだい・みやぎ」大学等連携会議
B	催し物	近隣市民	白百合カフェ 2017年度・2018年度 年間5回
	催し物	仙台市民	白百合テニスとダブルストーナメント 2017年度・2018年度
	調査研究	泉区	「認知症カフェ」の実態と今後の検討課題(2018年3月報告) 仙台市泉区地域包括支援センター9か所
C	講座講演	宮城県民	2007年以降 宮城県教育庁生涯学習課登録講師
D	講座講演	介護実践指導者	予定:介護実践に必要なこと
	講座講演	一般市民	予定:認知症とともに
E	講座講演	一般市民ほか	予定:子どもの心の理解, 子どもの発達障害や児童虐待の理解・対応など, 子育て支援プログラム
	講座講演	保育園～大学生	予定:子どもの絵に見る心の危機と発達の停滞
F	特になし		
G	未提出		
H	未提出		
I	未提出		
J	未提出		
K	未提出		
L	未提出		
M	未提出		

表4 グローバル・スタディーズ学科教員による地域貢献活動例

G・S学科	分類	対象	内容
A	講座講演	仙台市民	学徒仙台コンソーシアムサテライトキャンパス講座(2013.12, 2018.6)「作家と食べ物」
	講座講演	仙台市民	歯と健康をまもる仙台市民の会「作家と食べものー太宰治と永井荷風を中心にー」(2016.11)
	講座講演	仙台市民	仙台白百合女子大学オンキャンパス社会人講座「作家は何を食べてきたのか」①②(2015.1)
	講座講演	南相馬市民	原町成人大学講座「作家と食べものー夏目漱石と森鷗外を中心としてー」(2014.11)
	講座講演	ゆりの会同窓生	仙台白百合短期大学・仙台白百合女子大学「ゆりの会」講師「作家と食べもの」(2015.5)
B	催し物	小学4～6年生親子	予定:「子ども(ロボット)プログラミング教室」(仮)
C	未提出		
D	未提出		
E	未提出		
F	未提出		
G	未提出		
H	未提出		
I	未提出		
J	未提出		
K	未提出		
L	未提出		

2. 各学科の地域貢献活動の分類から見る本学の地域貢献活動の傾向

各学科の教員が行っている地域貢献活動を分類で見ると、図2～5のようになる。どの学科も地域貢献活動として最も取り入れている(実施している)のは講演活動であることが分かる。健康栄養学科では、産学連携が実施されているのが特徴である。

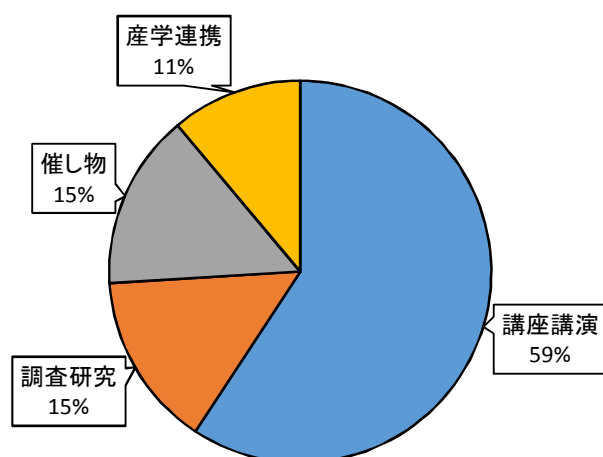


図2 健康栄養学科教員による地域貢献活動

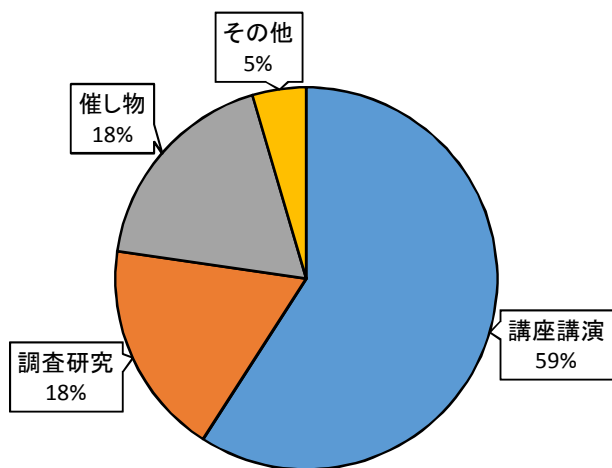


図3 人間発達学科教員による地域貢献活動

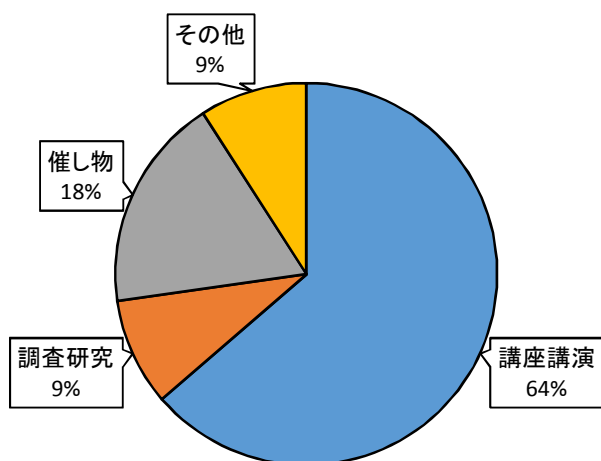


図4 心理福祉学科教員による地域貢献活動

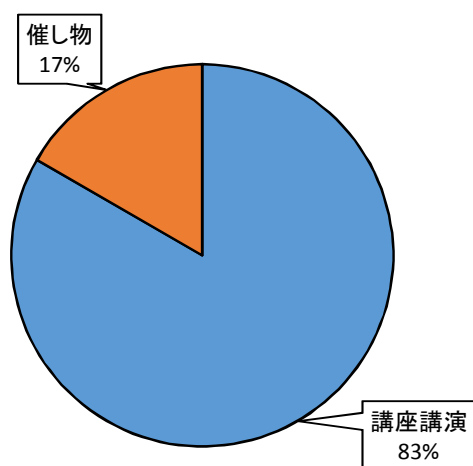


図5 グローバル・スタディーズ学科教員による地域貢献活動

大学全体としては、図6に示したように62%が講演関係となっている。今後、本学が目指す地域貢献を考える場合このままでよいのかどうかを考察するために、第3章では近隣の大学との比較を行ってみたい。

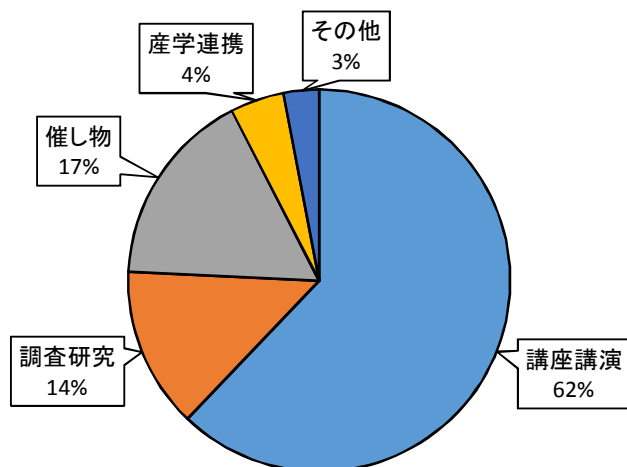


図6 学部(大学)全体としての地域貢献活動

第3章 近隣大学の地域貢献活動と本学の地域貢献活動の比較

1. 近隣大学の地域貢献活動について

近隣大学のHP上から見た地域貢献活動について簡単にまとめてみることにする。

(1) 東北大学の場合

東北大学の社会連携は、周辺地域から県、国、国際社会とワールドワイドなのが特徴である。東北大学では、教育・研究に次ぐ第3の使命は社会貢献であるとして、そのために産学連携機構という組織をもっている。また2018年には東北大学オープンイノベーション戦略機構を設置し、大型産学連携拠点として大学の開かれた知をイノベーションの源泉にした産学共創の推進を行うことを謳っている。

社会連携の例では、サイエンスカフェ、産学官金連携フェア2018みやぎ、東北大学MOOC、リベラルアーツサロンなどのほかに、部局主催講座やみやぎ県民大学大学開放講座、「学都仙台コンソーシアム」サテライトキャンパス公開講座、高校生のための公開授業などの公開講座を多数提供している。また産学連携では、産学官連携ポリシーに則り、民間等との共同研究や受託研究を数多く行い、官民イノベーションプログラム(国立大学に対する出資事業)により「事業イノベーションセンター」を整備して大学の研究開発成果の事業化・実用化を推進している。そのほかに研究開発、人材育成、地域社会への責任など相互の協力が可能な全ての分野において、大学全体として民間企業等と組織的連携を行っている。

(2) 宮城大学の場合

宮城大学の地域連携は「地域連携センター」が中心となっていて行われている。地域連携センターでは、企業・自治体等との連携推進、大学の持つ資源の地域への還元、連携研究成果等の大学教育へフィードバック、研究成果が持続的に産み出されるためのシステム構築などを推進するセンターである。実際の社会連携(地域連携)では各種公開講座の他、地方公共団体・地域団体等との連携協定、教育関係機関との連携協定、企業・団体等との連携協定などが締結されており、一部は県外に及んでいる。HP上では連

携実績として、ワインや自動車、街づくりなどが掲載されている。

(3) 東北学院大学の場合

東北学院大学では、研究・産学連携として①生涯学習、公開講座、単位互換、②ボランティア、③**産学連携推進センター**の活動を挙げている。②のボランティア活動が社会貢献活動の一環として挙げられている点が特徴である。①では多くの公開講座の実績が HP 上に掲載され、③ではその名称が示すように、産学官の連携を図るもので、共同研究や委託受託研究、民間企業等からの研究者受入れを推進している。HP では共同研究事例が掲載されている。また地(知)の拠点大学地域共生推進機構、みやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成事業、学都仙台コンソーシアム、災害ボランティアステーションなども別建てで用意され、社会連携(社会貢献)の大きさが窺われる。

(4) 宮城学院女子大学の場合

宮城学院女子大学では、社会連携(地域連携)のために「**社会連携センター**」を設置しているが、少し分かりづらいものとなっている。HP 上の社会連携センターのところには、生涯学習講座や公開講座の開催や学生・教員による自治体での各種専門委員や調査研究、独自のボランティア活動などがあると謳ってはいるが、その成果は「自治体・企業との連携」、「海外大学との連携」、「地域との連携」という項目下に掲載され、生涯学習センターやリエゾン・アクション・センター、国際交流センターも設置されていることから、社会連携センターがどう機能しているかは不明である。(おそらく生涯学習センターやリエゾン・アクション・センター、国際交流センターが社会連携センターの下部組織であろう。) よって、社会連携センター(宮城学院女子大学の社会貢献活動)の包括内容は、①自治体との連携、②企業等との連携、③海外との連携(国際交流)→国際交流センターと海外留学協定校、④地域との連携、⑤学生の自主活動→リエゾン・アクション・センター、⑥生涯学習講座→生涯学習センター、⑦音楽リエゾンセンター、⑧音楽教室、⑨スポーツサイエンスラボであると捉えられる。

(5) 尚絅学院大学の場合

尚絅学院大学では地域貢献を前面には出しておらず、附属機関・施設のところに「**エクステンションセンター**」が置かれ、それが地域貢献に関与していることが HP 上で入っていくことで明らかとなる。エクステンションセンターは大学の持つ人的・物的な教育資源を積極的に開放し活用していくために設置された組織で、生涯学習センター、ボランティアセンター、総合型地域スポーツクラブの3つの事業をまとめている。生涯学習センターでは、オープンカレッジ、市民大学講座、リカレント講座などを取り扱っており、総合型地域スポーツクラブでは、テニス、バレーボール、ヨガストレッチ、ウォーキング、グランドゴルフ、レクダンス、キッズテニスなどのスポーツを対象としている。

(6) 東北生活文化大学の場合

東北生活文化大学の地域連携では高大連携も含めている。地域連携には①開放講座・公開講座、②ワクワクぷろじえくと、③出前授業、④国際交流委員会通信を挙げている。①開放講座・公開講座には、大学独自の公開講座のほか、みやぎ県民大学、学都仙台コンソーシアムサテライトキャンパス公開講座なども含めている。②ワクワクぷろじえくとでは、「ファッション」「食」「アート」「保育・教育」の分野で地域の方々と密着した活動を行っている。③出前授業は地域の生活向上をめざした「暮らしデザイン活動」の一環として、②ワクワクぷろじえくとと同じ目的で提供されているようである。④は地域連携に入れるべき内容なのかどうかは疑問である。

(7) 東北工業大学の場合

東北工業大学では、「地域連携センター」(RCC : Regional Collaboration Center)と「研究支援センター」(RSC : Research Support Center)を設置している。地域交流事業、地域連携協定、地域交流事業(一番町ロビー)は RCC、プロジェクト研究事業、産学連携事業、研究・知財支援事業は RSC が分担している。各事業とも内容が定義されており、その成果が HP 上に掲載されている。また地(知)の拠点大学 COC 事業、せんだいリノベーションまちづくり、学都仙台コンソーシアム、みやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成事業なども別建てで用意され、社会連携(社会貢献)の大きさが窺われる。

(8) 石巻専修大学の場合

石巻専修大学の社会貢献・連携は、高大連携交流活動、高大産連携プロジェクト、出前授業、復興共生プロジェクト、国際交流センター、国際交流センターONLINE、社会貢献・連携 ONLINE などに分類されているが、高校との連携と高校・大学・企業の連携が特徴的である。また組織的には「大学開放センター」と「共創研究センター」が設置されており、公開講座等も活発に行われている。大学間連携では、学都仙台コンソーシアムにも加盟している。仙台市内にある大学ではないので、より地域性の高い社会貢献に寄与していると思われる。

(9) 東北福祉大学の場合

東北福祉大学の場合は、脳科学をベースとした研究から産学連携研究・国際貢献・地域貢献など様々な活動を行っているといっており、産学・産学官連携プログラム、社会貢献・地域連携活動、自治体・団体等との主な協定などに分け、多くの活動実績等が分かりやすく掲載されている。やはり災害・ボランティア・福祉に関連するということで、地域や社会からの具体的な需要が大きい部分を担っているように思われる。

(10) 宮城教育大学の場合

宮城教育大学の場合、HP 上では研究・産学官・地域連携と称してはいるが、特に地域貢献・社会貢献に関連する部分は「企業・地域との連携」である。その中身は、受託事業、受託研究、共同研究、寄附金、技術相談、研究員の受入れとなっており、一見すると教育大学らしくない感じに思われてしまう。公開講座は別建てである。「研究・連携推進課」が担当しているものと思われる。

2. 他大学と本学の地域貢献活動の比較

表 5 に各大学の地域連携・社会連携に関するおおよそのプロフィールを示してみた。本学の地域連携・社会貢献はまだ小規模ではあるが、地道に行われているものと思われる。○印はついているものの、本学の産学連携や官学連携は不十分であると思われる。他大学と比較した場合、協定等の締結数がかなり少ない。国際交流に関しては、語学研修プログラムが中心となるが、本学には協定大学は比較的多く存在している。また本学の公開講座の数は、大学規模相応であると思われる。見かけ上は、他大学と同様な地域連携・社会連携を行っているようには見えるが、次の第 4 章で述べるように、地域貢献研究センター自体に組織上の問題があるため、うまく機能しない状況となっている。

表5 各大学の地域連携・社会連携に関するプロフィール

	東北大学	宮城大学	東北学院大学	宮城学院女子大学	尚絅学院大学	東北生活文化大学	東北工業大学	石巻専修大学	東北福祉大学	仙台白百合女子大学	宮城教育大学
地域連携のためのセンター	産学連携機構	地域連携センター	産学連携推進センター	社会連携センター	エクステンションセンター	(地域連携・高大連携)	地域連携センター	大学開放センター 共創研究センター	社会貢献・地域連携センター	地域貢献研究センター	研究・連携推進課
産学連携	○	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○
官学連携	○	○	○	○	○	△	○	○	○	△	○
国際連合との連携	○										
国際交流	○		○	○	○	○			○	○	○
地域社会との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
宮城県民大学	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
学都仙台コンソーシアム	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高大連携								○		△	
人材育成	○	COC+	COC+	COC+	COC+	COC+	COC+	COC+	○	COC+	COC+
公開講座・市民講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
社会人教育(生涯学習)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
備考		サテライトキャンパス	災害ボランティアステーション	音楽リエゾンセンター	オープンカレッジスポーツクラブ	ワクワクぶろじえくと		高大産連携	地域共創推進室 臨床心理相談室 次世代育成支援室 予防福祉健康増進室		

第4章 本学の地域貢献研究センターの目指すべき方向性

1. 本学の地域貢献研究センターの現状における問題点

本学の地域貢献研究センターの問題点は、大学運営組織図上の位置である。地域貢献研究センターは、大学運営組織図上、図書・地域貢献研究委員会の下に置かれている。それにもかかわらず、HP上では「研究・地域貢献」の下に、カトリック研究所、人間発達研究センター、ボランティア情報センター、図書館、学修支援センターと並列・同格に記載されている。そして「地域貢献研究センター」をクリックして表示されるのは、「催し物のご案内」や、「地域貢献研究センターとは」、「地域貢献研究センターの活動」であり、それらには全く中身がない。これは、地域貢献研究センターの業務を責任をもって取りまとめる者がいないことが一因となっている。よって、この状況の改善には、

①地域貢献研究センターの格上げを行い、大学運営組織図上では他のセンターと同格にする、

②センター長を（図書館長とは別に）起し、図書委員会とは別のものとする、

の2点を行うことが必須となるであろう。現状のままでは、HP上では本学の地域貢献の成果が見えてこないし、本学の地域貢献はどういうものを指しているのかのポリシーも見えてこない。勿論、これには現ホームページのデザインや階層づくりにも問題は多いと思われる。

本学の考える地域貢献・社会貢献がどういうものなのかが定義されていないが故に、大学広報室担当の公開講座や入試広報部担当の出張講座、ボランティア情報センター担当のボランティア活動、各学科の地域連携事業、産学連携、官学連携、国際交流センター担当の国際交流活動、本田町の清掃活動、学修支援センター担当の学生活動、人材育成プラン(ANA)などがHP上では分散されている。学都仙台コンソーシアムやみやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成への参画についても、扱い方が不明のままである。

2. 本学の地域貢献研究センターの目指すべき方向性

本学のような小規模大学において、地域貢献研究センターの扱い方をどう考えるかは大きな問題点である。地域貢献研究センターが図書・地域貢献研究委員会の下に設置されて 3 年となるので、独立したセンターになることを条件として、次のことを提案したい。

- ①本学の考える地域貢献の定義（地域貢献研究センターの業務範囲）をきちんと決定する。
- ②定義が決まれば、地域貢献の分類(範疇)がきまるので、それに本学の地域貢献実績を分けていく。
- ③年度ごと、分類ごとの過去の実績をまとめ、年次報告書を作成する。
- ④本学の足りない項目、過多になることなくできる項目などを見つけ、今後の計画を立てる。
- ⑤特に本学主催の公開講座は、年ごとにテーマ・担当者を決め、本学の PR 事項の一つとして重視する。
- ⑥現状で足りない官学連携・産学連携については、学長・学部長を含め、慎重かつ迅速に進める。
- ⑦ホームページの完全リニューアルを行う。

本学のような小規模大学では、東北大学や東北学院大学、東北工業大学と同じようなレベルの社会貢献は困難である。できる範囲のものをばらばらではなく、ある程度センター主導で卒なく進め、スマートに見える成果をあげることが必要である。一方、本学のような小規模大学では、地域貢献や社会貢献が第一の目的となることは決してなく、やはり第一目的は学生の教育であり、よく教育された役立つ優秀な卒業生を輩出することが最優先されるべきである。このことが真の地域貢献や社会貢献につながるものと考えられ、本学では卒業生が地域や社会で生き生きと活躍し、社会貢献できている事例を増やしていくことを真の目的として共有していきたいものである。

仙台白百合女子大学 地域貢献研究センター運用規程

(準 則)

第 1 条 本規程は、仙台白百合女子大学図書委員会規程第 2 条第 1 項(2)の規定に基づき、仙台白百合女子大学地域貢献研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営について必要な事項を定めるものとする。

(目 的)

第 2 条 センターは、産官民学連携事業の実施及び生涯学習の機会等を提供することにより、地域社会の諸機関との広範な分野での連携・協力体制を築き、共同研究及び研究交流等を推進しながら、地域社会の産業及び文化の進展に貢献することを目的とする。

(業 務)

第 3 条 センターは、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 地域社会の諸機関との地域活性化に関わる活動・研究等に関すること。
- (2) 地域の産業及び観光の振興、地域経済の発展に関すること。
- (3) 地域の教育及び文化の振興、生涯学習の推進に関すること。
- (4) 地域に潜在する課題を解決するための方策に係る研究に関すること。
- (5) その他、前条の目的を達成するために必要な事項に関すること。

(組 織)

第 4 条 センターには、次の教職員を置くことができる。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 運営委員
- (4) その他必要な職員

(センター長)

第 5 条 センター長は、図書館長が兼務する。

- 2 センター長の任期は、図書館長の任期に準じる。
- 3 センター長は、センターの業務を掌理する。

(副センター長)

第 6 条 副センター長は、センター長が必要と考えた場合に学長が委嘱する。

- 2 副センター長は、センター長の職務を補佐する。
- 3 副センター長はセンター長に事故があるときは、その職務を代行する。

- 4 副センター長の任期は、センター長の任期を超えないものとする。

(運営委員)

第 7 条 運営委員は、センター長が必要と考えた場合に、図書委員会メンバーの中から最大 2 名までを選出できる。

- 2 運営委員は、センターの業務の遂行に当たる。

(センター会議)

第 8 条 センターの運営に関する事項の審議及びセンターの業務を実施するため、センター長は必要な場合にセンター会議を開催する。

- 2 センター会議は、第 4 条に掲げる者をもって構成し、センター長が必要と認めるときは、それ以外の者を参加させることができる。
- 3 センター会議は、急を要する場合以外は、図書委員会開催日に招集する。

(事 務)

第 9 条 センターの事務は、図書館事務室において処理する。

(雑 則)

第 10 条 本規程に定めるもののほか、センターに関する必要な事項は、別に定める。

(規程の改廃)

第 11 条 本規程の改廃は、センター会議において審議し、教授会の議を経て学長が決定する。

附 則

- 1 本規程は、平成 28 年 6 月 1 日から施行する。
- 2 本規程施行後、最初に委嘱されたセンター長の任期は、平成 30 年 3 月 31 日までとする。

第 5 部

「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集
と分析」に関するアンケート調査報告

IR 推進委員会

事務部門担当 WG

1. はじめに

昨年度は、これからの大学運営の改善の一助に「大学事務職員の業務に関するアンケート」を実施し、事務職員の意識や日頃感じている課題や要望等についてとりまとめた。昨年の調査においては、自己啓発等SDの重要性、職員と教員との教職協働の重要性、適正な人事評価と処遇及びPDCAを活用した業務改善等についての意見が多く寄せられた。

大学として、上述の意見を参考に、「職員の人事評価制度」と「処遇」、評価と表裏一体となる「人材育成プラン」及び「心の健康問題により休職した職員の職場復帰支援制度」等を今年度中に策定し、来年度から試行する予定で現在作業を進めているとともに、より良い事務組織のあり方についての検討も鋭意進めている。

今年度においては、人材育成と資質の向上を目指し、昨今の大学を取り巻く状況を理解したうえで、小規模大学でのIR活動をどのように推進していくことが必要であるかを問題提起として、10月開催の課長等会で「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」（資料添付）を配付、説明を行い、その後、部門毎に全職員へ配付、勉強会を実施した。

本アンケート調査は、今後のIR推進委員会の活動に資するため、「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」についての理解度に関して確認するために実施したものである。

2. 調査概要

(1)対象職員

本学の専任事務職員(課長(等)職が在席する部署)30名

(男性 15 名、女性 15 名)。

(課長職 9 名、その他 21 名)

(2)実施日

2018 年 11 月 12 日 (月) ～11 月 30 日 (金)

(3)調査項目・アンケート用紙 (別紙添付)

(4)調査方法

無記名の自記式調査用紙を配付、留め置きとし、庶務課設置の回収箱による回収。

(5)回収率と分析対象

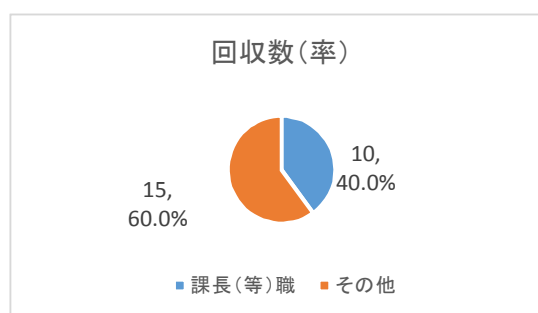
回収率は 83.3% (配付 30 名で回収 25 名) 25 名を分析対象とする。

3. 調査結果

質問 1 あなたの職位について。

	回収数
課長(等)職	10
その他	15
合計	25

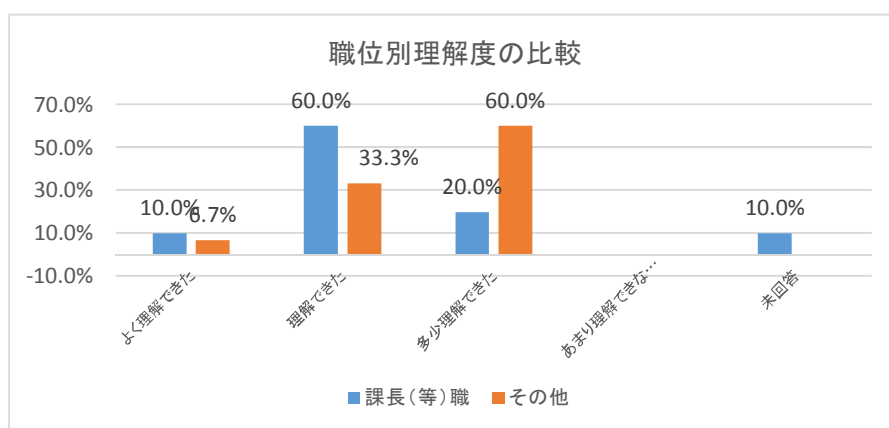
注) 1 名職名を間違えた職員がいたため、課長職が「1」多く集計された。



質問2 「はじめに」(概念図)について、どの程度理解しましたか。

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	1	6	2		1	10
その他	1	5	9			15
合計	2	11	11		1	25

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	10.0%	60.0%	20.0%		10.0%	100%
その他	6.7%	33.3%	60.0%			100%

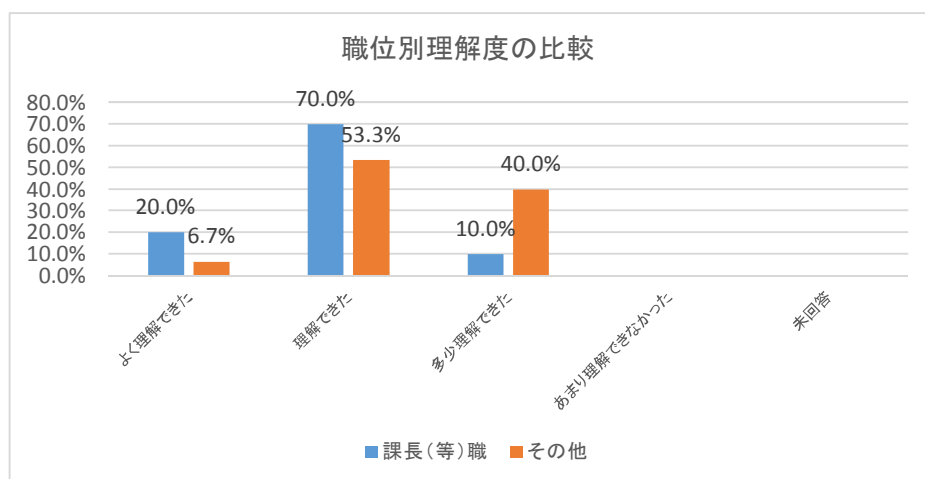


質問3 「高等教育をめぐる政策的経緯」について、各項目をどの程度理解しましたか。

(1)「評価制度の導入」について

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	2	7	1			10
その他	1	8	6			15
合計	3	15	7			25

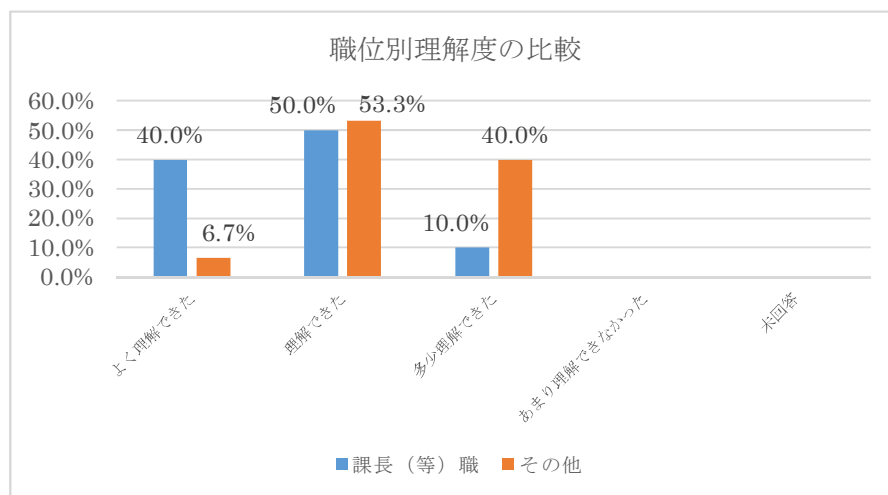
	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	20.0%	70.0%	10.0%			100%
その他	6.7%	53.3%	40.0%			100%



(2)「内部質保証システムの整備」について

	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職	4	5	1			10
その他	1	8	6			15
合計	5	13	7			25

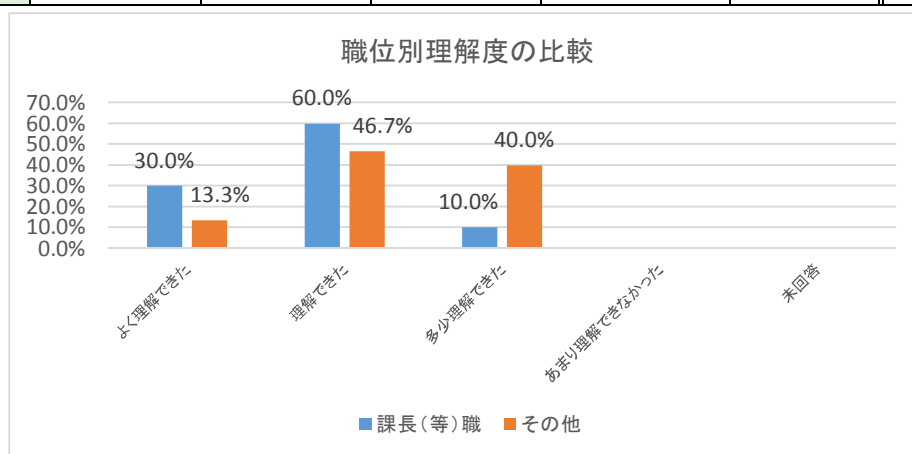
	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職	40.0%	50.0%	10.0%			100%
その他	6.7%	53.3%	40.0%			100%



(3)「教育情報の公表（質保証と情報の公開）」について

	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職	3	6	1			10
その他	2	7	6			15
合計	5	13	7			25

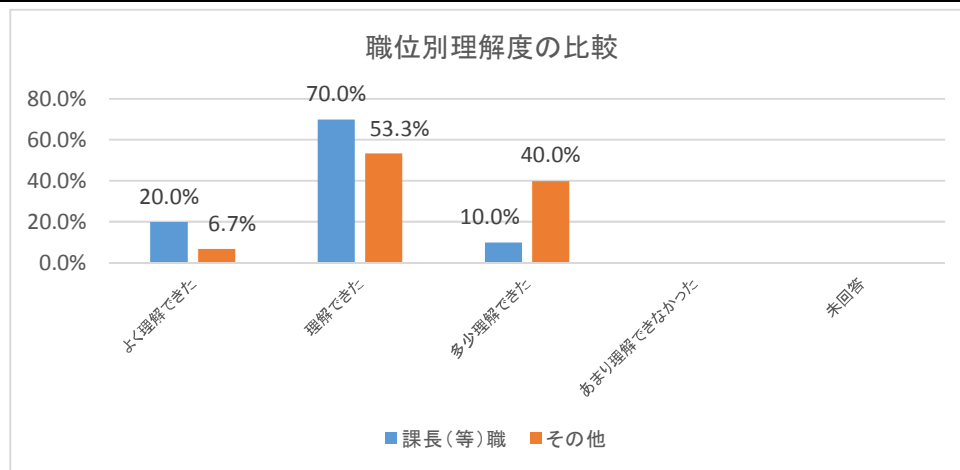
	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職	30.0%	60.0%	10.0%			100%
その他	13.3%	46.7%	40.0%			100%



(4)「私立大学等経常経費補助金における情報の公表にかかる調査」について

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	2	7	1			10
その他	1	8	6			15
合計	3	15	7			25

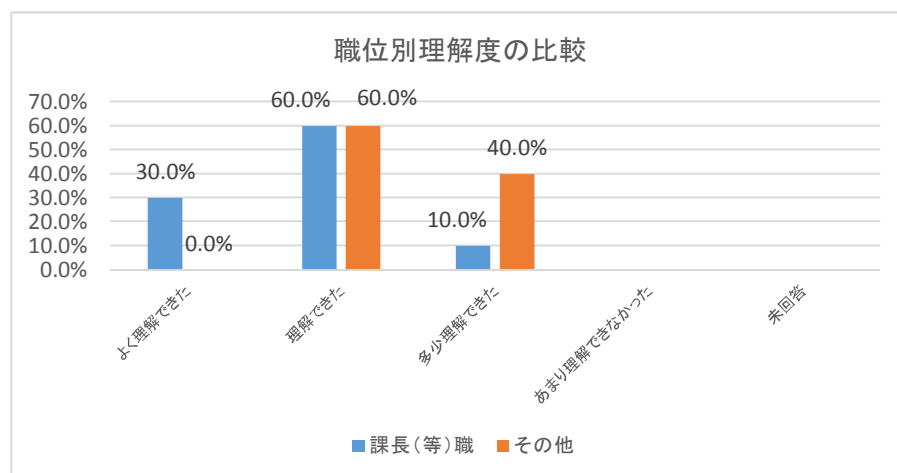
	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	20.0%	70.0%	10.0%			100%
その他	6.7%	53.3%	40.0%			100%



質問4 「教育振興基本計画」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解 できた	理解できた	多少理解で きた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	3	6	1			10
その他		9	6			15
合計	3	15	7			25

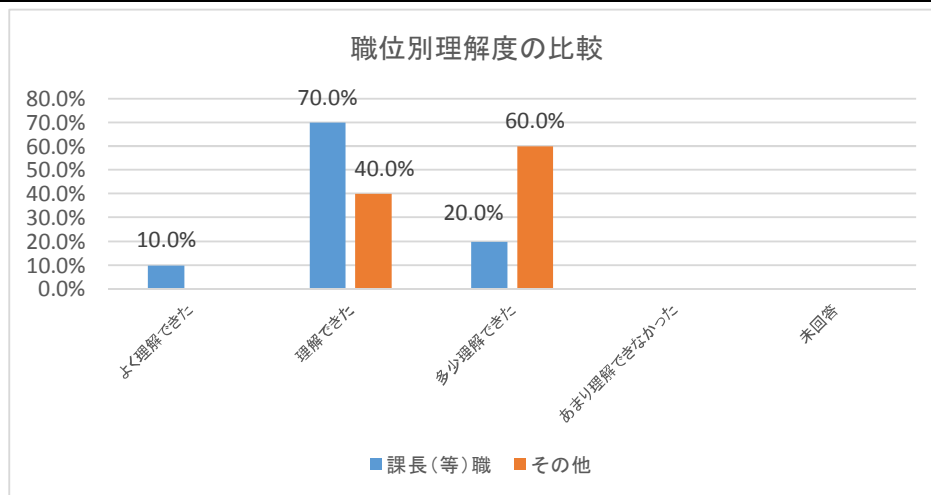
	よく理解で きた	理解できた	多少理解で きた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	30.0%	60.0%	10.0%			100%
その他	0.0%	60.0%	40.0%			100%



質問5 「教育に関わる議論」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	1	7	2			10
その他		6	9			15
合計	1	13	11			25

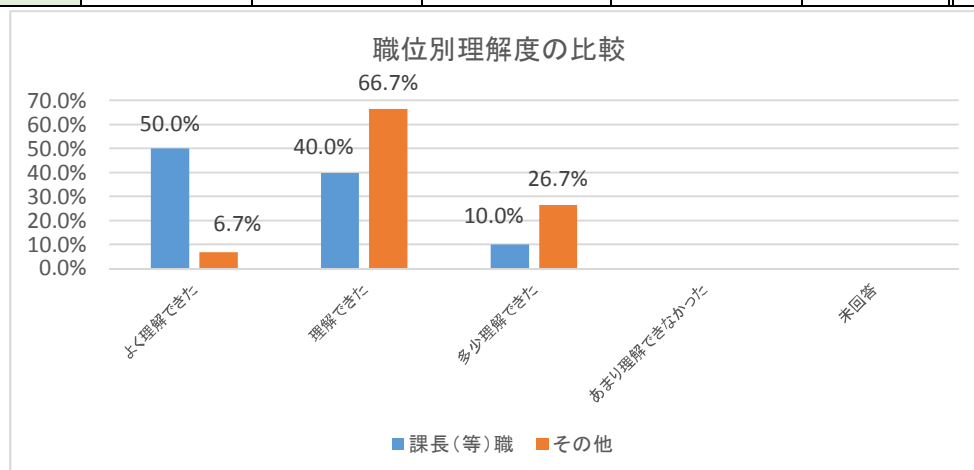
	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	10.0%	70.0%	20.0%			100%
その他		40.0%	60.0%			100%



質問6 「大学を取り巻く変化」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	5	4	1			10
その他	1	10	4			15
合計	6	14	5			25

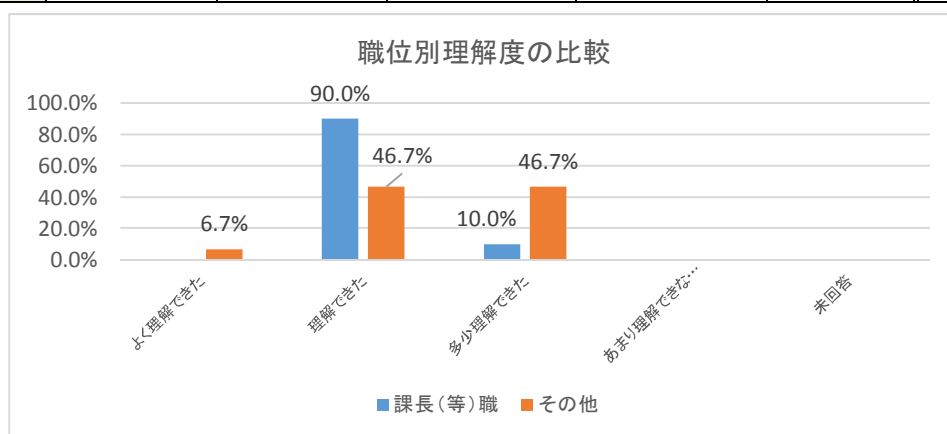
	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	50.0%	40.0%	10.0%			100%
その他	6.7%	66.7%	26.7%			100%



質問7 「仙台白百合女子大学の究極の到達点」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職		9	1			10
その他	1	7	7			15
合計	1	16	8			25

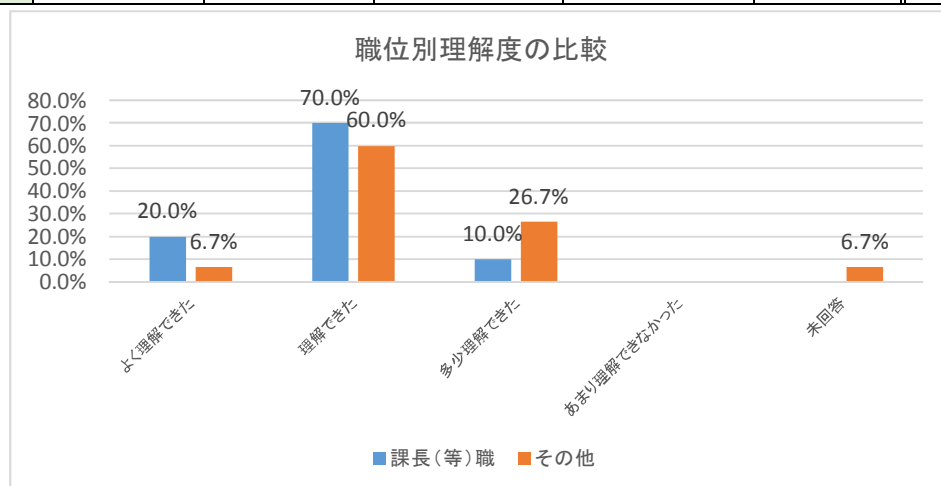
	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職		90.0%	10.0%			100%
その他	6.7%	46.7%	46.7%			100%



質問8 「大学（職員）に求められているもの」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職	2	7	1			10
その他	1	9	4		1	15
合計	3	16	5		1	25

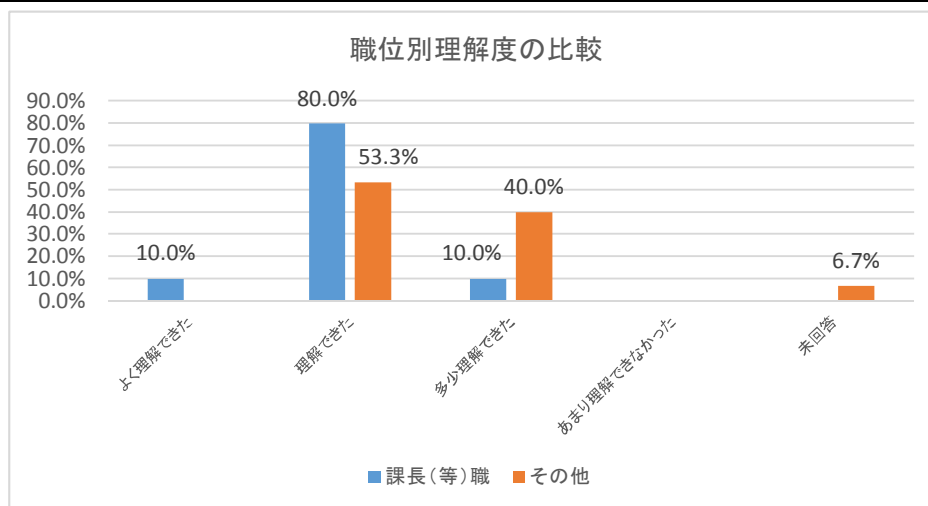
	よく理解できた	理解できた	多少理解できた	あまり理解できなかった	未回答	合計
課長(等)職	20.0%	70.0%	10.0%			100%
その他	6.7%	60.0%	26.7%		6.7%	100%



質問9 「業務達成のための情報の収集と分析」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	1	8	1			10
その他		8	6		1	15
合計	1	16	7		1	25

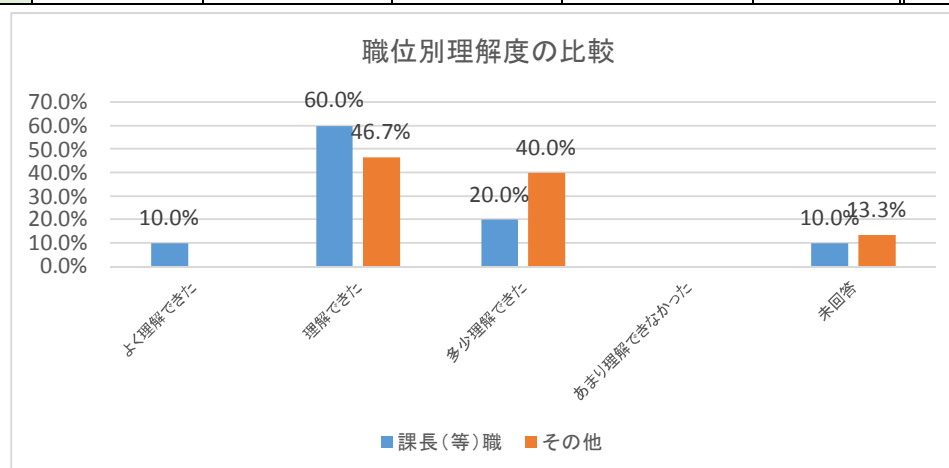
	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	10.0%	80.0%	10.0%			100%
その他		53.3%	40.0%		6.7%	100%



質問10 「IR 機能」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解で きた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解で きなかった	未回答	合計
課長(等)職	1	6	2		1	10
その他		7	6		2	15
合計	1	13	8		3	25

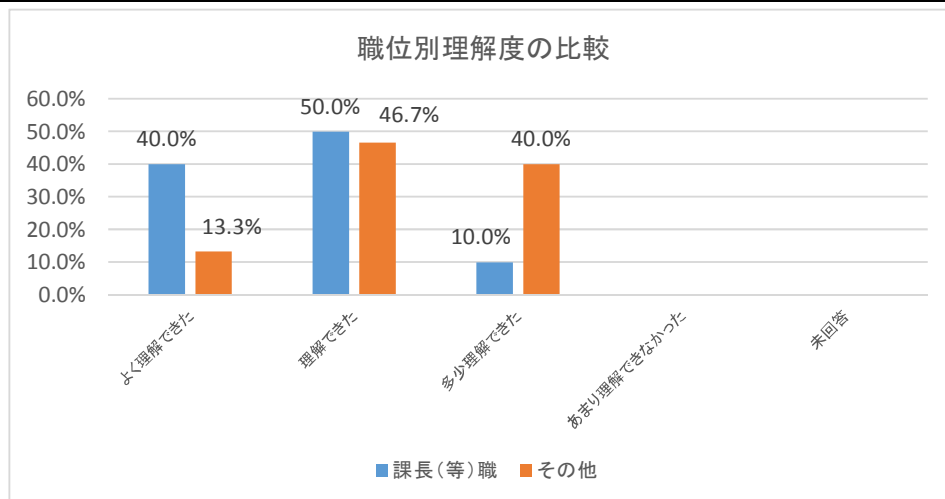
	よく理解で きた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解で きなかった	未回答	合計
課長(等)職	10.0%	60.0%	20.0%		10.0%	100%
その他		46.7%	40.0%		13.3%	100%



質問１１ 「付録」について、どの程度理解しましたか。

	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	4	5	1			10
その他	2	7	6			15
合計	6	12	7			25

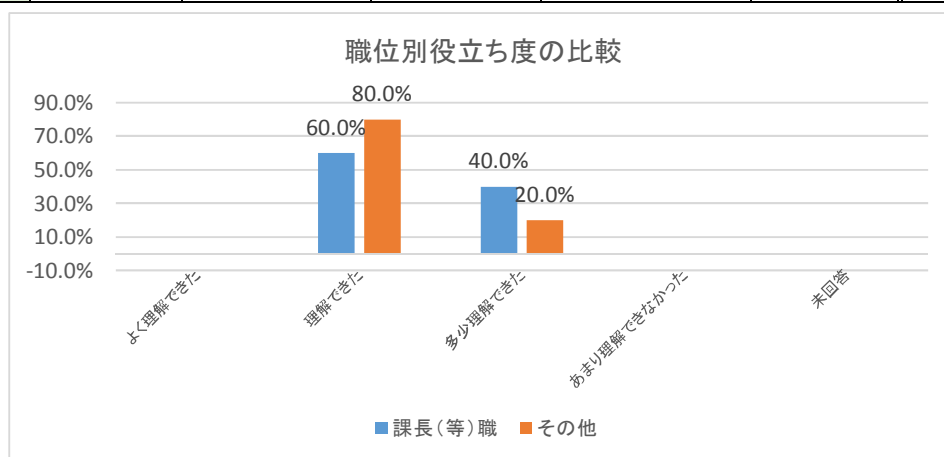
	よく理解 できた	理解できた	多少理解 できた	あまり理解 できなかった	未回答	合計
課長(等)職	40.0%	50.0%	10.0%			100%
その他	13.3%	46.7%	40.0%			100%



質問１２ 本資料は、職務に役立ちましたか。

	よく役立 った	役立った	多少役立 った	あまり役立 たなかった	未回答	合計
課長(等)職		6	4			10
その他		12	3			15
合計		18	7			25

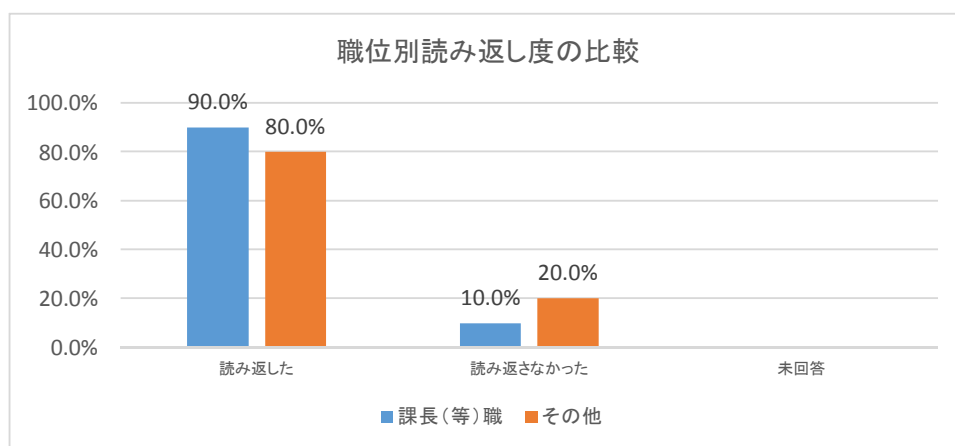
	よく役立 った	役立った	多少役立 った	あまり役立 たなかった	未回答	合計
課長(等)職		60.0%	40.0%			100%
その他		80.0%	20.0%			100%



質問 1 3 本資料を読み返しましたか。

	読み返した	読み返さなかった	未回答	合計
課長(等)職	9	1		10
その他	12	3		15
合計	21	4		25

	読み返した	読み返さなかった	未回答	合計
課長(等)職	90.0%	10.0%		100%
その他	80.0%	20.0%		100%



4. 結びにかえて

本調査は、「はじめに」で述べているように、今後の IR 推進委員会の活動に資するため、配付資料「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」についての理解度に関して確認するために調査したものである。

調査結果は、以下のとおりである。

設問 1. 回答したのは「課長(等)職」が 10 名(40%)、「その他」が 15 名(60%)、計 25 名。

設問 2. 「はじめに：概念図」については、全体で「よく理解できた」が 2 名(8%)、「理解できた」が 11 名(44%)、計 13 名(52%)であった。

設問 3. (1)「評価制度の導入」については、全体で「よく理解できた」が 3 名(12%)、「理解できた」が 15 名(60%)、計 18 名(72%)であった。

設問 3. (2)「内部質保証システムの整備」については、全体で「よく理解できた」が 5 名(20%)、「理解できた」が 13 名(52%)、計 18 名(72%)であった。

設問 3. (3)「教育情報の公表(質保証と情報の公開)」については、全体で「よく理解できた」が 5 名(20%)、「理解できた」が 13 名(52%)、計 18 名(72%)であった。

設問 3. (4)「私立大学等経常費補助金における情報の公表にかかる調査」については、全体で「よく理解できた」が 3 名(12%)、「理解できた」が 15 名(60%)、計 18 名(72%)であった。

設問 4. 「教育振興基本計画」については、全体で「よく理解できた」が 3 名(12%)、「理解できた」が 15 名(60%)、計 18 名(72%)であった。

設問 5. 「教育に関わる議論」については、全体で「よく理解できた」が 1 名(4%)、「理解できた」が 13 名(52%)、計 14 名(56%)であった。

設問 6. 「大学を取り巻く変化」については、全体で「よく理解できた」が 6 名(24%)、「理解できた」が 14 名(56%)、計 20 名(80%)であった。

- 設問 7. 「仙台白百合女子大学の究極の到達点」については、全体で「よく理解できた」が 1 名 (4%)、「理解できた」が 16 名 (64%)、計 17 名 (68%) であった。
- 設問 8. 「大学 (職員) に求められているもの」については、全体で「よく理解できた」が 3 名 (12%)、「理解できた」が 16 名 (64%)、計 19 名 (76%) であった。
- 設問 9. 「業務達成のための情報の収集と分析」については、全体で「よく理解できた」が 1 名 (4%)、「理解できた」が 16 名 (64%)、計 17 名 (68%) であった。
- 設問 10. 「IR 機能」については、全体で「よく理解できた」が 1 名 (4%)、「理解できた」が 13 名 (52%)、計 14 名 (56%) であった。
- 設問 11. 「付録：協働の阻害要因」については、全体で「よく理解できた」が 6 名 (24%)、「理解できた」が 12 名 (48%)、計 18 名 (72%) であった。
- 設問 12. 「本資料は職務に役立ったか」については、全体で「役立った」が 18 名 (72%) であった。
- 設問 13. 「本資料を読み返したか」については、全体で「読み返した」が 21 名 (84%) であった。

上記の結果から、設問 6 については 8 割以上、設問 3(1)(2)(3)(4)、設問 4、設問 8、設問 11 については 7 割以上、設問 7、設問 9 は 6 割以上、設問 2、設問 5、設問 10 についても 5 割以上が「理解できた」と回答している。さらに、設問 12 では 7 割以上が「資料は職務に役立った」と回答、設問 13 では 8 割以上が「資料を読み返した」と回答している。以上の結果から、大方の職員は「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」について「理解できた」と確認することができた。

2014 年には大学運営における学長のリーダーシップの確立等のガバナンス改革を促進するため学校教育法が改正され、翌年 4 月から施行された。さらに 2017 年 4 月より、社会のあらゆる分野で急速な変化が進行する中で、大学がその使命を十分に果たすためには、その運営についても一層の高度化を図ることが必要であることを踏まえ、全ての大学等に、その職員が大学等の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させる、すなわち職員の能力開発のための研修の機会を設けることが義務化された。

職員勉強会、研修会においては目的を明確にし、理解してもらい、勉強会、研修会で得られたことを職務に反映し、さらにはその成果を組織内で相互に確認していくことが必要となる。設問 6、配付資料Ⅳ「大学を取り巻く変化」にあるように、18 歳人口の減少、人口の東京一極集中、急速な技術革新、グローバル化の進展に加えて、設問 3、配付資料Ⅰ「高等教育をめぐる政策的経緯」「高等教育をとりまく政策的経緯」、設問 4、配付資料Ⅱ「教育振興基本計画」、設問 5、配付資料Ⅲ「教育に関わる議論」等々、本学を取り巻く環境も一層厳しさを増している。「大学を取り巻く状況」が「理解できた」ので、今後は過去の経緯や働き方にとらわれず、教員との連携をはかりつつ自ら主体的、積極的に仕事へ取り組む姿勢が望まれる。設問 8、配付資料Ⅵ「大学 (職員) に求められているもの」についても、約 8 割の職員から「理解できた」との回答を得たことは、来年度からの諸施策試行の素地が確認できたと捉えることができよう。「大学 (職員) に求められているもの」を職員一人一人が念頭に職務を遂行、それを評価し、その結果を踏まえ、個々人がさらなるレベルアップをすることにより、大学運営の一層の改善、充実を図ることができる。加えて、評価結果を分析することにより、本学により適した「人事評価制度」を確立すること、さらには「人材育成プラン」に評価結果を反映し、より高度な職業人としての力量アップに繋げていくこと等がさらに求められるであろう。

最後に、設問 9、配付資料Ⅶ「業務達成のための情報の収集と分析」及び設問 10、配付資料Ⅷ「IR 機能」についても「理解できた」と改めて確認することができた。さらなる IR 活動推進のための体制を整備し、上述の評価結果の分析もさることながら、「業務達成のための情報の収集と分析」に務め、設問 7、配付資料Ⅴの「本学の究極の到達点」を目指し、課題解決に向けて努力していくことが肝要である。

2018 年 11 月 12 日

仙台白百合女子大学

事務職員 各位

IR 推進委員会

事務部門担当 WG

「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」資料に関する アンケート調査の依頼

本学においては、教育、研究、財務等に関する大学の活動についてのデータを収集・分析し、大学の意思決定を支援するためにIR推進委員会を設置し、委員会は、教学、入試広報、図書・地域貢献及び事務部門の4つのWGに分かれて活動しています。

事務部門WGにおいては、昨年度「大学事務職員の業務に関するアンケート」を実施し、事務職員の意識や日頃感じている課題や要望等についてとりまとめ、これからの大学運営の改善の参考としています。

昨年のアンケートにおいては、自己啓発等SDの重要性、職員と教員との教職協働の重要性、適正な人事評価と処遇及びPDCAを活用した業務改善等についての意見が多く寄せられました。

大学として、上述の意見を参考に、「職員の人事評価制度」と「処遇」、評価と表裏一体となる「人材育成プラン」及び「心の健康問題により休業した職員の職場復帰支援制度」等を今年度中に策定し、来年度から試行する予定で現在作業を進めているとともに、より良い事務組織のあり方についての検討も鋭意進めています。

今年度においては、人材育成と資質の向上を目指し、昨今の大学を取り巻く状況を理解したうえで、小規模大学でのIR活動をどのように推進していくことが必要であるかを問題提起として、10月開催の課長等会で資料を配付・説明を行い、その後、部門毎に全職員へ配布・勉強会を実施しました。

については、今後のIR推進委員会の活動に資するため、配付した資料「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」についての理解度等に関するアンケートを行いますので、別紙アンケート用紙への記入についてご協力願います。

なお、調査内容については、無記名であるとともに、目的以外に使用することは一切ありません。

記入いただきましたアンケートは、11月30日（金）まで、庶務課に設置してありますアンケート回収箱に提出をお願いします。

「大学を取り巻く状況と業務達成のための情報の収集と分析」資料に関する アンケート調査

各設問の当てはまるところにレ点をつけてください。

1. あなたの職位について。

☐課長（等）職 ☐その他

2. 「はじめに」（概念図）について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

3. 「高等教育をめぐる政策的経緯」について、各項目をどの程度理解しましたか。

(1) 「評価制度の導入」について

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

(2) 「内部質保証システムの整備」について

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

(3) 「教育情報の公表（質保証と情報の公開）」について

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

(4) 「私立大学等経常経費補助金における情報の公表にかかる調査」について

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

4. 「教育振興基本計画」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

5. 「教育に関わる議論」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

6. 「大学を取り巻く変化」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

7. 「仙台白百合女子大学の究極の到達点」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

8. 「大学（職員）に求められているもの」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

9. 「業務達成のための情報の収集と分析」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

10. 「IR 機能」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

11. 「付録」について、どの程度理解しましたか。

☐よく理解できた ☐理解できた ☐多少理解できた ☐あまり理解できなかった

12. 本資料は、職務に役立ちましたか。

☐よく役立った ☐役立った ☐多少役立った ☐あまり役立たなかった

13. 本資料を読み返しましたか。

☐読み返した ☐読み返さなかった

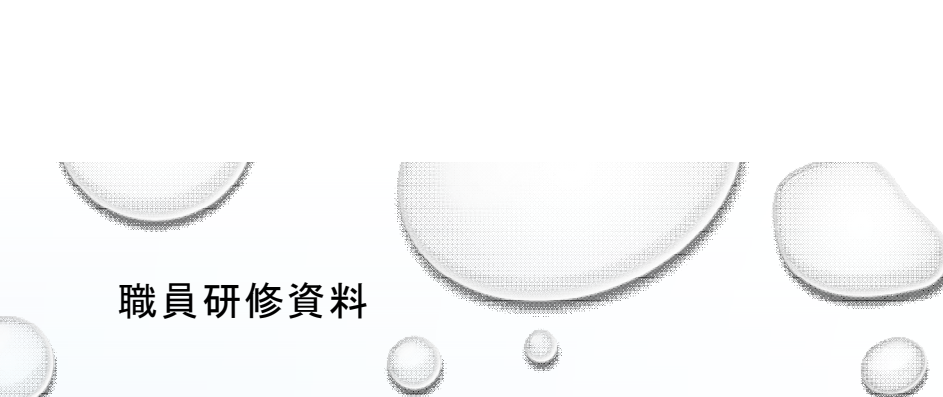
14. 最後に、本資料についてのご意見・ご要望をご自由に述べてください。(自由記述)

--

ご協力まことにありがとうございました。

11月30日（金）まで、庶務課設置のアンケート回収箱に提出をお願い致します。

IR 推進委員会 事務部門担当 WG

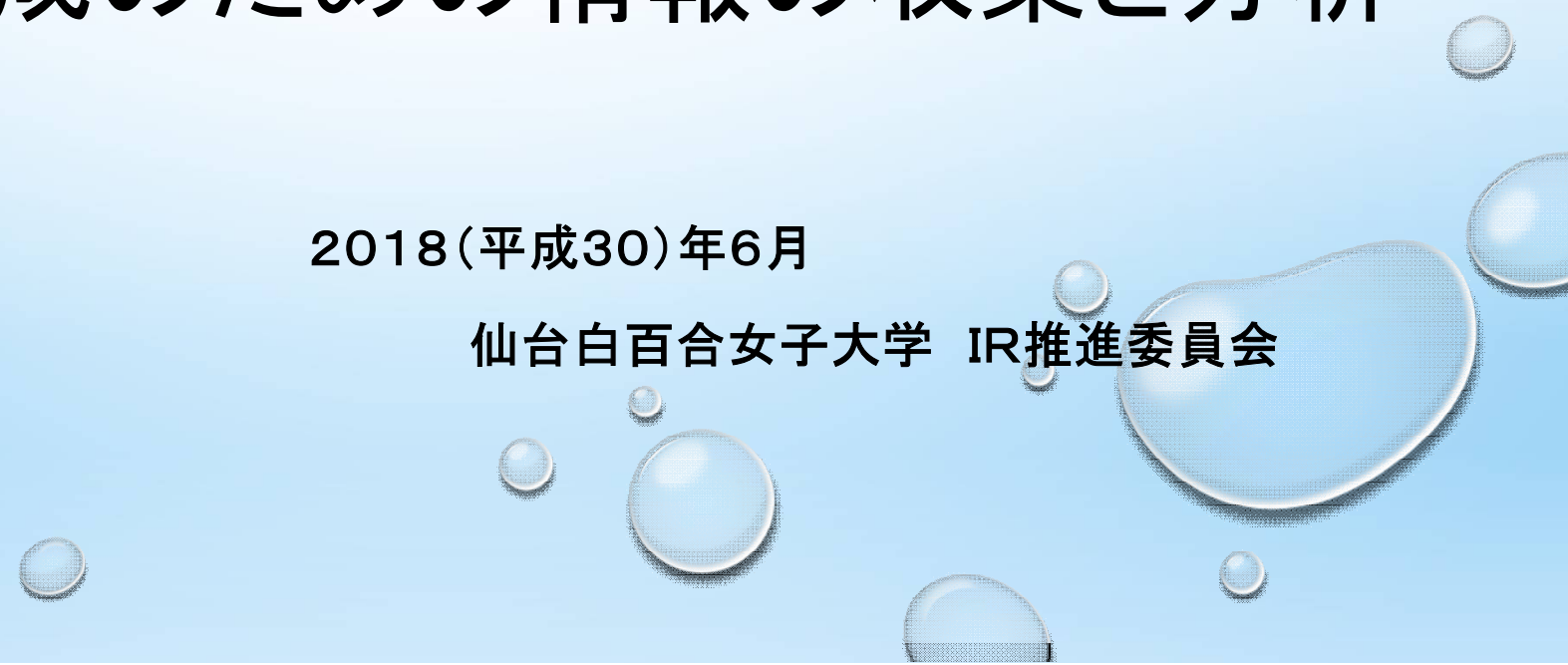


職員研修資料

大学を取り巻く状況と 業務達成のための情報の収集と分析

2018(平成30)年6月

仙台白百合女子大学 IR推進委員会



スライド目次

はじめに

I 高等教育をめぐる政策的経緯

1. 評価制度の導入
2. 内部質保証システムの整備
3. 教育情報の公表(質保証と情報の公開)
4. 私立大学等経常費補助金における情報の公表にかかる調査(平成29年度)

II 教育振興基本計画

1. 第Ⅱ期教育振興基本計画(答申)(平成25年 中央教育審議会)
2. 第Ⅲ期教育振興基本計画(答申)(平成30年 中央教育審議会)

III 教育に関わる議論

IV 大学を取り巻く変化

V 仙台白百合女子大学の究極の到達点

VI 大学(職員)に求められているもの

VII 業務達成のための情報の収集と分析

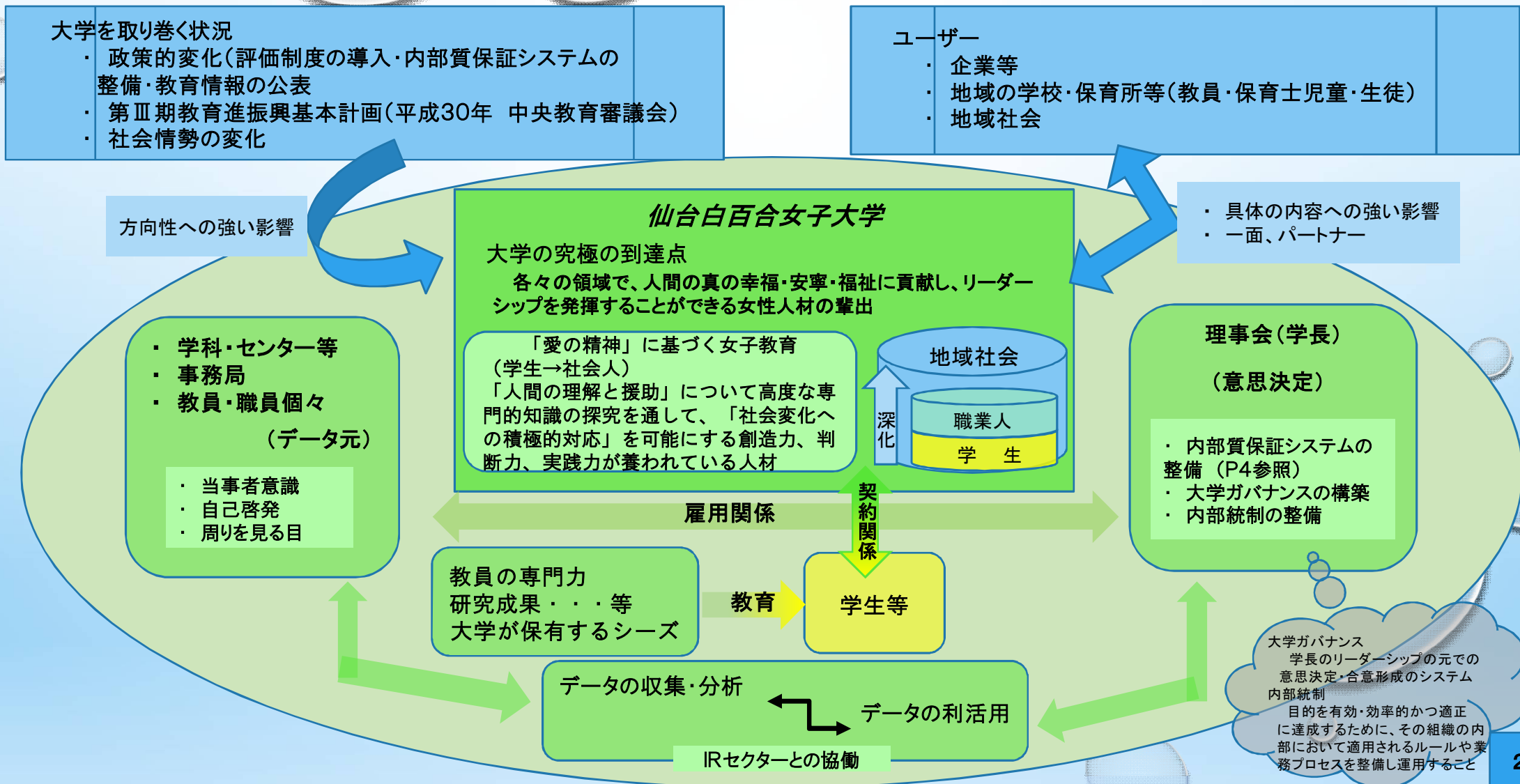
VIII I R機能

付録

智の循環で
良い結果を！



はじめに



I 高等教育をめぐる政策的経緯 ①

1. 評価制度の導入 (自己点検・評価から外部評価へ)

- ・ 平成3年 大学設置基準の改正 → 教育理念・目的に基づき、学術の進展と社会の要請に適切に対応しつつ、特色ある教育研究を展開
いわゆる制度の弾力化、大学における学習機会の多様化、自己点検・評価の努力義務 (大綱化)
いわゆる大括り
- ・ 平成11年 大学設置基準の改正 → 大学における自己点検・評価の実施の義務化
教育研究水準の向上を図り、その目的及び社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について
自ら点検及び評価を行い、その結果を公表すること。
 - 大学における外部評価の努力義務
点検及び評価の結果について、当該大学の教職員以外の者による検証を受けるように努めること。
 - 大学における情報の積極的提供の努力義務
教育研究活動等の状況について、刊行物への掲載その他広く周知を図ることができる方法によって、積極的に
情報を提供すること。
- ・ 平成14年 学校教育法改正 → 認証評価制度の導入 (平成16年度から施行)
- ・ 平成16年 認証評価制度の施行 → 国公私の全ての大学、短期大学、高等専門学校（以下「大学等」という。）は、定期的に文部科学
大臣の認証を受けた評価機関（認証評価機関）による評価（認証 評価）を受けることとする制度を導入

・導入の背景: ①行政システム全体について、事前規制型から事後 チェック型へという規制改革の流れ
②日本の高等教育の国際競争力強化及び国際的 通用性確保の必要性
③教育制度改革及び司法制度改革として、法科大学院等の専門職大学院制度創設の社会的要請という異なる要素によっ
て導入

・大学の教育研究活動等の状況について、国の認証を受けた評価者(認証評価機関)が、自ら定める評価の基準に基づき大学を定期的に
評価し、その基準を満たすものであるかどうかについて社会に向けて明らかにすることにより、社会による評価を受けるとともに、評価結果
を踏まえて大学が自ら改善を図ることを促す制度である。

I 高等教育をめぐる政策的経緯 ②

2. 内部質保証システムの整備 (自己点検・評価から外部評価、そして、質保証へ……)

- ・ 平成14年 中央教育審議会答申 → 大学の自主性・自律性を踏まえつつ、大学の教育研究の質の維持・向上

国の事前規制である設置認可を弾力化し、大学が自らの判断で社会の変化等に対応して多様で特色のある教育研究活動を展開できるようにする。それとともに、大学設置後の状況について当該大学以外の第三者が客観的な立場から継続的に評価を行う体制を整備する。これらのことにより、大学の自主性・自律性を踏まえつつ、大学の教育研究の質の維持向上を図り、その一層の活性化が可能となるような新たなシステムを構築する。

- ・ 平成17年 中央教育審議会答申 → 高等教育の質の明確化

「高等教育の質」とは、教育課程の内容・水準、学生の質、教員の質、研究者の質、教育・研究環境の整備状況、管理運営方式等の総体を指すものと考えられる。したがって、高等教育の質の保証は、行政機関による設置審査や認証評価機関による評価（「認証評価」とは、すべての国公立の大学等が、文部科学大臣の認証を受けた第三者評価機関による評価を受ける制度をいう。以下同じ。）のみならず、カリキュラムの策定、入学者選抜、教員や研究者の養成・処遇、各種の公的支援、教育・研究活動や組織・財務運営の状況に関する情報開示等のすべての活動を通して実現されるべきものである。

- ・ 平成25年 大学評価・学位授与機構 → 教育の内部質保証システム構築に関するガイドライン(案)

平成24年度から第二サイクルを開始するに伴い、「大学評価基準」を改訂し、「基準8 教育の内部質保証システム」として、大学での内部質保証システムの整備を求め、要求事項を踏まえての内部質保証の考え方をガイドラインとしてとりまとめたもの。

内部質保証の定義

PDCA サイクル等の方法を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習その他サービスが一定水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的プロセス。本協会が「内部質保証」を重視する評価を推進する

※2011（平成23）年から…評価システムを改革

↓ 内部質保証で求められる2つの側面（大学基準協会「内部質保証システムについて」2013より）

- ① 質の向上 大学教育の実質化のための改善メカニズムの構築
- ② 説明責任 大学教育が一定水準にあることのステークホルダーへの説明・証明
（大学基準協会『大学評価ハンドブック』より）

I 高等教育をとりまく政策的経緯 ③

3. 教育情報の公表（質保証と情報の公開）

中央教育審議会での審議や答申等において、平成10年以降、大学の教育研究に関する情報の公表が繰り返し提言され、平成11年には、教育研究活動等の状況に関する情報の積極的な公表に関する規定が大学設置基準等に盛り込まれた。その後も、通知の発出等を通じ、取組の充実を促進し、平成22年に行われた学校教育法施行規則の改正により、平成23年4月1日から、各大学等において教育情報の公表を行う必要がある項目が明確化された。

- 平成10年「21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)」 → 平成11年大学設置基準等改正 ↓

大学における情報の積極的提供の努力義務

教育研究活動等の状況について、刊行物への掲載その他広く周知を図ることができる方法によって、積極的に情報を提供すること。

- その後の検討

- ・ 平成17年:「我が国の高等教育の将来像(答申)」
- ・ 平成17年:文部科学省高等教育局長通知 → 「大学による情報の積極的な提供について(17年3月14日付)」
- ・ 平成20年:「学士課程教育の構築に向けて(答申)」
- ・ 平成21年:大学の設置等の認可の申請及び届出に係る手続き等に関する規則等の一部改正

- 平成22年 学校教育法施行規則改正

第一百七十二条の二 大学は、次に掲げる教育研究活動等の状況についての情報を公表するものとする。

- 一 大学の教育研究上の目的に関する事
 - 二 教育研究上の基本組織に関する事
 - 三 教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関する事
 - 四 入学者に関する受入方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関する事
 - 五 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関する事
 - 六 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たつての基準に関する事
 - 七 校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関する事
 - 八 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関する事
 - 九 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関する事
- 2 大学は、前項各号に掲げる事項のほか、教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報を積極的に公表するよう努めるものとする。
- 3 第一項の規定による情報の公表は、適切な体制を整えた上で、刊行物への掲載、インターネットの利用その他広く周知を図ることができる方法によって行うものとする。

大学における教育情報の公表の観点
公的な教育機関として、社会に対する説明責任を果たすとともに、その教育の質を向上させる。
(改正通知から抜粋)

同時に、認証評価において、左記情報の公表の取組状況を確認されるよう省令を改正
(学校教育法第110条第2項に規定する基準を適用するに際して必要な細目を定める省令)

I 高等教育をとりまく政策的経緯 ④

4. 私立大学等経常費補助金における情報の公表にかかる調査（平成29年度）

年々、取り扱いが厳格化
未公表については減額

教育情報、財務情報の公表状況に応じた増減率を算出

I 教育研究上の基礎的な情報

1. 学部、学科、課程、研究科、専攻ごとの名称及び教育研究上の目的
2. 専任教員数
3. 校地・校舎等の施設その他の学生の教育研究環境
4. 授業料、入学料その他の大学等が徴収する費用

III 財務情報

1. 収支計算書【資金収支計算書、活動区分資金収支計算書及び事業活動計算書】
2. 年度末の貸借対当表
3. 年度末の財産目録
4. 年度の事業報告書
5. 年度決算に対する監事の監査報告書

II 修学上の情報

1. 教員組織、各教員が有する学位及び業績
2. 入学者に関する受入方針、入学者数、収容定員、在学者数、卒業（修了）者数、進学者数、就職者数
3. 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業計画
4. 学習の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準
5. 学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援
6. 教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報

IV I～III以外の情報の公表、分かりやすく加工

1. 教育研究上の情報

（例） 教員一人当たり学生数、収容定員充足率
年齢別教員数、専任教員と非常勤教員の比率
学位授与数又は授与率、退学・除籍者数
中退率、留年者数、海外の協定相手校
社会貢献活動、産官学連携

2. 財務状況

（例） 財務状況を全般的に説明する資料
経年推移の状況が分かる資料
グラフや図表を活用した資料

Ⅱ 教育振興基本計画 ①

① 第二期教育振興基本計画(答申) (平成25年 中央教育審議会)

教育行政の4つの基本的方向性

1. 社会を生き抜く力の養成

～多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力～
→ 「教育成果の保証」に向けた条件整備

2. 未来への飛躍を実現する人材の養成

～変化や新たな価値を主導・創造し、社会の各分野を牽引していく人材～
→ 創造性やチャレンジ精神、リーダーシップ、日本人としてのアイデンティティ、語学力・コミュニケーション能力などの育成に向けた多様な体験・切磋琢磨の機会の増大、優れた能力と多様な個性を伸ばす環境の醸成

3. 学びのセーフティネットの構築

～誰もがアクセスできる多様な学習機会を～
→ 教育費負担軽減など学習機会の確保や安全安心な教育研究環境の確保

4. 絆づくりと活力あるコミュニティの形成

～社会が人を育み、人が社会をつくる好循環～
→ 学習を通じて多様な人が集い協働するための体制・ネットワークの形成など社会全体の教育力の強化や、人々が主体的に社会参画し相互に支え合うための環境整備

現在の中教審等での議論

- ・ 修士課程の大括り化
- ・ 教員免許制度の改善

……等

現在の免許法施行規則の改正(案)

- ・ 教職課程における情報の公表
- ・ 教職課程のグローバル化対応
- ・ 免許状更新講習の改善
- ・ 幼保連携型認定こども園制度への対応等

今後の社会の方向性

成熟社会に適合し知識を基盤とした
自立, 協働, 創造モデルとしての生涯学習社会を実現

創造

自立・協働を通じて
更なる新たな価値を創
造していくことのできる
生涯学習社会

自立

一人一人が多様な
個性・能力を伸ばし、
充実した人生を主体的
に切り開いていくことのできる生涯学習社会

協働

個人や社会の多様性
を尊重し、それぞれの
強みを生かして、ともに
支え合い、高め合い、
社会に参画することのできる生涯学習社会

各論から

- ・ 課題探求能力の修得(大学～) ⇒ どんな環境でも「答えのない問題」に最善解を導くことができる力を養う。
 - ・ 自立・協働・創造に向けた力の修得(生涯全体) ⇒ 社会を生き抜くための力を生涯を通じて身に付けられるようにする。
 - ・ 社会的・職業的自立に向けた力の育成
 - ・ 意欲ある全ての者への学習機会の確保
 - ・ 互助・共助による活力あるコミュニティの形成 ⇒ **地域社会の中核となる高等教育機関(COC)の構想**
- ・ 新たな価値を創造する人材、グローバル人材等の養成
 - ・ 安全・安心な教育研究環境の確保

Ⅱ 教育振興基本計画 ②

② 第三期教育振興基本計画(答申) (平成30年 中央教育審議会)

今後5年間の教育政策の目標と施策群

1. 夢と志を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する

＜主として初等中等教育段階＞

目標(1) 確かな学力の育成 目標(2) 豊かな心の育成 目標(3) 健やかな体の育成

＜主として高等教育段階＞

目標(4) **問題発見・解決能力の修得**

＜生涯の各段階＞

目標(5) 社会的・職業的自立に向けた能力・態度の育成

目標(6) 家庭・地域教育力の向上、学校との連携・協働の推進

2. 社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成する

目標(7) **グローバルに活躍する人材の育成**

目標(8) 大学院教育の改革等を通じたイノベーションを牽引する人材の育成

目標(9) スポーツ・文化等多様な分野の人材の育成

3. 生涯学び、活躍できる環境を整える

目標(10) 人生100年時代を見据えた生涯学習の推進

目標(11) 人々の暮らしの向上と社会の持続的発展のための学びの推進

目標(12) **職業に必要な知識やスキルを生涯を通じて身に付けるための社会人の学び直しの推進**

目標(13) 障害者の生涯学習の推進

4. 誰もが社会の担い手となるための学びのセーフティネットを構築する

目標(14) 家庭の経済状況や地理的条件への対応 目標(15) 多様なニーズに対応した教育機会の提供

5. 教育政策推進のための基盤を整備する

目標(16) 新しい時代教育に向けた持続可能な学校指導体制の整備等

目標(17) ICT利活用のための基盤の整備

目標(18) 安全・安心で質の高い教育研究環境の整備 目標(19) 児童生徒等の安全の確保

目標(20) 教育研究の基盤強化に向けた高等教育のシステム改革

目標(21) 日本型教育の海外展開と我が国の教育の国際化

施策のキーワード

- ・ 持続可能な開発のための教育(ESD)の推進
- ・ 災害からの復興等持続可能な地域づくりのための教育の推進
- ・ 高大接続改革の着実な推進
- ・ 「学位プログラムを中心とした大学制度」への転換
- ・ 教員・学生の流動性の向上
- ・ **国・公・私の連携・統合**
- ・ 産業界とも連携したキャリア教育・職業教育の推進
- ・ 実践的な職業教育の推進
- ・ **社会人の学び直しの推進**
- ・ **グローバルに活躍する人材の育成**
- ・ **国際化に向けた先進的な取組を行う**
- ・ 企画立案を行うことができる行政職員の育成

発見・解決

幅広い知識と教養、主体的に変化に対応しつつ学んだ知識・技能を実践・応用する力、さらには自ら問題の発見・解決に取り組む力を育成

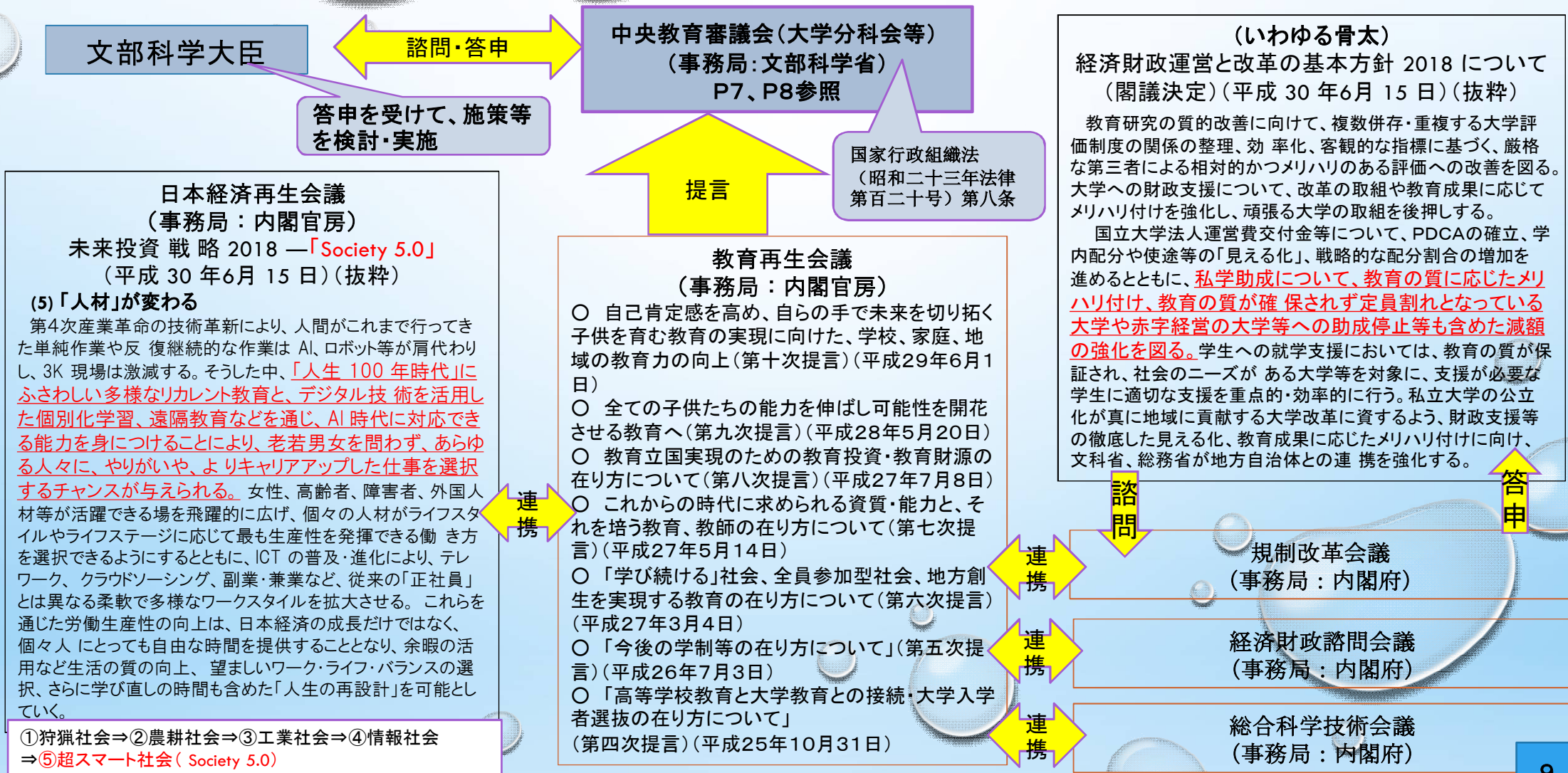
グローバル

伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度や、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けて様々な分野でグローバルに活躍できる人材を育成

生涯学のび

全ての人が、生涯を通じて自らの人生を設計し活躍することができるよう、必要な知識・技能の習得、知的・人的ネットワークの構築や健康の保持・増進に資する生涯学習を推進し、「学び」と「活動」の循環を形成

Ⅲ 教育に関わる議論



Ⅳ 大学を取り巻く変化

社会的変化

① 18才人口の減少(競争の原理が働いてくる)

平成4年度 約205万人 → 平成11年度 約150万人 → 平成16年度 約140万人 → 現在 約120万人 →

→ 将来的予想 平成32年度に 約100万人を割る → 平成40年度 約88万人 の予想

……………売り手市場への変化 → 大学活動を外部に見える様に可視化する動きの加速

② 人口の東京一極集中

国内における人口移動における、若年人口の地方からの流出と東京圏への流入

③ 急速な技術革新

- ・ 2030 年頃には、第4次産業革命ともいわれる、IoTやビッグデータ、AI 等をはじめとする技術革新が一層進展し、社会や生活を大きく変えていく 超スマート社会(SOCIETY 5.0)の到来が予想されている。研究・開発・商品化から普及までのスピードも加速化しているとの指摘もあり、次々に生み出される新しい知識やアイデアが組織や国の競争力を大きく左右 していくことが想定されるなかで、我が国は第4次産業革命への対応において世界に遅れをとっているとの厳しい指摘もあり、取組の加速が大きな課題となっている。
- ・ 技術革新の進展により、今後 10 年～20 年後には日本の労働人口の相当 規模が技術的には AI やロボット等により代替できるようになる可能性が 指摘されている一方で、これまでになかった仕事が生まれることが考えられる。今後、いわゆるメンバーシップ型雇用からジョブ型雇用への移行や労働市場の流動化が一層進展することも予想されている。

④ グローバル化の進展と国際的な地位の低下

あらゆる場所でグローバル化は加速し、情報通信や交通分野での技術革新により、人間の生活圏も広がっている。また、世界の国々の相互影響と依存の度合いは急速に高まっており、貧困や紛争、感染症や環境問題、エネルギー資源問題など、地球規模の人類共通の課題が増大する中、我が国には、それらの課題の解決に積極的に取り組むことが求められている。

高等教育をめぐる状況変化

- ① 少子化が進む中においても、いわゆる 18歳時進学率の上昇により、大学 の学士課程の学生数は増加している。学士課程への進学率は5割を超え、専門学校等を含む高等教育機関全体への進学率は8割を超えるなど、進学率が上昇し、多様な学生が入学するようになっている。
- ② 大学生の学修時間が短いなどの課題も踏まえ、大学教育の質の保証のための各大学の取組を進める必要がある。こうした大学教育改革を高校教育改革、大学入学者選抜改革と一体的に行っていくことで、初等中等教育と高等教育の一貫した改革を実現することが重要となっている。
- ③ グローバル化による人材の流動性が高まり人材獲得競争が激しさを増す中、我が国の高等教育機関の国際的な評価の向上及び教育・研究環境の国際化、学生の双方向交流などの推進が求められている。

(平成30年 中央教育審議会第3期教育振興基本計画(答申)より)

V 仙台白百合女子大学の究極の到達点

1. 建学の精神・理念、教育目的

仙台白百合女子大学は、イエス・キリストの愛の精神に基づく教育、すなわち、一人ひとりの人間をかけがえのない存在として愛するイエス・キリストの御心にしがたい、それぞれに与えられた使命を成し遂げる力を培うことが、本学の建学の精神です。また、設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会の創設の精神「社会から忘れられがちな人々への奉仕を優先する」を「人間の理解と援助」「社会変化へ積極的対応」として学び実践することを教育理念とします。

また、建学の精神にあるように、学生一人ひとりが全面的・調和的に発達した人間性や幅広い教養と豊かな感性を持ち、専攻分野それぞれにおける「人間の理解と援助」について高度な専門的知識の探究を通して、「社会変化への積極的対応」を可能にする創造力、判断力、実践力を養うとともに、人間の真の幸福・安寧・福祉に貢献できる女性として育成することを本学の教育目標とします。

2. 究極の到達点

今後、上記理念を達成するための中長期の目標・計画を作成する予定ですが、その目標・計画を越えた成果を求めて日々、教育・研究・大学の管理・運営及び地域貢献等を行うことで、その結果が究極の到達点の達成となる。

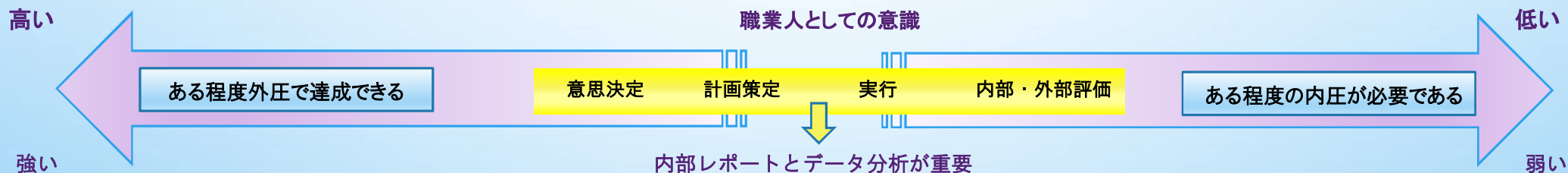
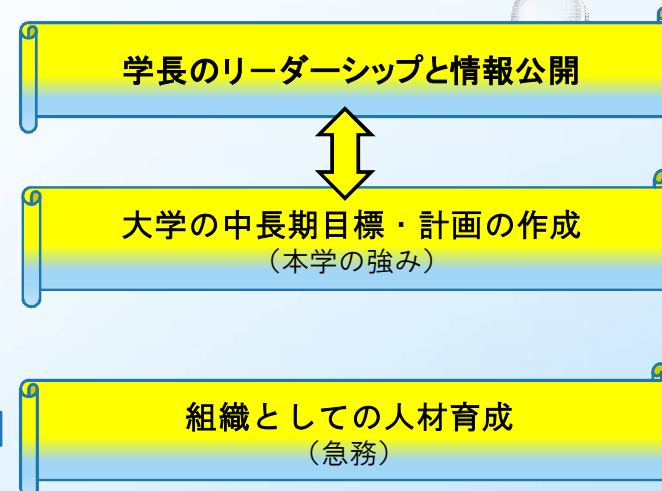
VI 大学(職員)に求められているもの

○ 大学に求められているもの

1. データとその分析に基づいた大学経営・改善・透明性を確保し、かつ、公平な大学運営
(自己点検・評価が重要、組織運営の活性化)
2. 大学の評価 → 助成金、補助金に直結
3. 特色や強みを生かした教育と研究……他大学と差別化、差別化が重要
4. 教育・研究・地域貢献等の実績(シーズ)を一般社会等ステークホルダーに広く発信……最初は理解してもらうこと
5. 大学活動に関する説明責任(情報の公表;学校教育法施行規則第172条の2第1項関係)
6. 迅速かつ将来を見据えた意思決定(学長のリーダーシップ)……ボトムアップの否定ではなく、迅速に決定できる提案内容が肝要
7. 地域(宮城県を中心に)に有用な・地域の特性に合った人材を送り出すこと ……………等

○ 職員に求められるもの

1. 従来型の人事評価上の観点(変化への対応力、チャレンジ性、チームワーク、仕事の配分 ……………等)
2. 「データの収集能力」と「目的に基づいた装飾(加工)能力」(経営者等が満足する資料)
3. できれば「分析」し、「一定の方向性を示す」能力 (業務担当者としての見解)



当事者としての職務遂行・・・自分の立ち位置を良く理解し、自分なりの展望を持てる。
 高い自己啓発力・・・自分の考えにきちんとした裏付けを有し、ぶれない。
 将来を意識した業務遂行・・・社会的要請や大学の方向性や課題を良く理解・把握している。
 問題意識を共有しており、業務チェックを行いながらの進捗。

* 最大の強みは、責任感の強さと大学、他部署を見つめる目を持っている。

自分の仕事と仙台白百合女子大に対する愛着

褒め過ぎ?

第三者的職務遂行・・・根拠に基づかなく、観念的、概論的議論が多い。評論番組の様。
 職業人としての個性・・・自分の意見を明確に示さない。他者との比較を恐れる
 創作力・創造力の欠如・・・従来通りの報告書や資料の作成、作ることが目的と考えている。
 振り返りや実績の分析をせず、次のステージに進んでしまう。

* 最大の弱点は、既得権を主張する、自己弁護に徹する。(長けている)

結果的に他所からは自分よがりに見える

言い過ぎ?

VII 業務達成のための情報の収集と分析

1. 必要性

- 急速な政策的な変化や社会状況の変化に適切に対応することが大学に求められている、PDCAを循環させながら、大学運営、教育・研究、地域への貢献等を迅速に行う必要があり、このことについては、すべての構成員が認識・共有しているものとする。→（必要性があり、重要）
- 大学の使命と中長期目的・計画を達成するという観点からの業務運営が求められていることも構成員が認識・共有しているものとする。

方向性的意思決定を迅速に、かつ、的確に → 業務を迅速に遂行

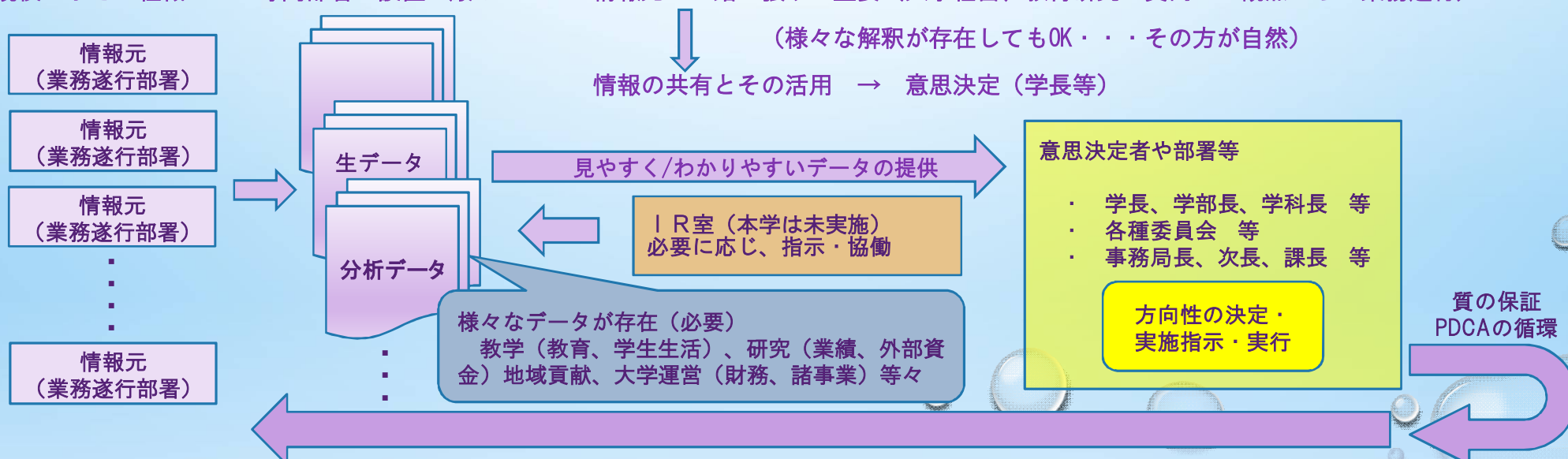
このためには

上述の観点を取り入れた情報収集やそれを読み取る能力が重要

2. 誰が

規模の大きい組織 → 情報の収集と分析の組織の立ち上げ（大学経営支援や教育・研究支援に直結）

規模の小さい組織 → 専門部署の設置が厳しい → 情報元での踏み張りが重要（大学経営、教育研究の質向上の観点からの業務遂行）



VIII IR機能

I Rの機能（インスティテューショナル・リサーチ）

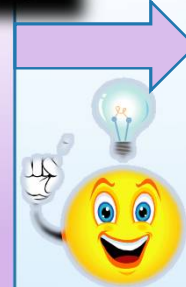
大学の諸活動・運営の実態把握とそのための必要な種々データの収集、そして分析し活用を図るための作業（いろいろな解釈が存在する）

業務の分析

- ・ 問題点の抽出（業務の必要性と現状の見直し）
- ・ 必要な情報の確定
（想像力と広い視野：他所を見渡す目）

基礎データの収集

- ・ どこにあるのか？
- ・ それには必要な項目は揃っているのか？
- ・ 揃っていないければ、
どことのマッチングが必要か？
新たな情報収集が必要か？
- ・ 個人情報が含まれているのか？
- ・ 継続的な収集が必要なのか？ 可能なのか？
- ・ 外部データの活用は？（無駄な労力は使わない。）
.....等



データ作成の際の観点

- ・ 何のために使うデータか？（再チェック）
- ・ 業務のどこに問題点があるのか？（再チェック）
- ・ 何を改善するためのデータか？（再チェック）
- ・ 経年変化を考える必要はあるか？（5年、10年？）
- ・ 構成別変化を見る必要はあるか？
- ・ そのデータから何が分かるのか？
- ・ 見やすさ、読み取りやすさは？
.....等
- ・ 自分なりの結論は出せるのか？
（作成者≠提案者 この気概が大事）

日本の高等教育での活用が始まって浅いため、その知見や蓄積は少なく、活動をしていくながらの共有が必要。

- アイデンティティを持つ
自分は自分であって、他人とは違うこと
- アクティブな意識
能動態、活動的、積極的な姿勢
- コラボレーション
目標の共有、協働意識を強く持つ

次ページ付録参照

一連の情報の処理（トランザクション）
業務分析→データ収集→データ作成（加工）→提案・提供
* 中断は不可

自分なりの分析をしながら
例えば：折れ線・棒・円のグラフ、散布図または組合せ
過去何年間遡れば傾向がわかるかな？
◎◎△△△？



機関としてアウトカム評価を適正に！！
がんばっている職員が評価される仕組み
作り：モチベーションの向上）



付録

協働の阻害要因の一つ……「仕事の専門化」

- ① 現在の仕事は非常に高度化すると同時に仕事自体の内容の変化も激しいため、その仕事に関わっていない人がすぐには理解できない仕事が増えていると考えられる。
- ② ある職務を一人の人間に固定し続けると、自然と仕事は専門化してくる。こうなると誰かの手を借りたい仕事があっても、仕事の内容を教えること自体に時間がかかるので、無理してでも自分でやってしまう。
- ③ 周りから見ても「何をやっているかわからない」「手伝いたくても手伝えない。かえって邪魔になるかもしれない」という意識になり、積極的に協力がしにくい状況が生まれてくる。

協働の阻害要因の一つ……「分業化」

- ① 分業化を行うことにより、職員の中には、「自分の仕事は自分でやる」「他の人の仕事には口出ししない」など 他者とできるだけ関わらない形での仕事のやり方が増えてくる。
- ② 「他部署の仕事を手伝うと上司に怒られる」「自分の業務を責任もって遂行しようとする責任感が強いことが高じて、メンタル面での問題が発生する」といったことが起きてくる。
- ③ 互いに協働しやすい仕事、たとえば、職場の掃除や多くの人でやると早く終わる作業などの仕事を、派遣社員やパートさんの仕事にしてしまい、職員同士が力を合わせて仕事をする機会を失わせている。

協働の阻害要因の一つ……「成果主義人事評価」

- ① これによって多くの人が、自分の仕事の目先の成果に意識が向かい、他者と協働して成し遂げる目標や、すぐには結果の出ない部下・後輩の育成などに、あまり関心がなくなってくる。
- ② さらにこれが悪化すると、「自分さえよければいい」「自分が得か損か」という意識で仕事を行ってしまうので、次工程への問題の先送り、部分最適な仕事のやり方、自分のところだけでは解決できない問題は放っておく、ということが起きてくる。

職場における協働の創生ーその理論と実践ー(中村和彦(南山大学人文学部)、塩見康史(株式会社スコラ・コンサルト)、高木穰(株式会社スコラ・コンサルト)) から引用